はじめに

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災（地震・津波・原子力発電所事故）とその後の青年たちの暮らしをまとめた生活記録集です。2012 年 3 月の第 1 号以来、第 2 号(2013 年 3 月)、第 3 号(2014 年 5 月)、第 4 号(2016 年 2 月)、第 5 号(2017 年 2 月)とこれまで 10 年間にわたり継続的に発行してきました。

東日本大震災がもたらした爪痕は、10 年が経過した今なお深く残っています。建物や電柱、車等が津波で流された後に瓦礫などを撤去し、やっと更地になった地域もあれば、津波で流された建物の上に新しい建物や道路が新しく建てられ、新しい地域として歴史を歩み始めた場所もあります。原発事故により、今なお自分が暮らしていた地域に入ることもできず、お墓参りをするにしても近くの道路から手を合わせるしかない地域もあります。

私たち日本青年団協議会は、東日本大震災が 10 年の節目を迎える年度に、これまでの地域の様相と、そこで暮らす青年たちの心の変化を振り返り、災害の記憶と震災の記録を次代につなげていくことをねらいに「生きる 6 号」の作成に着手しました。今号の編集委員には岩手県・宮城県・福島県の被災 3 県の他に、ここ数年で大きな自然災害が発生した北海道・岡山県・熊本県などの各地の青年たちの声も集約し、東日本大震災だけでなく日本全体の災害についての手記をまとめることとしました。編集委員会の場で「東日本大震災の時、あなたは何をしていましたか」と委員のみなさんに問いかけると、ぽつり、ぽつり、と一人ひとりが東日本大震災の時の自分を振り返りだしました。言葉に出すことによって記憶が整理されたり、今だから話せることがあることをこの語り合いの中で気づきながら、東日本大震災の後に各地で発生した度重なる豪雨や地震によって被害を受けた体験を『生きる』に残していくことの大切さを当事者の青年たち同士で確かめ合いました。

本稿の構成は、地域で青年団（会）活動をする青年たちに多く執筆いただいておりますが、その他にも、OB・OG、友人・知人、関係者の方々にも広く呼びかけて各々の体験を手記としてまとめ掲載しています。また、ぜひ話を伺いたいという方には編集委員が取材に出向き、聞き取りの記録や報告として掲載しています。初めて書く人もいれば、毎号継続的に書いてくださる人もいます。今だから言えること、10 年経ってやっと語れることも出てきました。今までわからなかったけれど、自分自身が負った傷の深さに気づかされたという言葉もありました。

私たち青年団の中に「震災の記憶を風化させてはいけない」という想いがあるからこそ、本稿の作成を提案したときに多くの仲間が協力してくれました。10 年という月日を経て、少しずつ新たな街並みが生まれ、地域に住む仲間たちの心にも変化が生まれました。手記の中で行動に移した人は新たな課題と直面しますが、屈することなく周りの仲間と協力し合い乗り越えてきたことを紹介しています。自分一人では乗り越えることが難しいと感じても、周りの仲間たちと手を携え支え合うことで、どんな壁でも乗り越えることができます。

東日本大震災の後から、「顔晴る（がんばる）」という言葉（造語）をよく目にするようになりました。どんな結果になったとしても、最後には晴れ渡る空のような笑顔で心も晴れやかになるようがんばろう、

という意味が込められており、教育活動の現場などで用いられてきた言葉です。時代が変わってもその時々の困難はありますが、「あの時は大変だった」と晴れやかな笑顔で思い出話ができる、あたたかい未来へ向かってこれからも共に歩みをすすめましょう。

地域青年活動には、お互いに書いたものを読み、書き手に思いをはせる学習活動の文化と歴史があります。第 1〜5 号ともあわせてお読みいただければ幸いです。

2021 年 3 月 30 日

日本青年団協議会　会長　中園　謙二

＜凡例＞

・各章の記録は執筆者出身地域を北から順（同一地域は執筆者五十音順）に並べた。ページの都合上、掲載地域が前後している章もある。

・編集作業においては、誤字・脱字の修正、漢字と平仮名の変換、必要に応じて改行などを行った。

・各記録の作成過程を各々の冒頭または末尾に記した。特に記載のないものは編集委員会からの呼びかけや依頼に応えて寄せていただいた手記である。

・文体等は記録ごとに統一することとした。

目次

はじめに

目次

手記・ききとりの記録

第一章　あの日から 10 年、私たちの今

あれから 10 年　泉田　将治（岩手県陸前高田市）　2
地域の人と外の人をつなぐ「桜ライン 311」－震災を次世代に伝えるために
岡本　翔馬（岩手県陸前高田市）　4
私ができることと、私たちができること。　伊藤　加奈子（宮城県仙台市）　18
「生きる」為の闘いのゴングが鳴った「あの日」から 10 年
岩崎　大輔（宮城県東松島市）　19
東日本大震災から間もなく 10 年　齋藤　　緑（宮城県山本町）　22
青年団員として震災と関わった 10 年　佐久間祥平（宮城県角田市）　24
団結により守られた白砂青松　芳賀　孝司（宮城県気仙沼市本吉町）　26
10 年目を前に　芳賀　広美（宮城県気仙沼市本吉町）　32
新たな土地で　古農　　満（宮城県大衡村/福島県浪江町）　34
もしもはいつでもやってくる　佐藤　竜太（福島県会津若松市/千葉県市原市）　50
浪江に戻って　志賀　重夫（福島県浪江町/南相馬市/いわき市）　52
真の復興をめざして　宍戸　克己（福島県伊達市）　66

第二章　各地域で発生した自然災害にまつわる青年たちの実践の記録

私の震災体験　阪　　光平（北海道夕張郡長沼町）　69
震災を体験して～北海道胆振東部地震の記録～　山野下　誠（北海道勇払郡厚真町）　73
震災から十年を迎え　榊原　裕一（岩手県陸前高田市）　79
青年世代の私たちにできること　長谷川　綾（福島県会津若松市）　80
これまでの 10 年、これからの 10 年　棚田　一論（埼玉県志木市）　82
東日本大震災から 10 年　中園　謙二（岡山県倉敷市）　84
高知から東北へよさこいで元気を届けよう！　大﨑　博士（高知県高知市）　86
令和 2 年 7 月豪雨を通して　大岩　　誉（熊本県球磨郡球磨村）　88
追憶　大塚　拓也（熊本県熊本市）　90
2 つの災害を通して　尾方　希望（熊本県球磨郡多良木町）　92
令和 2 年 7 月豪雨災害　木屋ありさ（熊本県球磨郡球磨村）　94
新型コロナウイルスと水害と　瀧森　道太（熊本県球磨郡湯前町）　96
地震から 5 年・・・熊本の今　古奥紗耶佳（熊本県上益城郡益城町）　99

第三章　道府県団の取組みと日青協の実践

震災の教訓を桜で伝える	日本青年団新聞 2017 年 1 月号（岩手県）	103
「ハード」の復興から「一人ひとり」の復興へ	日本青年団新聞 2020 年 2 月号（岩手県）	104
今できる形で学ぼう	日本青年団新聞 2021 年 3 月号（静岡県）	105
災害を他人事にしないために	日本青年団新聞 2019 年 8 月号（香川県）	105
災害と向き合う仲間たち	日本青年団新聞 2018 年 9 月号（岡山県）	106
地域の防災は学び合いから	日本青年団新聞 2018 年 1 月号（高知県）	108
復興に向けた地元の歩み	日本青年団新聞 2020 年 2 月号（沖縄県）	109
豪雨に立ち向かう若者たち	日本青年団新聞 2017 年 9 月号（福岡県）	110
1 日も早く生活を取り戻したい	日本青年団新聞 2016 年 7 月号（熊本県）	112
元の生活、少しずつ	日本青年団新聞 2017 年 5 月号（熊本県）	114
他所ではない、ここでの氾濫	日本青年団新聞 2020 年 9 月号（熊本県）	115
災害から学び、行動する若者たち	日本青年団新聞 2020 年 2 月号（各地域）	116
震災パネルのご紹介		118
「web 生きる」のご紹介		122

あとがき　　辻　智子（北海道大学）

＜資料＞

1.『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 1～5 号内容（目次）一覧

第一章
あの日から 10 年、私たちの今

あれから10年

泉田　将治
（岩手県陸前高田市）

まもなく未曾有と言われた東日本大震災から 10 年という月日が過ぎようとしています。あの日、それまであった『普通の日常』が失われ、生まれ育った街並みが消え去ってしまい、何が起こっているのかさえも解らないままに消防団活動に従事していました。次の日の朝に眼前に広がっていた景色は未だに脳裏から離れていません。瓦礫と化した街を歩き回り、遺体捜索した日々の中で経験したことのない事態に何とも言えない不安感や、虚無感に襲われたのを思い出します。

県団会長１年目が終わりかけた時の発災で、苦労をともにしてきた先輩や後輩を亡くしましたし、残ったメンバーも被災して自宅が無くなったりしていました。そのような状況の中で青年団活動を継続するのが困難であったにもかかわらず、変わらずに活動に参加してくれた事に感謝しています。また、全国各地からの暖かい支援や励ましの言葉も多数いただきました。あらためて感謝いたします。

この 10 年の間に更地となった大地にうず高く重なっていた瓦礫の山々が無くなり、世界最大と呼ばれたベルトコンベアーも消え、代わりに 12 メートルを超える防潮堤と周囲の山を削って重ねた嵩上げ地が完成しました。新しい街をゼロから作っていますので震災前の街並みの面影を探すのは難しくなってしまいましたが、これも同じ悲しみを繰り返さないという次世代へのメッセージになると思います。無数にあった仮設住宅も少なくなり居住地の高台移転も進み、嵩上げ地の中心に主だった施設が完成し、少しずつですが人の流れが戻ってきてはいますが、中心部以外はまだまだ空き地が多く茶色い地面が広がっています。

勤めていた会社が被災して無くなってしまい、震災前からつながりのあった建設会社に就職し、瓦礫の撤去やゼロから街を再生する仕事に携わってきました。初めての経験の連続で、仕事を覚えるのにも一苦労していました。

近年、大規模災害が頻発しており、毎年のように被害が報道されています。地震だけではなく台風や豪雨による水害など一度発災すると生活に多大な被害が生じてしまいます。備えあれば憂いなしとは言われます。普段の生活から災害に対する備えを万全にはできないかと思われますが、何か一つでも心構えとして備えておくことでも違いが出るかもしれません。あの不便な生活は二度と経験したくないですし、便利な生活に慣れきっている現在に災害が発生するとまた同じように対応できるか不安があります。

あの時に感じたのは、正確な情報が入ってこないとパニックを起こしやすくなるということです。ライフラインが遮断された状況の中で正確な情報を収集する手段の確保が大切なことを痛感しました。近年、避難情報の見直しなどが変更になっており、どのレベルでどのような行動をするべきなのかを確認しておかないといけません。どの情報が正確なのかを判断することさえ困難な状況下に陥ると、判断を誤ってしまいがちになります。一つの選択を間違うと命を失う危険性がある状況下では冷静な判断が

必要になります。普段から危機管理を心がけて生活を送るのは難しいですが、自分の生活圏のハザードマップなどを確認することや非常持ち出し袋を準備しておくなど簡単に始められる事から準備するのが大事ではないでしょうか。

まだ10年しか過ぎていませんが、あの震災を経験したのにもかかわらず災害に対する備えなどもう忘れてしまっていることも多くなりました。あれだけの大災害を生き抜きましたが、日常の生活から備えをしておかなければならないことを大事に思っています。

忘れないでいてください。災害はどこかの誰かの身に起きるのではなく、明日は我が身に起きるかもしれません。その時に慌てないように備えをしておくことが大事ですし、それを一人でも多くの人に伝えていくことも大事になります。あなたの大事な家族や人がいなくなる悲しみは非常に辛いことです。私たちが経験した悲しみや苦しみが繰り返されることのないように、大震災の経験が少しでもこれからを生きる人の教訓となり、同じ悲しみを背負うことのないように願っています。

【プロフィール】

泉田　将治（いずみだ　まさはる）

岩手県陸前高田市在住、出身。1975 年生まれ。元岩手県青年団体協議会会長。

2011 年 4 月 13 日、吉田恵三日青協元会長が陸前高田市訪問。

全国各地から集まる募金を受け取る。

2011 年 9 月 20 日、第 1 次ボランティア受け入れ時にも東洋大学の学生たちを案内。

2013 年 1 月 19 日、静岡県青年問題研究集会。被災直後の様子を参加者に話す。

地域の人と外の人をつなぐ「桜ライン 311」—震災を次世代に伝えるために

岡本　翔馬
（岩手県陸前高田市）

これは北海道大学教育学部（2020 年度）の授業（教育社会科学講義「青年期教育論」2020 年 11 月 20 日）でゲスト講師としてオンラインでお話をしていただいたときの記録を抜粋・編集し、ご本人の了解を得て掲載するものです。岩手県陸前高田市青年団協議会（市青協）と岡本さんたちが始めた「桜ライン 311」（津波到達点に桜を植える活動）は、これまで『生きる』でもたびたび紹介してきましたが、今回は、初めて話をきく人に向けて、これまでの活動の歩み、岡本さんご自身のこと、現在の陸前高田の状況、そして「桜ライン 311」についてうかがったお話をまとめたものです。（編集・まとめ　辻智子）

生き残った者としての罪悪感

1983 年生まれ、今、37 歳です。岩手県の陸前高田市の出身で、地元の高校を卒業してから地元を離れていて、震災をきっかけに陸前高田に戻りました。いわゆる U ターン組です。震災直後に避難所の運営支援をしたことがきっかけで一般社団法人 SAVE TAKATA（現在、一般社団法人トナリノ）の設立に参加しました。一般社団法人 SAVE TAKATA は東京にいた陸前高田市の出身者でつくった団体なので、事務所が東京なんです。でも現地での活動を増やしてくことを考えると、やっぱり現地に誰かがいないと無理なので、東京の仕事を辞めて現地に入ろうと思って U ターンしました。

そこから今に至るまで、いろんなことをやらせていただいています。現在、NPO 法人を三つ運営しています。他に大学の非常勤講師とか、防災士とか、岩手県や陸前高田市の行政関係の委員みたいなものもこれまでにいくつかやらせていただきました。自分には大きく二つのテーマがあります。一つが、震災をちゃんと次の世代に伝えていくこと。もう一つは、若い人たちが町に対する意識を持って、自分たちが何かをやっていく感覚を持てていくこと。そうでないと地方都市には未来がないと思っています。そこでの僕の役割は、日本全国の人をひきつける魅力、この町にかかわりたいなとたくさんの人に思わせられるような、共感を生み出す活動です。

震災直後は僕自身の家族の安否も確認が取れていませんでしたし、市全域が停電で、みんな避難所にいて、どこの避難所に誰がいるかってこともまだ整理できてないような、ほんとに震災直後に、僕は東京から車を運転して陸前高田市に戻りました。到着したのが夜だったので、その翌日、僕の家がどうなったかを見に行きました。

僕にとっての東日本大震災は、一言でいえば、生き残ったことに対する後悔みたいなものです。当時、僕は東京で仕事をしていました。東京での仕事は、すごく楽しかったですし、自分のやりたいことに突き進んでいく感覚は、僕の人生においてすごく大きな価値の一つだったんですけど、一方、陸前

高田の方には実家の家業をしていたり、市役所に勤めていたりする友人知人もいたわけです。僕のような、街の外で好き勝手やってる層がいて、他方に地域で頑張ってる層がいた。それで、今回の震災ではその地域で頑張ってる連中が死んでいった。なんで俺は生き残っちゃったんだろうって思いました。まちの外で好き勝手やってる層が死んで、地域で頑張ってる連中が生き残った方が、地域のためにはよっぽどいいんじゃねえかって思ったんです。ましてや亡くなった同級生や後輩のご家族は、僕が支援活動をしている支援先の人たちでもあるので、彼らの落胆ぶりを見ていると、生き残ったことへの罪悪感みたいなものはやっぱりありました。それが僕の中でのスタートになっています。とはいえ、どうやっても変えられない事実でもあるわけですから、起きたことに対して自分がどうアクションを起こしていくかってことが大事だと思うので、彼らの分まで、僕が一生懸命ちゃんと生きるっていうことに参画しなきゃいけないんじゃないかと考えて、今の僕の基礎があります。

こういうことなので、僕のモチベーションの根本は、避難所運営の手伝い、目の前に被災された人たちがたくさんいて、その人たちは僕がお世話になっていたり、知っている人たちで、その人たちを支えたいということが一つ。もう一つは、生き残っちゃった罪悪感みたいなもの。これを自分の中でどう整理していくか、扱っていくかというところがスタートでした。

「悲しい出来事」で終わらせない

今回の震災は千年に一度くらいの災害です。そこからスタートして、いろいろ事業をやっていく中で、そこに参加してくれる人、スタッフも含めたくさんの人たちがいます。その人たちと一緒に作っている事業、そこで生まれたものを、どう陸前高田市とそれにかかわる人たちに還元するか、自分ひとりじゃできないことをみんなで一緒にやっているので、その人たちの成果をどう最大化するかみたいなことに今の自分の意識を置いています。

千年に一度の時代を僕たちは生きてるということを、運が悪かった交通事故みたいに思うのか、それともめっちゃ大変だったけど、とても意義のある時代だったなと思うのか。前者か後者かは生き残った僕たちが選んでいいと思っています。僕は常に後者であり続けたい。だから今回の震災を、ただの悪い悲しい出来事に終わらせない、いかに終わらせないかということが、僕にとって今すごく大事なことです。僕の場合は、そういう考えで NPO という分野で、防災や地域のまちづくりなどに従事している。だから最終的には、この時代に生まれて幸せだったなと思って死ねるかどうかっていうのが、僕のすごく大事な一つの判断基準です。

実は、今、僕は三つの NPO 法人をやっています。桜ラインは後でお話します。二つ目の NPO 法人 wiz は、震災以降に岩手県に U ターンしてきた仲間と作っている NPO で、岩手県陸前高田市では減災防災とまちづくりを組み合わせた事業をやっています。ここにかかわってるのは震災で U ターンしてる連中ばっかりです。ほぼ全員が震災がなかったら戻ってきてないんです。震災後、人口移動がブームになったのですが、ブーム

が収まった後にも、ちゃんとそこに居続けたいとか、その地域に戻りたいという人たちが増えるような地方じゃないと岩手に未来はないと考えています。その選択肢を作ることを目的に、このNPOをつくりました。３つ目のNPO法人高田暮舎では、陸前高田市の行政の事業として移住定住を促進する事業を最近3年くらい、やらせていただいています。

３つのNPO法人で、お金ではだいたい１億２千万円くらいを動かしています。なぜ３つもやっているのかというと、まちづくりやNPOで動ける人たちが地方にはきわめて少ない、不足しているからです。僕自身も震災がなかったらNPOなんて絶対にやらなかったわけですけど、やってみると結構面白くて、多くの人たちと一緒に、多くの人達が「いいね」と思える絵を描き、そこに向かって、自分だけじゃなくて不特定多数の人たちのパワーを寄せて事業をしてくっていうのは、難しいことでもあるんですけどきわめて楽しいことでもあります。そこにプロフェッショナルとしての意識をもってやっていけたらいいなと考えています。もうひとつ大事なのは、結果を出すこと。プロセスや経過も大事なんですけど、ほんとに大事なのはそこでちゃんと結果を出すことだと考えています。

僕はどっちかというとイノベーティブな、革新的な、今までにない価値をつくりたいと考えていろんなことをやるタイプの人間なので、今まで、その地域だけ、自分だけでできなかったことを、外の人たち、自分以外の人たちとどうつくっていくかっていうことに挑戦するのが一番楽しいし、そこに僕の特性みたいなものがあるんじゃないかなあと考えています。

NPOという組織とその活動

NPOって聞くと、何となくいいことやっている団体だ、みたいに思う人たちが多いかもしれませんけど、全然そんなことなくて、ただの会社の経営と一緒だと思っています。NPOは特定の課題を解決するために自分たちだけでなくて社会全体を巻き込んで事業運用するという組織形態をとります。そういう意味では、株式会社よりよっぽど高い社会的責任を持っているはずで、それをベースに組織経営を行っていると考えます。課題解決を目的とする組織なので、その関係者（ステークスホルダー）、事業にかかわる人たちやそれを取り囲む社会、事業を運用するお金、課題解決には時間もかかる。その時間軸も含めて、これらがきれいに成立するような組織デザインをちゃんとすること、それを常に回し続けることが経営だと認識しています。

NPOの場合、寄附という財源がありますが、一般的に寄附というと多くの人たちの好意のお金という認識かもしれません。けれども、僕にとって寄附は対価です。社会的に何かいいことをやってるから集まるお金ではなくて、その団体があることで社会に何かしらのインパクトを、社会に何かしらの価値をそこに出していて、その価値に対してお金がつくのだと認識しています。だから結構シビアに物事を考えます。

こうやっていろいろなところでお話をさせていただくと、なんか、さも聖人君主みたいな扱い方をされるんですね。「地域のために戻って、地域のためにNPOをやって、超すごい人っすね」みたいに言われるんです

けど、そんなこと全然ないよって言わせてください。

個人という属性と、それをもう少し広げた地域、それをさらに広げた社会と、大きく３つに分けた時、僕が一番大事にしているのは社会ではなくて個人、個人をまず成立させることです。個人のところで、自分が満足できるような事業かどうか、そう感じられるかどうかっていうのが僕の中での出発地点です。自分がそうやったところで、それを地域に広げた時に、地域の人たちもハッピーになれるかどうかっていうことが大事だし、地域の人たちもハッピーにできるんだったら社会全体もハッピーにできるんじゃないかっていうふうに考えています。とかく NPO の業界って社会からスタートしがちなところがあるんですけど、社会からスタートすると擦り減っちゃうんです、やってる人たちが。だから、個人がちゃんと満足できる、かかわっていて幸せだなと思える事業を広げていくという方法をとっていかないと、NPO みたいな分野はハッピーにならないと思っています。

事業を組み立てていく上では８つの要素があると思っています。これをいかに成立させられるかということを意識しています。自分がやりたいことって、他の人から見た時に、何が優れていて、どこに訴求できるかということで、お金が集まるか、人が集まるかが決まってくる。だから、乱暴な表現をすると、どんなにいいことをやっていても、お金が集まらないところにはお金は集まらないんですね。でも大したことやってないところでも、お金が集められる時はお金が集められるんですよ。その差は何かと言ったら、いいことをやっている、社会的に必要なことをやっているかどうかというよりは、やっているその事業がちゃんと多くの人たちに、次の 8 つの要素でプッシュできているかっていうことだと思っています。

一つは、必要性。社会において必要性のある事業と感じてくれる人が多いかどうかということです。最近、コロナ対策にすごくお金が集まっていますが、あれは結局、コロナ対策にすごくお金が必要だって多くの人たちが思っているから、お金が動いてるんです。

二つは、自己投影性。自分の問題としてとらえられるかどうかです。例えば、コロナは自分もうつる可能性がある病気なので自己投影性は高い事象だと考えられます。

三つは、参加性。事業に対して参加する回数、何かしらの形でタッチする回数がたくさんあるかどうかっていうことです。わかりやすく言うと、一年にいっぺんしかないイベントよりも、毎月やってて年 12 回参加できるイベントの方が参加性は高いってことになります。

四つは、娯楽性。携わって面白いと思えるかどうか。これは、すごく大事なことで、誰かのために何かする、特定の課題のために事業をやるっていうのは素晴らしいことだと思いますけど、それに携わって面白いと思えない限り長続きしないんですよ。自分を擦り減らしてやるっていうのは基本的に長続きしません。だから娯楽性は実は結構大事です。

以上の４つを、僕は心情的な要素と分析しています。それに対して次の４つ、計画妥当性、実行実現性、対価性、発展性を、僕は物理的要素と呼んでいます。

計画の妥当性は、目的を達成するために

つくられた計画が、それを多くの人たちが見たときに、ちゃんと実現可能なレベルにできているかどうかということです。

実行実現性は、計画はいいとしてもそれをちゃんと実行できそうな雰囲気があるか、ということです。例えば水問題を解決したいとか、子どもの貧困を解決したいとかいってるときに、僕一人で世界を変えてみますっていうのはありえない。それはもう実行実現性がゼロに等しくて、だから例えば、こういう企業とこういう形で、ここについてはこういった人たちを巻き込んで、その中核に僕たちがいて社会全体を動かしていきますっていう説明の方が、よっぽど実行実現性を持っているわけでそういった要素も大事。

対価性は、その事業に携わることで何かしらの対価を感じられるものを得られるかどうかです。これは金に限らず経験であったり知識であったり、そこに参加することでこういう面白い人たちに会える、みたいに何でもいいんです。かかわる参加者の皆さんに、何かしらの対価をちゃんと提示できているかはすごく重要だなと思います。

発展性は外の人たち、巻き込みたい人がかかわったときに、自分のおかげでこの組織が発展したなって感じられるかどうか。自分のかかわる意味を、多くの人たちはちゃんと認識して、何かしらの意図をもってやっている。

いろいろ言いましたが、理屈も大事なんですけど、一番大事なのは、ちゃんとお話をすることで、事業に携わってもらうことで、かかわってよかったなと、一緒にやりたいなと感動させられるかどうか、それがすべてだと思っています。

陸前高田と復興の今

次に、陸前高田における震災の被害と、復旧・復興についてお話をします。

陸前高田市は、岩手県の一番南側、宮城県との県境にある自治体です。今回の震災では人口の 7.2%くらいの方が亡くなりました。被害世帯数、津波の高さで大きな被害が出てしまった地域です。平らなところに町はできるので、陸前高田の場合、高台にも住宅地はあったんですけど、市役所や行政系の施設、商業系の施設は全部、平らなところにありましたので、それが今回の震災の場合あだになってしまいました。当時のニュースで、陸前高田地は壊滅しました、というような表現がよくされていました。ほんとにまちの中心機能が文字通りすべて被災して、残ったのは高台にある住宅地だけというまちになっています。海のそばにあったものが全部ごっそりなくなったんですけど、今、海のそばの防潮堤の再生をやっています。高台に住宅地が残っていますが、その下に、新たにかさ上げをするエリアをつくって、その上に街を再形成する、そのための工事がおおむね３月（2021 年）に全部終わるという計画で進んでいます。

震災から来年（2021 年）の３月で 10 年になりますけど、一つだけ明確に言えることは、町を再生するのは 10 年じゃ絶対に終わらないってことですね。もちろん被害率にもよるのですが、住んでいる人間からすると、10 年かかってやっと町の基本的な土台ができたっていう感じです。家が建てられるようになりました、お店が再生できるようになりました、となって、じゃあ実際、すぐに全員が家を建てますか、すぐ商業再開できますかっていうと、当然やっぱり無理

です。10 年間の中で、そこに住んでいた人たち、商店の人たちの顔ぶれなど環境が劇的に変わってるので、それを乗り越えても家を建てたいとか、店を再開したいという人たちを、どれだけちゃんと増やせるか、まして、いま更地だらけの状況なので、そこの利活用をどうするかみたいなことも含めて、やっぱりまちづくりっていうのは 10 年なんかじゃとても終わらなくて、本当の意味での復興は、20 年、30 年かかっていくんだろうなぁと感じています。

その上で、僕がどういった認識で事業をやるかっていうことですが、復興・復旧に向けて最初は、いかに元の地域、元の状態に戻していくかが重要になります。社会インフラの復旧、建物を建てたり道路の復旧をしたりということです。そこに関してはやっぱり公共性のある事業者が有効なので、最初に復旧・復興を主に推進するのは行政という形になります。

そこがある程度進んでいくと、もともとの場所に戻すことだけが正しいのか、そうじゃないよねっていう議論が必ず起きます。要するに、もともと何かしら課題を持っていないまちなんてないわけですから、今回の震災をばねに復旧することは、「復旧」ではなくてさらにその先を見据えた「創造的復旧」、震災後に「＋α」することができないかというところが出てくる。復旧・復興に関しては基本的に行政が最初は主導するんですけど、行政だけではすべてに対応することは難しくなってくるので、行政も手を出すけど、行政主導で民間の人たちのノウハウを使いましょうとか、その人たちにかかわって主導してもらいましょうとなります。それが第二段階目です。最後が復興の段階なんですけども、ここになってくると、ある程度建物が建ったり、地域コミュニティの再生の見通しがたってきて、その町にもともとあったものに対していかに「＋α」した賑わいを作るかどうかに主軸が置かれてきます。そうなってくると、行政の範疇を超えて民間がやることが多くなって、NPO、NGO みたいなものが活躍する場がどんどん増えていくという感じです。

最初の頃、建物が建てられるようになっても復旧復興したって感じる人はほとんどいない。やっとゼロになったくらいにしか思わないんですよね。だからそういう意味では創造的復旧・復興が進んでいくと、その町に住んでいる人たち、それにかかわっている地域の人たちの復旧復興の感覚は高まっていく。僕自身は行政の仕事もさせていただいていて最終的にこの町にとってプラスになることができたらいいなと思ってるんですけど、その時、大事なことは、まず地域だけの出来事にしないっていうことです。外部の人たちが面白いな、関わりたいなと思える地域をつくりたい。

悔しさからの出発―桜ライン 311

「私たちは悔しいんです。」という言葉を掲げて集まった仲間でつくったのが「桜ライン 311」です。設立からまもなく 10 年になります。何が悔しいって、なぜこれだけの人が死ななきゃいけなかったのか、死なずにすんだのではないのか、という根源的な問いです。

岩手県の三陸地域は、繰り返し地震と津波の被害を受けています。1896 年の明治の地震の時から 120 年間で４回目です。単純に割ると 30 年に一度は地震と津波の被害

を受けています。今回の東日本大震災では最初に「未曽有の津波」と表現されていましたけれど、実はそんなことなくて、おおむね千年に一度、これくらいの地震と津波はこの地域に来ていたということが広く知られるようになりました。896 年に貞観（じょうがん）地震というのが文献に載っているのですが、それが東日本大震災の前の東日本大震災と言われていて、それが千年くらい前なのです。そのことは地質調査でもはっきりと判明しています。

その話を聞いた時、もし今回の震災前に陸前高田市の人たちが、この町に 20m 近い津波が来るということを知っていて、その認識があったら、高台に逃げた人はもっとすごく多かっただろうって思いました。そうしたらそこにはきっと死ななくてすんだ人たちがたくさんいただろうし、亡くならなかった人たちはたくさんいたんだろうなと僕らは思いました。「私たちは悔しいんです」と掲げているのは、やっぱり知っていると知らないのとは、これくらい大きな差になっていくので、だからちゃんと次の時代に震災というのを語り継がないといけないと考えている、僕らの活動の必要性はそこにあります。

東日本大震災では、岩手県で亡くなった方は約 5,800 人弱、約 6,000 人です。それに対して、明治三陸津波の時は 18,000 人が亡くなっている、岩手県だけで。今回の東日本大震災の 3 倍近い方が亡くなってるので、どれだけ明治の地震がこの地域において大きな出来事だったかっていうのは想像に難くないと思います。その明治の津波を経験した人たちが、やっぱり今回の出来事をちゃんと次の世代に引き継がないといけないと考えていて、その人たちが残したのが石碑です。「津波記念碑」と書いてある石、津波石とも呼びます。発生した明治 29 年 6 月 15 日午後 8 時云々、大地震の後には津波が来るよという教訓が石に彫られて残っています。この出来事は忘れちゃいけなくて次にちゃんと渡さなきゃいけないと、100 年以上前に経験した人たちが考えたわけです。

石碑ではなく桜で伝える

では、この石碑は、次を生きている僕らにちゃんと引き継がれたのか、というと、残念ながら、僕は知らなかったんです。情けない話なんですけど。津波記念碑は僕のおばあちゃん家にも一つ建っていまして、小っちゃいときから何回も行ってる場所なんですけど、記憶をたどると、あ、確かに黒っぽいものが建ってるなっていう程度の認識でした。だから、前の時代の人たちが何かを伝えたい、大事だと思っていても、それを、その次を生きている、次の世代がちゃんと受け取れるもの、受け取りやすいものじゃないと、次の時代は受け取ってくれない。悲しいけど一つの事実だなと思っています。前の時代の人たちは石碑で残しました。石碑は文字が彫れますし、それほど管理しなくてもいい、楽なんですよね。でも、それを多くの人たちが覚えていたとは思えない。それで僕らは、多くの人たちが覚えたいもので伝えたらいいじゃないかということで石碑の代わりに桜の木を植えて石碑と一緒に震災を伝えることができないだろうかと考えました。

津波の波をかぶったところと、かぶってないところに等高線のような線が地図上にできるのですが、それを僕らは「津波の最大

到達地点」と呼んでいます。そして、その、かぶったところと、かぶってないところの境界線に、桜並木を作っていこうと考えています。千年に一度、このような規模の地震と津波が来るわけですから、もし同じような地震が来て、もし同じような津波が来る可能性がある時は、この桜並木よりも上に避難してもらえれば、人的被害だけはゼロに近づけられるだろうと考えています。陸前高田市の場合、津波の到達地点が市内全部で170kmになるので、10m に一本の間隔で17,000本の植樹をめざしています。

なぜ桜にしたのかというと石碑じゃないものというのが出発地点でした。石碑は日本全国すごくたくさん建ってるんですね。その石碑には何が掘られていて、何を伝えるべく建ってる。でもそれを知ってる人はどれだけいるかというと、知らない人の方が残念ながら多いんです。でも先ほどお話したみたいに石碑は文字を掘れる良さがあるし、設置したら手をかけないで、そのまま置いておけるというように管理にコストがかからない良さもあります。でも残念ながら多くの人たちが覚えていたいというものでもない。じゃあ多くの人たちが覚えていたいと思えるもので震災を伝えようというのが僕らの出発地点です。

もう一つ考えたのは、人よりも圧倒的に寿命が長いものがいいねということでした。人の寿命はおおむね 80〜100 年くらいですから、今回の震災を経験した人たちも 100 年後にはこの町ですらゼロになってるわけです、絶対に。でも今回の震災は千年に一度なわけだから、極端な話、千年くらい伝えられるもので植えられたらいいよね、残していけたらいいよねと考えました。人より寿命が長くて、かつ多くの人たちが覚えていたいプラスのモチベーション、プラスの意識でかかわれるものがいいだろうということで木にしましょうというのはかなり早い段階から出ていました。いくつか木の候補があったんですけども、日本人にとって最も特別な木は何だろうか、最も多くの人たちが愛せるものは何だろうかといった時、やっぱり桜の木だよねと。ましてや、桜の木は春に花を咲かせますから、今回の震災で言えば３月 11 日の近くに桜が自ら「ここより上に逃げるように」って花を咲かせて伝えてくれると考えて桜にしました。桜の木は、あでやかで、満開の時にはすごいきれいだと思うんですけど、一方で散り際がすごく切ない感じの花です。亡くなっていった人たちに対する追悼の意味合いで僕らは植えていますから、散る時のはかなさのようなところに、亡くなっていった人たちに対する想いが重ねられると思って、いい木を選んだなと考えています。

桜は日本全国で 600 種類くらい流通していますが、僕らが実際に使っているのは原種と呼ばれる 9 種類を軸としています。原種と呼ばれるものは、寿命が長く、病気になりにくく虫がつきにくい。桜の木は人が観賞用に品種改良したものがほとんどなのです。ソメイヨシノにその特性が顕著に出ていますが、寿命が短かったり、病虫害に弱かったりします。17,000 本植えたものが長い時間、管理コストをかけずに残るということを考えると、日本にもともと自生して日本の桜のベースになっている 9 種類がいいだろうということになりました。多いのはそのうちの 3 品種で、それぞれ原種もしくはそれに近い大型のもので 300 年ぐらい

は平気で生き残ってくれるそうです。

品種をいくつも使う意図は明確に 2 つです。一つは、複数の品種を使うことで、ある品種だけが絶滅するような病気や虫が出たとしても、他の品種でリスクを軽減できること。もう一つは、桜を植える時、地権者さん、土地の所有者さんに許可をもって僕らは植えるわけですけど、その所有者さんにも花に好みがあるんですよね。白い桜が好きだったり、ピンクのサクラが好きだったり、ベニシダレのようなしだれてる桜が好きだったり、希望があるわけです。僕らの桜は、何で植えられてどういった意味を持っているのか、っていうことを地域の人たちにも理解してもらって、地域の人たちが語りつげるものにしてかなきゃいけないわけですから、だから地域の人たちが好きな桜にしたらいいのではということで、色を分ける、特性を分けるということをしています。なかには、木が大きくなるとちょっと困る現場もあるので、そこにはシキザクラっていう大きくならない品種を使うこともあります。シキザクラは漢字にすると春夏秋冬の四季で、春と秋の両方に花を咲かせるという特徴があって、今ちょうど秋のシーズンで咲き始めたところですが、地域のおじいちゃんおばあちゃんに、めっちゃ人気があります。

多くの人がかかわること

桜を植えるのは震災の伝承のためです。伝承の対象は地域の子どもたちです。子どもたちに、あったことを伝えようというのが出発点です。千年後に、陸前高田に住んでる人たちに、もし東日本大震災みたいなことがもう一度あった時、その人たちの命を守れるかっていうのが僕らにとって一番大事なことです。でも、今はそれだけではなく、日本全国の方に参加してもらうという特徴があります。今まで一番遠くから来た人はアメリカのテキサス州からでした。ほんとに日本全国の皆さんにご参加いただいてやっています。

なぜ、日本全国や世界から来てもらってやっているのかというと、日本列島は海に囲まれているので、日本全国どこにいても津波の被害にあう可能性があるからです。南海トラフ地震では、愛知、神奈川、四国、九州まで広域に被害が出るとされていて、政府の想定だと最大で 33 万人が亡くなるそうです。今回の震災の実に 16 倍です。もしその通り、南海トラフ地震が起きて、ここで想定されている津波が来て、33 万人が亡くなるということが、もし起きてしまったら、今回の東日本大震災の記憶を受け継がなかったことになるなぁと僕らは感じています。なので、今回の東日本大震災の教訓というのを、この地域だけ、この東北にだけ残すんじゃなくて、日本全国の人たちにちゃんと伝えて、災害や減災に意識を持ってもらうことが大事だと考えています。「桜ライン 311」は、津波で亡くなる人をゼロに近づけるということが一つのミッションでもあるので、それは日本全国で同じことが言えるだろうと思っています。

今、陸前高田市内でだいたい 340 か所くらいに桜の木を植えていまして、植樹本数としては 1,730 本くらいです。植樹や、植えた桜の木の管理も含めて、地域の子どもたちや日本全国の人たちを含めて 6,400 人強の人たちがかかわっています。

災害の伝承を団体の目的としてるわけで

すが、それにはいくつか条件があると思っています。あくまで持論ですが、3点あって、一つが、地域の人たちが「いいね」と応援できること。地域の人たちに残していきたいとなったら、そこの地域に住んでいる人たちと一緒にやれるものであることが大前提なんですね。これが一番だと思います。じゃ地域だけで完結させていいかっていうと僕はそうじゃないと思っていて、地域の外の人たちも関わりやすい方が残るよね、と思います。

今、陸前高田市の人口が19,000人くらいです。19,000人でできることにはやっぱり限界がある。19,000人全員が参加したら相当大きいことできるとは思いますけど、でも19,000人だけで完結しないで、日本全国の例えば1億2,000万人くらいの方と一緒にやれることをもしつくれたら、どっちが残っていくかっていったら、絶対後者ですよね。なので、地域を一番にすることはもちろん大事ではありますけども、地域だけで完結せずに、そのストーリーや、やっていることに共感する人たちがかかわりやすい余白をつくってあげられるかどうかっていうことがすごい大事です。さらにいえば、地域の人たちと、地域の外の人たち、そこに共感した人たち、この両者がずっと残していきたいよねって、ずっとかかわってきたよねって思えるような事業かどうかということです。

この活動の中心を担ってるのは僕ら桜ラインです。有給のスタッフ7人、全員一応フルタイムで、理事を含めて16人ぐらいの組織です。それにもちろん、桜を植える土地を提供してくださっている地権者さん、地域の人たちがいらっしゃいます。その外側には、一緒に桜の木を管理をしてくれたり、植える場所を探してくれたり、それを応援して一緒にやってくれる、植樹もしてくれてる地域の子どもたちも含めてそういった地域の住民がいます。さらにその外側には、毎回のように植樹会に来て、桜の木を植えてくれる人達がいて、さらに行くのはなかなか大変だけどって言って、うちの団体に寄附をしてくださる方がたくさんいます。さらに外側には、プロジェクト賛同者、うちのFacebookをシェアしてくださったり、毎年桜のシーズンになると全国の企業さんとのチャリティのプロダクトを出したりするんですけども、それを買ってくださる人たちも含めて、すべての人が伝承の担い手であるはずだと考えます。伝承の担い手と聞くと、ちょっとハードルが高すぎて、「いやいや、自分なんて」って思う人もたくさんいると思うんですけど、そんなことは全然なくて、その場所にいながらその人の生活をしながらかかわれるような、その役割をちゃんと提示できるようなプロジェクトかどうかというのは、多くの人たちが参加して、多くの人たちがかかわり続けられる仕組みをつくるという意味では極めて大事なことだと思っています。

51,000人というのは植樹の参加者の概数です。最低限の数字です。桜の木は今だいたい3mぐらいの苗木を使っていて、これを3人で一本ずつ植えるという作業をしているので、まあ17,000本植えるころには、少なくとも植樹に 50,000 人以上の方が延べ人数でかかわっていただけるプロジェクトだということです。

そして、お金のお話。桜1本に実際どれくらいかかるかというと一本植えるのに1か

所あたり 18,000 円ぐらいです。これが17,000本でおおむね3億円ぐらいです。

植えるというのは、ほんとにプロジェクトの一部分の作業であって、事前に土地の所有者さんを探して、その人にコンタクトを取り、僕たちはどういう意図で植えているのでというような交渉をして、その上でOK だったら植えるということになります。これが植える前段階です。植えた後も、そのまま置いておけるかというとそうではなくて、病気になったり、虫が出た時に対応をしなきゃいけなかったり、肥料を定期的にあげなきゃいけなかったりという半永続的な管理作業があります。こうした植樹の前後も含めて、かなり人手が必要なプロジェクトです。そこで5億円ぐらいの人件費がかかるとして、必要な資材がおおむね1億円として、20年間で8億円ぐらい集められたら一つの形にできると思っています。

陸前高田の人たちにとっての桜

桜を植えるだけでも少なくとも 20 年くらいはかかると考えています。大きく2つ理由があります。一つは、復興関係の工事など区画整備の事業が終わらないと手を付けられない場所が多数あるということ。実際のところ、まだ復興事業が全部終わっているわけではなくて、10年たってから着手するというようなところもまだまだたくさんあります。あともう一つは、地域の人たちが震災を忘れないためにやりましょうって心情的に思えるようになるには時間がかかるということです。

想像してもらうとわかりやすいですけど、皆さんの家が津波の到達地点上にあったとします。それが津波で流されて家が全損し、お父さんお母さんを亡くしました、といった時、震災のことを忘れないために自宅に桜の木を植えたいと思いますか？ 「NO」の人たちが結構いるんです。それはなぜかというと、桜の木を見るたびに、その被害を、自分のお父さんお母さんを守れなかったことを、毎年いやでも思い出すということだからです。桜を植えるというのは、外の人たちからは見た目のいいものかもしれないですが、あくまでも震災遺構の一つでもあるんです。ただ同時に、被害にあった人たちも震災があったことは絶対忘れちゃいけないとは思っている。だから、最初の悲しみや絶望をちゃんと乗り越えないと、「残していこう」とはならないんです。そこに至るまでには、人によって長い時間が必要で、最初からそう思える人はごく一部で、やっぱり5年、10年、20年という時間経過を経て、初めてそう思えるというふうになります。

そういうわけで、桜ライン311としては、5～10年で全部植えるということは最初から考えていなくて、地域の人たちが前向きになった時に、こういう事業をやっていて、以前は「無理」って思っていたけど、今だったら参加したいかもって思い続けられる組織であるということの方が大事だろうと思います。

僕たちがめざしている未来とは、自然災害で人が死なないこと。震災を経験したかどうかというのは、その時そこに住んでいたかどうかという基準でしか分かれ目がないので、被災経験のない人たちに、いかに被災経験や震災の教訓を自分のことだと認識してもらって、それにかかわれるようなものをできるかどうかが僕たちの使命です。東日本大震災を僕は陸前高田で経験してい

ないけど、あれはめっちゃ大事、これは忘れちゃいけないって言ってくれる人が世の中にどれだけ増えるかということが、桜ライン 311 の使命だと思っています。なのでそのために、実際に陸前高田に来てもらって、桜を植えてもらったり、震災のことをお話しする場をつくったり、南海トラフ地震が来るといわれている地域からも講演依頼がありますけど、そこで減災の意味を話したりしています。

また将来、桜の並木を通して地域の人と地域外の人がつながって交流が生まれる、そんな場を提供するのが、うちの団体が陸前高田市に、そして日本全国に提供できる価値なのかなと考えています。

地域の人と、外の人をつなぐ

東日本大震災の教訓を次世代に残すために始まった私たちの事業ですが、今は僕たちの意図は大きく４つあります。一つは、震災があったから、ということでいいから現地に来てほしいということ。現地に立った時、行った時の情報量は全然違う。今の時代、インターネットやテレビがあるので、そこである程度のことは見られますけど、ぜひ現地を訪れるきっかけにしてほしい。二つ目は、防災・減災に実際に携わるきっかけを作りたいということ。三つ目は、地域の人たちと外の人たちをつなぐ組織でありたいということ。

この点について、少し丁寧にお話しします。桜の木を植える土地の所有者のおばあちゃんの話をします。80 代後半くらいのおばあちゃんですが、東日本大震災で息子さんを亡くされました。おばあちゃんの旦那さんも震災では生き残ったんですけど、その後、体調を崩して亡くなられて、おばあちゃんは今一人で陸前高田に住んでいます。そのおばあちゃんからある日、電話がかかってきたんです。植えてある桜の木なんですけど、自宅を建てるので、一時的に預かってほしいということでした。いったん桜の木を抜いてほしいということですね。それで、僕たちから「もちろん大丈夫ですよ」ってお返事したのですが、おばあちゃんから「抜いた桜の木は、必ずその後にそこに戻してください」といわれました。そこには全部で 10 本くらい植えてるんですけど、おばあちゃんからは、一番端っこから一番端っこまで植えてある桜の木を順番も変えずに元に戻してほしいって言われたんです。順番を変えないでって言われるのは初めてだなぁと思って、順番に何かしらの意味があるんだろうなぁと思いました。それで、何か意味があるんですかって聞いたら、そのおばあちゃんが言うには、その 10 本の桜の木を植えた人が日本全国から来たボランティアさんなんですけど、その植えたボランティアさんが定期的に自分が植えたの木が今どうなってるかを見に来ている、だから順番がわからなくなっちゃうと、どの木が自分が植えた木だかわからなくなるから、それでさみしく思う人たちがたくさんいるだろうから、植えてあった桜の木の順序を変えてほしくないんだということでした。それを聞いて、ああ、すごく愛されているんだなぁって思ったんです、その桜の木。

そのおばあちゃんは、以前、「私は正直、生き残ってよかったと思える瞬間はありません」と話していました。息子を亡くし、旦那もいなくなった。その桜の木を植えた場所は、実は多くのご遺体があがった場所で、

すごく立派な追悼碑をおばあちゃんは自費でつくっています。そんなおばあちゃんが、「でも、明日もちゃんと生きなきゃいけないなっていうふうに思うのは、そうやって私のことを気にかけて会いに来てくれる人たちがいるからです」と言うんです。そして、そのきっかけをつくってくれた桜ライン311には、ものすごく感謝しているって言ってくれたことがあります。

それは、僕からすると本当にスコップで頭を殴られたような衝撃でした。そんなこと全然意識しないで僕らは植えていたんです。津波の到達地点に、その伝承のために、植えましょうと。それで、自分たちだけで植えるのも難しいし、伝えたい人たちもいるわけだから、伝えたい人たちと一緒に植えましょうというところからスタートしました。そうしたら、その地域のおばあちゃんと植えた人たちがつながって、そこで自分たちで新しい価値をつくっていてくれていたんです。実際、陸前高田には、ご家族を亡くされている方がすごくたくさんおられます。そういった人たちが、まちの外の人たちと一緒になって、かかわって、それが地域の人たちの明日を生きる力になっているということで、僕はその話を聞いた時、僕らはすごくいいことをしているんだなぁって思いました。すごく嬉しかった。だから、そういったものを、陸前高田にできるだけたくさんつくりたいと考えています。だから、今は、できるだけ、地域の人も、外の人も参加して、その人たちが一緒に過ごすという場を、できるだけ提供したいなぁと思っています。

最後に、僕たちの意図の４つ目は、17,000本の桜並木ができたら絶対、観光客が来るわけです。だから、この桜の木が震災を伝えるものとしてだけではなく、次の時代にとっては町の財産だと思えるものになってもらいたいなと思っています。東日本大震災があったので、震災前よりも、この町を訪れる人たちはきっと多いです。でも100年後も東日本大震災のことを言ってるんですかって言ったら、それはそれでちょっと切ないなと考えています。今は、東日本大震災＝陸前高田で、それは仕方ないかもしれないですけど、50年、100年と時間が経っていく時に、陸前高田＝日本で有数の桜のまちってなっていったら、このまちの多くの人たちが、自分のまちを誇らしく思えると思いますし、桜の木を見に来た人たちは、なぜこのまちは桜でこんなに有名なんだろう？と思うわけですよね。その時に、実はこのまちは過去にすごく大きな災害を受けていてって伝わっていく方が、震災の経験のない人たちにとってわかりやすいんじゃないかなと考えています。

―ありがとうございました。

【プロフィール】

岡本 翔馬（おかもと しょうま）

岩手県陸前高田市在住、出身。1983年生まれ。NPO法人桜ライン311代表理事。

桜ライン311

私ができることと、私たちができること。

伊藤　加奈子
（宮城県仙台市）

「あの頃は大変だったでしょう～」と、県外の初めてあった方にはよく言われますが、やっぱり、「私は、津波の被害にはあわなかったので…」と、答えてしまいます。それが、この東日本大震災では多くの被害をもたらしたからだと思います。

県団に入ったころには、すでに県外からの研修の受け入れを行っており、中でも法政大学の学生の受け入れは、毎年だったこともありその年で研修の内容が変化していました。当初は、現地の視察・話を聞くなどでしたが、2018 年度ぐらいから、映像を撮って大学で発表をする方向に変わっていました。学生もさまざまで、やっぱり学生だな～と思う人もいれば「これは、大学に戻ってからみんなに伝えたいです」と真面目な学生もいました。ただ、それでも「現地で見てほしい」「現地で感じてほしい」これは、今年度公開された、山元町にある震災遺構の中浜小学校を見て感じました。ここは、誰も亡くなっていないことと、多くのキセキや住民の願いが多くある建物です。なぜそう倒れたのか、なぜここには傷が一つもないのか、ここにはどんなコミュニティがあったのか。知ることができるのは、現地でしかないと思います。可能であれば、法政大学さんには今後も続けてほしいと願います。また、全国の青年にも東北の復興を感じながら、当時の事を感じに来てほしいと思います。

震災から 10 年。私は今年、職場で「災害支援チームみやぎ」の研修を受け、今後災害があれば、学校に派遣されることにもなりました。実際、臨時で働いているため、めったにある事ではありませんが、いろいろな学びをすることもできました。

地域で生きる青年として、何ができるのか、一人ひとりがそろそろ答えが出るころなんですかね？

【プロフィール】
伊藤　加奈子（いとう　かなこ）
宮城県黒川郡大郷町出身。宮城県仙台市在住。学校事務。1984 年生まれ。宮城県青年団連絡協議会会長を経て、2020 年～現在日本青年団協議会常任理事。

「生きる」為の闘いのゴングが鳴った「あの日」から10年

岩崎　大輔
（宮城県東松島市）

＜ごくごく普通の日常だった筈なのに…＞

2011 年 3 月 11 日。あの未曽有の災害からあっと言う間の 10 年が経過しようとしている。毎年この時期に必ず思い出す事がある。東日本大震災発生１週間前の事である。

当時、宮城県団事務局長だった私は、例年の様に県団役員と、福島・岩手の会長たちや役員と一緒に、東京の日本青年館で「全国青年問題研究集会」に参加していた。

今までの事、そして来年度の事を、青年団流に共に夜明かし酒を呑みながら熱く語った。そんな、ごくごく普通で当たり前で幸せだった日常が、あの日を境に一変するとは・・・

＜生きる為の闘いのゴングが鳴ったと言っても間違いない＞

あの日から一変した私（たち）の日常。その日を境に被災者は正に「生きる」為の闘いのゴングが鳴ったと言っても間違いはないだろう。今まで発行されている「生きる」で記したが、私は幸いな事に家や家族は無事だったが、働いていた職場が被災し壊滅状態になった。

震災発生から２年後くらいまでは、職場の再建やそれに伴う出向に合理化、そして大幅な人員削減を経験した。当時は職場労組の幹部という事もあり、出向中の組合員への現状報告に県外の企業へ向かう際には毎回、「何で俺ばかりこんな役目？皆からどんな罵声を受けるのか」と真剣に悩んだ事もあった。被災したままの濡れた布団で寝起きをしながらも、職場の再建を夢見て働いてきた同僚達が職場を去る時には身を切る思いを経験した。

３年後くらいからは、職場も徐々に再建し始め、環境もまだ不完全な中でも日々、手探り状態で毎日、悪戦苦闘しながら業務を進めた事を思い出す。

４，５年後には自治体の復興計画に伴う防潮堤建設で企業移転問題が発生し、地区労組役員として、それに関係する同業他社との連携問題に右往左往することも経験した。

６，７年目には、微力ながら企業も復興が進み、私も今度は管理職になった。働く者の立場から経営側へと立場が変わり、業績や様々な管理に追われる事になった。

あの日が無くても 10 年という月日は流れるけれど、本当にあの日を境に生活が一変し、今日まで気持ちが休まる事無く、日々闘い続けて来たと言っても間違いでは無い気がする。

＜生かされた命だからこそ、前に進まなければならない責任感＞

こんな中でも心が折れることなく（←少しは折れた事もあるかな？）今日まで進んで来た原動力は、やはり「自分は生かされた命だから」という一心しかないと思う。

震災後に宮城県青年会館の理事長（当時）から、「お前は青年団やってきたから生きて

帰って来たんだ。青年団してなかったらとっくに死んでたぞ。お前に死なれて困る、お前にまだ（県団の）局長してもらわなきゃならないって思ってる仲間の想いで生かされたんだぞ。」と言葉をいただいた。本当にその通りだと今でも思っている。震災発生直後に仙台市内から自転車で状況を確認に石巻までやって来た当時の県団会長。携帯の留守電に何回も何回もメッセージを残してくれた県外の仲間たち。震災後１ヶ月してようやく仙台の県団事務室で涙ながらの再会を果たした当時の県団役員たち。今まで当たり前の様でも、意外とみんなの想いを理解していなかった私に、何かを気付かせてくれた大事な存在。そのみんなの想いがあったからこそ生かされた命、そう今まで感じている。だからこそ負ける訳には行かないのである。

＜休む事無く続く東日本大震災からの闘い＞

震災からの闘いは休む事無く続いている。昨年１月、職場は突如、会社更生法の申し立てを（事実上倒産）行った。申し立てに至った理由は様々だが、一番の原因は東日本大震災で壊滅した設備等の再建の為に、多くの資金を費やし経営を圧迫した事が影響している。

申し立て後、私は更生業務担当の部署へ異動となり、債権者への応対などの業務を担当する事になった。当然、今まで経験したこと無い業務は手探りの状態が多く、正直何をして良いのか解らない日々が続いた。でもここで助かったのは「県団局長の経験」である。文書管理や作成、段取計画など、少なからず県団局長の経験が役に立った。（県団局長経験が無ければ正直、自分が潰れていたかも知れない。恐るべし青年団活動の経験値・・・）

更生計画は認可されたが、今回も残念ながら従業員の半数が職場を去る事となった。震災から長い間、共に職場の再建に汗を流して来た仲間を失うのは本当に辛かった。

私は現在、新たな部署で新たな業務に携わる事となり、慣れない見積積算・営業活動から現場管理までと、日々悪戦苦闘の毎日である。闘いは休まる事無く続いている。しかし・・・・・

生きる為には当たり前の「闘い」なのでは無いだろうか・・・・

＜20 年目・30 年目‥そして未来へ向けて＞

震災発生直後、私や仲間達が経験したこの震災の後世に何らかの形で伝えていく必要があるのでは？という思いが強かった。青年団的にも「生きる」という様な素晴らしい記録書を発行していただく事が出来た。この間、自分に出来る事があれば何でも協力したいと思い、被災地学習の受け入れなども積極的に行って来た。しかし、そんな私でも一時期「もう、震災の出来事なんてどうでもいいや！」と思った時期があった。何故だろか？理由はハッキリと解らないが、恐らく自分自身が出来事を伝えて行く事に疲れていたのではないかと思う。

震災直後のガレキが散乱した状況で、震災の被害や悲惨さを伝えるのは容易いが、復興が進むにつれて整っていく街並みを見ながら当時の様子を説明する・・・これがなかなか難しい。そういうジレンマがあったのでは無いかと振り返えればそう感じている。

しかし、この間にも日本各地で様々な自

然災害が発生した。そういう中で生活の再建に尽力している方々は沢山いる筈だし、その災害を後世に伝えて行く必要は重要であると思い行動をしている方々も多くいる。自然災害が発生した状況もだが、そういう環境下に置かれた人々の様子、そして生活の再建に取組む様子、今後類似する災害が発生する可能性もあるのだからこそ、そういう内容を後世に伝えて行く必要があるのでは？と改めて学んだ。

震災発生時の非現実な状況から、1年、2年と生活環境の改善の様子、そして現在までの歩み・・・震災を経験した私たちが後世に伝えて行くべきモノは、まさに「生きる」為の闘いそのものなのでは無いだろうか？と今、強く感じている。

20年、30年、これからドンドン時代は進み、いつか昔の様に生活環境も整いながら震災の記憶も薄くなっていく日が来るかも知れないけれど、あの日に起こった出来事を忘れることなく、経験した様々な事や命の大切さを忘れることなく、今後もこれからの未来に明るく前向きに進んで行くように頑張って行ければ良いなと思っている。

【プロフィール】

岩崎　大輔（いわさき　だいすけ）

宮城県東松島市在住。会社員。1975 年生まれ。宮城県登米郡（現登米市）豊里町出身。宮城県青年団連絡協議会参与。

2016年1月、宮城県石巻市大川地区。被災地を案内しながら説明をする岩崎さん（写真は『生きる』第4号より）

東日本大震災から間もなく10年

齋藤　緑
（宮城県山元町）

東日本大震災から間もなく 10 年の節目を迎えます。各種メデイアで様々な角度からの報道が増え、ざわざわして来ている感じがします。

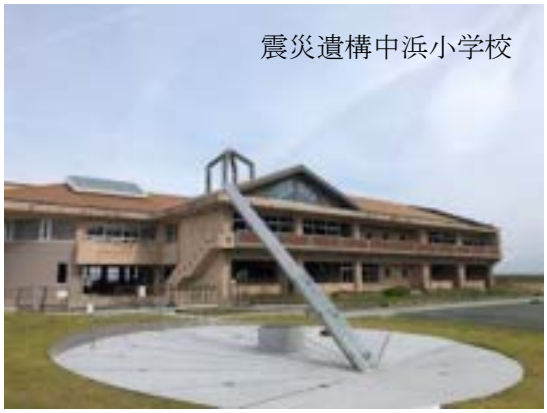
10 年・・・あっという間のようにも感じるし、長かったようにも感じます。町はすっかり様変わりをし、生活は震災前とは全く変わってしまいました。

私は今、山元町に昨年（2020 年・令和 2 年）9 月に開館した「震災遺構・中浜小学校」にガイドとして勤務しています。当初は 7 月に開館予定でしたが、新型コロナの影響で見送られ、9 月の開館になりました。

「中浜小学校」は海から 400m しか離れておらず、すぐそばに河口があり、その部分だけ防潮堤が切れていました。地震発災後約 1 時間後に津波に襲われ、最大の津波の高さは 20m。校舎にいた児童・教職員・近隣の方々等 90 名が垂直避難で屋上に上がり、危機一髪で命を取り留めました。ギリギリで助かった要因にはそれまでの様々な準備や工夫があり、子ども達の学び舎としての役割は終えていますが、『90 人の命を守り抜いた小学校。ここであったことを、あなたの目で見て、考え、読み取って、未来の災害へ備えるための知識に変えていってください。』をテーマに防災に関する様々ヒントを学べる場として生まれ変わった校舎です。大津波の痕跡を出来る限り残したまま整備し、震災の教訓を風化させず、災害に対する備え、意識の大切さを伝承する震災遺構です。コロナ禍にも関わらず、来館者は後を絶たず、1 日最多で 500 人を超えた日もありました。そして令和 3 年 1 月 17 日には 1 万人を超えました。足を運んで下さった方々は、実際に来てみないと分からない事がありますね・・・と感想を述べて下さる方が多いです。

また、ガイドをしていて気づいた事は、どの地域から来て下さった方でも、あの時に感じた事をそれぞれの胸の内に秘めていらっしゃるという事です。説明をしていると、ご自分の経験や思いをぽつりぽつりとお話しして下さる方がほとんどです。これまでなかなか表に出す事のできなかった心の奥底に押し込んでいた気持ちを「中浜小学校」に来て、吐き出し、来た時よりもスッキリして帰られる方がたくさんいらっしゃいます。あの甚大な災害は、甚大な被害を受けた方だけでなく、あの時をメデイアを通して見ただけの方でも、心に深く重く残っている方がたくさんいらっしゃる事に改めて気づかされました。ですので、「震災遺構」にはそういう役割もあるのかな・・・と感じています。こちらからの説明だけでなく、出来るだけ来館して下さった方のお話も聴くように心がけています。

間もなく 10 年・・・でも 10 年はただの通過点です。目に見える復興も道半ばですが、人々の心の復興はまだまだこれからです。この場所で自分が出来ることを粛々とやっていきたいと思います。



【プロフィール】

齋藤　緑（さいとう　みどり）

宮城県亘理郡山元町在住。幼稚園教諭。1967 年宮城県（旧）古川市生まれ、（旧）築館町・（旧）志津川町育ち。元日本青年団協議会副会長（日青協経歴：98-02 年度常任理事、03-04 年度副会長）

青年団員として
震災と関わった10年

佐久間　祥平
（宮城県角田市）

私は東日本大震災から 10 年が経つ現在まで「青年団員」として過ごしてきました。そしてその時々の立場で行ってきたことを振り返りたいと思います。

震災直後、自分の街から仙台に行くこともままならない状況に私は無力さを感じていました。以前、「生きる」にも書きましたが、青年団のことを考えてはいけないような、まずは日々の生活を取り戻さなくてはとそこだけに必死だった気がします。そして 10 年が経つ今でも、仕事が再開できるまでの 10 日間は順を追って説明できるほど鮮明に記憶に残っています。それくらい大きな出来事でした。

その年の４月から宮城県青年団連絡協議会の会長となってからは、日本青年団協議会に集められた全国からの義捐金を基に「がんばっぺ～基金」を設立。県内の被災した青年団体へ呼びかけ、流されてしまったチームのユニフォームや太鼓などの費用の足しにしてもらうことを目的として、宮城県青年団地域活動再生支援金助成制度を設けました。県外からの視察団などの受け入れも積極的に行い、たくさんの青年団の仲間にも来ていただきました。

2014 年に日本青年団協議会の役員になってからは、またいつどこで発生するかわからない大地震や大津波を忘れない、風化させないことを意識しながら活動してきました。

まず取り掛かったのは東日本大震災パネルの作成でした。震災直後の生の青年の声から支援者側の声、今後の防災・減災まで１年に一部ずつつくり、担当者も私から中園会長（当時常任理事）に引き継ぎながら３年をかけ三部作を完成させました。全国に貸し出しを行っており、いろいろな事業の際に展示され、ご覧いただいた皆さんの頭の片隅に常に入れておいてほしいと切に願っています。その後は「web 生きる」と題して、以前のように毎年は冊子にしないものの、東日本大震災の被災地の方はもちろん、熊本地震や大雨・洪水など毎年のように起きる自然災害を中心に被災された地域の青年から寄稿していただき、皆さんの目に触れることができるように現在も取り組んでいます。

はじめは「被災した仲間に元気を取り戻してもらおう」ということを念頭においてスタートした私の運動も、現在は「次に震災が発生した時に一人でも生き抜いてほしい」という思いにシフトチェンジされてきています。もちろん地震や津波なんて発生しないに越したことはない。ただ歴史上必ずいつかは起きる可能性がある限り、私は青年団を卒業してもこのことは伝えていきたいと思っています。未来の仲間や子供たちのためにも。

【プロフィール】

佐久間 祥平（さくま しょうへい）

宮城県角田市出身・在住。会社員。1976 年生まれ。宮城県青年団連絡協議会会長を経て、2014 年～2015 年日本青年団協議会常任理事、2016 年～2019 年同副会長、2020 年～現在同監事。

団結により守られた白砂青松

芳賀　孝司
（宮城県気仙沼市本吉町）

震災から３年、気仙沼市本吉町大谷では、海、山、里を大切に想う若手有志が集い、復興へと歩みはじめた故郷の将来を考え「大谷里海（まち）づくり検討委員会」を発足した。その頃の大谷には地域の象徴的存在の大谷海岸の砂浜を覆い埋める防潮堤建設の計画が持ち上がっていて、住民の求める大谷海岸整備計画をもとに、行政と合意を取り付けることが主な活動になっていた。「日本の海水浴場 100 選」の大谷海岸海水浴場は、白砂青松の美しい砂浜で知られた地域住民の心の拠所である。国は震災後、高い頻度で発生が予想される、いわゆる「レベル１津波」の対策として、その津波想定高＋１ｍの防潮堤を建設し住民の生命財産や経済活動をも安定させるという考えを示した。大津波で一変した大谷の姿を目の当たりにした住民の中には、防潮堤建設により災害に強い郷土の早期再生を願う声もあったが、美しい砂浜を後世に守り伝えなければという意見は更に根強かった。地域では各振興会が地域の復興図を策定し、本吉町地域協議会が震災復興計画としてまとめた。その中の大谷海岸周辺の復興図とは、砂浜と並行する国道 45 号線を嵩上げして防潮堤とするもので、住民の生命を守り、且つ大谷海岸の砂浜も残す、更には盛土した背後地に道の駅などを配置し地域の賑わいをも復活しようとする創造的な復興案だった。しかし前例の無い国道兼用堤案は行政には受入れ難く、防潮堤を内陸に移設するだけでも官地とそれに挟まれた鉄道跡地、周辺の民間地権者の理解、事業主体の所管替えへ合意が大前提で、莫大な費用、復興期間など課題も山積していた。

地域住民の想いと大谷の未来を託された（つもりの）里海づくり検討委員会の委員には発起人に加え地域振興会や産業団体、PTA や NPO など多方面から、世代や職業も違う地域としては比較的若手の 30 名が選出された。従来の会議形式にこだわらずワークショップで幅広く意見を出し合い、誰のどんな考えも否定することなく議論を尽した。まちづくりの専門家を講師に招き先進事例を学び知識を高め、現場に出向いて徹底して復興図のイメージを固めた。議論が白熱し雑然としがちな意見をファシリテーターが中立な立場から整然とまとめたおかげで確実に議論を進めることが出来た。検討委員会（若手）が議論した内容はその都度、振興会（古参）には報告することで集約した住民公認の意見として行政機関に届けられた。活動の経緯や再編した大谷海岸の復興図を広報誌として地域全戸に配布することで、地域住民も次第に里海づくりを地域の代弁者と認めるようになっていた。住民の意見を集約しその所在を明確にすることは、行政機関としても事業に取り組むうえで見逃せない要素になることを学んだ。事業のひとつずつを共に丁寧に精査し、話し合いを重ねるほどに行政との信頼関係が築かれたように感じる。当初平行線だった地域と行政と考えが、少しずつ住民の求めに近づいていったのは、互いの立場を理解し合うことで共に実現をめざすべき大谷海

岸整備計画へと変わっていったからではないかと考える。

会の発足から２年、住民説明会が行われた体育館には大勢の住民と事業関係者が出席、里海づくりは経過報告の役を任され、行政から住民が求めに応えた整備計画が説明されると会場からは拍手がわき起こった。検討委員会を重ねる中、地域とのかかわりを大切に熱心に議論する仲間の姿に、かつての青年団活動と通ずるものを感じた。団結する素晴らしさは時に大きな力となりうることをあらためて実感した瞬間でもあった。

防潮堤の議論が一段落した現在でも、磯焼け対策や海浜植物の植生や若者定着への取り組みなど大谷里海づくり検討委員会の活動は続いている。震災から 10 年、官民が一体となって守った大谷海水浴場が今夏オープンする。

【プロフィール】

芳賀 孝司（はが こうじ）

宮城県気仙沼市在住。漁師。1970 年生まれ。宮城県本吉郡本吉町（現気仙沼市）出身。

元本吉郡青年団体連絡協議会会長。

震災直後の大谷海岸。
写真中段の黒い部分は、縦に積み上げられた１つ 2t 程度の土嚢。土嚢の先には大谷海岸が広がる。手前には駅があったが、津波によって流され水溜りができた。

大谷海岸

～私たちが大切にしたいこと
未来につなげたいこと～

1. 海・環境……海と里を守り続け、その双方の資源を生かし合い、子どもたちにこの素晴らしさを伝え続けます。
2. にぎわい・観光……海水浴場や道の駅などを活用し、大谷の「にぎわいづくりと観光復活」を目指します。
3. 人・コミュニティ……地域の多世代のつながりをこれからも大切にして、集い協力してコミュニティを育みます。
4. 防災・減災……かさ上げや避難道などの防災整備においては、安全と地域資源の活用を十分に考えた上で、全体デザインを各関係者とともに考えていきます。
5. そのほか……「大谷らしさ」を大事にして、多様な人たちと対話しながら復興のまちづくりを進めます。

<復興イメージの紹介>

- 海岸線の①**砂浜**は大谷のみんなが大事にしているので、できる限り幅広く三島漁港までしっかり確保する。
- 旧駐在所から海洋館までの②**国道をかさ上げ**して防潮堤を兼ねる。また③**背後地もかさ上げ**する。
- 漁協前のエリアに、にぎわいの拠点となる④**道の駅**を移設。海水浴場の⑤**駐車場**と子どもたちの遊び場になる⑥**多目的広場**も併設する。
- 三島漁港側から国道に続く⑦**市道をかさ上げ**し防潮堤を兼ねる。砂の丘の自然をできるだけ残し、⑧**デイキャンプ場**や憩いの場を整備する。
- 海洋館前の⑨**防潮堤は原型復旧**し、ハマボウフウやハマナスなどの⑩**海浜植物公園**とする。
- 国道と砂浜の間は、三島漁港側まで⑪**緑化**し、⑫**遊歩道・サイクリングロード**を設置する。また緑化地帯を守る⑬**護岸を整備**する。
- 復興の丘に⑭**慰霊の場**を造る。
- 既存の人工リーフとあわせ⑮**砂の流出防止**の調査研究と対策を継続して実施する。

※ JR は結論が出されていないため、今回は掲載をしていません。

作成：大谷地区振興会連絡協議会，大谷里海づくり検討委員会　　発行日：2015 年 8 月 31 日

大谷海岸里海（まち）づくり復興図

里海づくり通信 臨時号

大谷地域復興へ前進

大谷海岸防潮堤工事きょう着工

わが古里の復興のシンボルとなる大谷海岸周辺復興工事が、きょう20日、着工式を迎える。東日本大震災からまもなく丸7年を迎えようとしている中の着工は、感慨ひとしおで、地域をあげて喜びたい。3年後の完成を待つとともに、大谷地域の創造的復興への決意を新たにしたい。

住民と行政の連携実る

大谷海岸への防潮堤建設計画は当初、砂浜にせり出す形で、海抜9・8㍍幅40㍍の防潮堤が予定されました。しかし、多くの住民が、砂浜を守ることを望み、大谷地区振興会連絡協議会が、砂浜の確保などを求める署名運動を展開し、気仙沼市に計画の一旦停止と、住民意見の反映を求めた署名簿を提出しました。

その後、地区内の若手有志を中心に組織した、私たち里海（まち）づくり検討委員会や振興会連絡協議会が防潮堤のセットバック、国道の嵩上げを求め、国、県、市と協議を重ねてきました。

その結果、2016年夏、防潮堤のセットバック、国道との兼用堤化が大筋、決まりました。

国道との兼用堤化は、ほぼ実現は無理と思われましたが、気仙沼市をはじめ、宮城県、国の方々が、住民の意見、提案に真摯に耳を傾けていただいた結果、実現しました。2年以上にわたる協議の中には、意見が対立し協議が紛糾することもありましたが、行政当局の理解、住民の力強いバックアップで計画が前に進むことができました。

計画の住民合意を得た後も話し合いを継続。防潮堤の傾斜勾配、海側をかつての中学校のスタンドのような全面階段状にすることなどを求めてきました。単なる防潮堤機能だけでなく、海水浴場という観光面にも配慮する形での提案、要望を続け、おおむね合意できたことで、きょう20日、工事安全祈願祭、着工式を迎えました。あらためて、住民のみなさん、そして国、県、市の行政の方々のおかげであると感謝します。

完成は3年後

防潮堤延長677㍍、嵩上げされる国道延長は980㍍。防潮堤と同じ高さで、現国道の位置のまま嵩上げを行うため、北側に切り回し道路も整備するという大工事です。特定建設工事共同企業体（五洋建設・本間組・只野組）によって、工事が進められ、約3年後の完成が見込まれています。

西側で工事が進められる林野庁による防潮堤工事と合わせ、一帯の整備が完成すれば、復興のモデルとして、全国に自慢できる大谷海岸となるでしょう。震災前同様、いやそれ以上に県内外から多くの海水浴客でにぎわうことを願っています。

これからが正念場

海水浴場の復活とともに、市内唯一の道の駅「大谷海岸」が、工事に伴って新しくなる予定です。近くに三陸道インターチェンジができますことから、大谷海岸周辺は、一段とにぎわいが増すことが期待されます。

三陸道の開通によって、大谷海岸、道の駅前を通る車両は減りそうですが、逆に仙台圏や登米、一関方面など内陸からの誘客が期待されます。大谷の魅力を磨きながら、町内のモーランド本吉、徳仙丈、田東山をはじめ、隣接の階上に完成する震災遺構の気仙沼向洋高校校舎、景勝地岩井崎、さらに、気仙沼内湾、大島などにつながる観光拠点として連携し、地域振興、観光振興など図っていかなければと思っています。

今後も気を緩めことなく、復興のモデル地区として、地域のにぎわいづくりに貢献できるよう、微力ながら活動していきたいです。

いつでも帰れる場所 大谷海岸。

なお、わたしたちが考えた地域整備のコンセプト・スローガンは「いつでも帰れる場所　大谷海岸。」―砂浜を守る想いから始まるまちづくり―としました。

大谷海岸が、古里、実家のようにいつでも安心して過ごせる場所、どんな時でも帰ってこられる地域であってほしいという願いを込めました。ここ大谷に住んで良かった、住んでみたいと思われる地域に、そして住民、観光客、全国、海外の人からも永遠に親しまれる地域なるよう、わたしたちは今後も気を緩めることなく、地域の一員として勉強を続け、よりよい地域づくりに参加していきたいと思います。

発行「大谷里海（まち）づくり検討委員会」

大谷里海（まち）づくり通信

第3号（平成30年3月1日発行）

活動を継続します

公園整備や学校統合の是非も課題

地域の喫緊の課題でした大谷海岸の防潮堤建設工事が着工し、いよいよ大谷地区の復興が本格化します。里海づくり検討委員会の活動も一区切りついたといえますが、背後地の公園などの課題がまだ、残されています。さらには今後は中学校統合の是非も問われてくることが予想され、避けて通れない地域課題と考えます。私たちは地域の一員として、新年度も活動を続けていきます。

大谷里海づくり検討委員会は、２０１４年９月、震災後の大谷の復興、将来世代が抱える問題を見据えながら海、山、里を大切にするまちづくりを考えようと、若手有志が主体となって設立しました。喫緊の課題であった防潮堤問題を中心とした大谷海岸周辺の整備についてこれまで取り組んできました。

地域のみなさんとともに、砂浜の確保、国道とその背後地のかさ上げを求めてきました。すべてに満足するものではありませんが、気仙沼市や宮城県、国の理解を得て、去る1月20日には一連の工事の着工を迎えることができました。あらためてみなさまに感謝申し上げます。

これで委員会活動は、一区切りついたと思いますが、背後地の公園整備（旧石田屋さん付近）の検討が残されています。また、小学校と活動継続中の海浜植物の再生のほか、防潮堤工事の詳細な詰めなど、取り組まなければならない課題はまだ、残されています。

大谷海岸を中心にしたにぎわいづくりは、具体的に何をどうしたら地域振興が図られるかを、考えることが大切と考えております。さらには現在、気仙沼市が進めています大谷中学校の統合の是非が、今後問われてくることと予想され、議論が本格化してくると思われます。

よって私たち検討委員会は、微力ながら活動を継続し、これからの課題や新たな課題について、新年度も勉強を続けていきたいと考えております。地域のみなさまには、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

なお本年度も検討委員会の開催をはじめ、ハマヒルガオ、ハマエンドウ、ハマボウフウなど海浜植物の種を採取し、大谷小学校緑化委員会の子どもたちとの種まき、大谷海岸花火まつりへの協力、出店などの活動を行ってきました。

大谷里海づくり検討委員会とＮＰＯ法人浜わらすが、子どもたちを少しでも海に近づけたいという思いで、震災後に催してきた砂の造形大会は昨年夏、小学校が震災前同様に、学校行事として実施することになり、里海づくり検討委員会と浜わらすは、後方支援という形でお手伝いさせていただきました。

当日は砂浜清掃の後、子どもたちは「カメ」「ホヤぼーや」などを作り、楽しいひと時を過ごしました。児童の一人がつぶやいた「海っていいな」が、すべてを物語っているように思います。里海づくり検討委員会としては、学校行事につなぎ、復活したことで一定の目的が達成されたと考えています。これまで協力いただいたみなさんに感謝します。

委員を募集します

委員会は結成以来、若干の委員の変更がありましたが、充て職などが変わったにもかかわらず、そのままの状態になっておりましたことをお詫びします。活動に一区切りがつき、新年度を迎えるにあたり、現委員の継続の確認とともに、あらためて振興会など各団体からの推薦や一般公募による委員を募集したいと思います。

現委員に関しては、引き続き委員として活動の有無を事務局までメール、ライン、電話で連絡ください。振興会、各団体からの推薦に関しましては別紙用紙により、お願いします。一般公募に関しても別紙要領で募集しますので、重ねてよろしくお願いします。

■ **現役員**

役員体制が一部変わりましたのでお知らせします。

▽会長―村田　興
▽副会長―芳賀　孝司　小野寺　英彦
▽幹事―佐藤　健　高橋　弘則　只野　芳江
　畠山　友美子
▽監事―加藤　幸一郎　及川　正和
▽会計―福岡　大祐
▽事務局―三浦　友幸

会長　村田　興　より

「前会長芳賀から里海づくりのタスキを引き継ぐ事になりました。改めて、責任の重さを痛感しているところではございますが、「まちづくりは人づくり」をモットーに、活動して参ります。今後共、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。」

※裏面もご覧ください

大谷里海づくり検討委員会
Web：oyakaigan.com
問合せ：oyamachidukuri@gmail.com

「これからの大谷」

大谷小6年　福　岡　加　彩

平成23年3月11日、東日本大震災が起きたとき、私は大谷幼稚園の年中でした。突然大きな地震が起きて怖かったこと、みんなで必死に逃げて、先生たちも私たちを必死に守ろうとしてくれていたことを今でも覚えています。

その頃、幼稚園は小学校のすぐ裏側にありましたが、津波で全壊してしまいました。私たちが年長になる時、大谷小学校の教室を間借りして幼稚園が再開しました。小学校の校庭には仮設住宅が建ちました。震災後、7年目を迎えようとしている今、ようやく仮設住宅の撤去が終わり、校庭の復旧工事が進んでいます。大谷小学校の校舎から『青い大谷の海』が見えるようになりました。

私が生まれた頃は仙台に住んでいましたが、3歳の時に父の実家がある、この大谷のまちに帰ってきました。父も母も、気仙沼が大好きでした。そして、この大谷が大好きで、子育てをするならこの大谷だと思っていたからだそうです。

私が震災前の大谷で覚えているのは、駅の中の大きな水槽にマンボウがいたこと、レストランがあったこと、そして海と砂浜がきれいだったことくらいです。でも家族から、私が小さい頃、夏には海に行って遊んでいたこと、小学校では、毎年砂の造形大会が行われていたこと、大谷海岸駅は日本一海水浴場に近い駅だったこと、駅から見える松林の向こうに海水浴場があり、夏にはたくさんの人が海水浴に訪れていたことなど、たくさんの話を聞きました。

しかし、今は海の近くの道路を通っても、そこから見えるのは大きな黒い壁や、背の高くなった雑草、高く盛られた土の山。この風景が当たり前になってしまった私は、以前の風景を思い出すことはほとんどできません。

でも、学校の授業で地域の方々から大谷のことや海のことについてお話を聞く機会がありました。大谷の復興のために活動してくれている方々がいることや、大谷の海とともに生きる漁師さんの想いや苦労を知り、大谷と海についてこれまで以上に深く考えるようになりました。大谷の方々は昔から海と仲良くつきあってきました。時に怖い顔を見せる海ですが、私たちにとってかけがえのないものです。漁師さんの「海を嫌いにならないで」という言葉が心に響きました。

去年の夏、大谷小学校では地域の方々の協力をいただき、砂の造形大会が復活しました。地域の方々に見守られながら、全校のみんなと砂浜で遊ぶことができ、とても楽しかったです。私の周りの大谷の方々は大谷のまちが大好きで、大谷を守りたいという想いを持ち、大谷のすばらしさをいつも教えてくれます。大谷の象徴である大谷海岸も、昔からみんなが大切にしてきた場所です。この砂浜を守りながら、新しい道路が作られると聞きました。とても嬉しいです。新しい道路ができると、大谷は生まれ変わり、またみんなに親しんでもらえる大谷海岸に戻ると思います。その日が楽しみです。

そして、これからできる新しい大谷海岸を、今度は私たちが守っていきたいと思います。

福岡加彩さんのあいさつは、1月20日に行われた大谷海岸地区復興事業着工式で、「大谷の明るい未来の言葉」として、出席者を前に発表しました。

大谷海岸で海浜植物の採取（H29.8.27-28 ）

大谷小学校 砂の造形大会（H29.7.14 ）

大谷海岸花火大会での出店（H29.9.9 ）

大谷小学校での海浜植物の種まき（H29.11.2 ）

大谷海岸のまちづくりに関する説明会 資料（H29.7.25）　提供 気仙沼市

10年目を前に

芳賀　広美
（宮城県気仙沼市本吉町）

震災発生から 10 年を迎えようとしている今、三陸縦貫自動車道の完成とか、朝ドラの舞台に決定したなど明るいニュースが続いている気仙沼市です。そんなニュースに埋もれがちですが、復興の大きな目安となるニュースもありました。

現在（2020 年 12 月現在）、気仙沼市内の公園で仮設住宅の解体が行われています。

ここ２～３年のうちに市内のいろいろな場所の仮設住宅が解体されるのを見掛けてきました。そういえば仮設住宅団地をほとんど見なくなったなと思い至り、調べたところ、ここが市内では最後の団地だそうで、道路から見える状態ではもう壁なども取り外されていて、今年度（2020 年度）中には解体が完了する予定とのことでした。

これで震災から 10 年を前に、市内 93 団地、3,459 戸のすべてが解体されることとなりました。入居していた方たちは 2020 年 3 月の段階で全員退去していたそうです。仮設住宅用地として利用されていた公園や野球場、テニスコートが整備を終えて次々と開放されています。

本来 2 年の期限付きでの入居のはずが、住宅再建する土地の整備（かさ上げ等）に時間がかかり、大量の住宅発注に対して建築業者が足りない、災害公営住宅の建設にも時間がかかったという理由から毎年 2 月くらいに「特別延長」がニュースとして流れていました。2016 年頃には想定以上に長期間住むことになったとのことで、一度土台部分などに腐食がないか等の点検が行われたこともありました。

想定以上とのことなので検索してみると、阪神淡路大震災（1995.1.17）の際の仮設住宅は、2000 年１月 14 日に全員の退去が終わったと神戸新聞の過去記事にあり、新潟県中越地震（2004.10.23）では、2009 年 9 月 30 日の時点で全員が退去したと新潟県のサイトに記載がありました。この二つの大きな地震でも５年程度だったのですから、東日本の規模の大きさと復興の難しさがあらわになってしまったように思いました。

仮設住宅に住んでいた頃、いろいろと不具合もありましたが、数年間安定した生活を送ることができました。きちんとした住所がないと、自動車が購入できなかったり、クレジットカードの住所変更ができず、更新カードが差し戻しになってしまったり、また更新よりも重要な、通帳やクレジットカードの再発行も、避難所宛では安全性の関係で郵送を拒否され、郵便局留めなどの手続きを取らなければならなかったのです。そして何よりも他人の目のない空間の確保は大きいのです。その点で迅速に建設を進めてくださった県や自治体、そして建設会社の皆さんには改めて感謝を申し上げたいと思います。

と、こんなことを書いていたところ、1 月 14 日に「南三陸町の最後の仮設住宅解体開始」のニュースが流れてきました。そのニュースの中で県内 22,095 戸のプレハブ仮設住宅は、2020 年 4 月の段階で全入居者の退去が完了しており、2021 年 3 月までにすべて解体が完了するとのことです。まだ岩手県・福島県の両県では仮設住宅が残っている地域があるとのことですが、もう何

年もせずに解消される見通しだそうです。

そして、解体されたプレハブ式仮設住宅はそのままだと大量の鉄くずになってしまうのでは？と危惧していたところ、一部を除き民間等に譲渡されたり、他の被災地において再び仮設住宅として利用されたりしているそうです。

今後仮設住宅が必要とされるような災害が起こらなければよいのですが、ここ数年の自然災害の数と規模が大きいものが増えてきました。過去に書きましたが、入居後に各種追加工事（風除室・断熱材・二重窓・換気孔の追加、通路・駐車場の舗装等）が行われて必要以上の費用が掛かったと思われます。これから建てられる仮設住宅では、このような地域性に沿った改良を最初から設計に入れて、入居者の方たちが安心して次の住まいの確保に望めるようなものができるようなものを作ってほしいと思います。

貼付写真は現在の気仙沼公園、市内で一番初めに仮設住宅が 106 戸建設された公園。駐車場に仮設コンビニも設営されていたが、現在は運動公園として復活。

【プロフィール】
芳賀 広美（はが ひろみ）
宮城県気仙沼市在住。1972 年生まれ。宮城県本吉郡本吉町（現、気仙沼市）出身。元宮城県青年団連絡協議会事務局次長。

新たな土地で

古農　満
（宮城県大衡村/福島県浪江町）

震災当時、地元・福島県浪江町で農家をしていた古農さんは、震災直後、ご家族と共に福島市内、そして秋田へと避難されました。浪江町青年会 OB、福島県連合青年会 OB という縁で、これまで、2012 年（『生きる』1号）、2014 年（同３号）、2016 年（同４号）と、その時、その時の状況をうかがい、共有してきました。今回はオンラインにて話をうかがい（2020 年 11 月 29 日）、それを整理・編集したものを古農さんにも確認いただいた上で、ここに掲載します。（インタビュー・まとめ　辻智子）

浪江から秋田への避難、秋田から大衡村へ

―お久しぶりです。大衡村に移られてどのくらい経ちますか？

今、こちら（宮城県大衡村）に来て４年目に入ったんです。今年（2021 年）の春を迎えると、ここの家に電気を引いて丸３年が過ぎたことになります。

―2017 年の春に電気を引いたのですね。

中古の物件を買ったので、リフォームするのにも電気がないと大工さんも来ていただけないということで、まず電気と水道を通したんです。実際に家に入ったのは、それから１か月半後ぐらいですから、2017 年の梅雨に入る前ぐらいでしたかね。

―秋田からでしたよね？

秋田から、こちらの宮城県大衡村に行ったり来たりして。そしてなんとか住めるような段階までになった時に引っ越しを始めました。

―秋田の方は完全に引き払ったのですか？

そうです。みなしの避難所みたいな感じで、借り上げ住宅ということで、家賃補助が６万円ほど出ていました。一軒家だったものですから、実際の賃貸料金は６万円ちょっとかかったんですけど、そこはしょうがないなと思って。2017 年の春に引き払いました。

―大衡村の住み心地はどうですか？

浪江の家よりも寒くて…。雪が降るんですけれども、秋田よりは全然少ない。雪を見ながらサッポロビールを飲むのには最高ですわ。

―前回、話をうかがった時にすごく印象に残っているのが、「これって移住なのか、移住じゃないのか、自分の中でもなんて言っていいのかわからない、中途半端…」と言葉を探していたことです。今はどんな気分ですか？住民票は福島の浪江にあって、住んでいるのは宮城の大衡村で。「大衡村に移住した」という気分でしょうか？

中途半端なのは変わらないんですけど、軸足のウエイトっていうか、比率が違う。秋田に行ったのは、原子力災害の避難ということで、不本意ながらです。もちろん自分で判断して行ったわけですが、でも自分の本意ではないわけですよね。でも、秋田からここ（宮城・大衡村）に移住するにあたっては自分の本意で選んできたので、「秋田に避難してる」っていう感じとは、ちょっと違いますね。全国どこにでも自分で選んで行ける、どこに行ってもいいよ、選択肢は自由だよって言われると、なかなか難しくて。ただ、本当にご縁があってね、青年団の方のご縁で、佐々木春樹（※1）さんのご縁で大衡村

に来たっていうことです。

大衡村での新たな縁

―大衡村の方で地域の方といろいろお付き合いされているんですよね？

はい。実はここの区長さんが後ろ盾になってくださっていまして、それで農地を購入する時にもお世話になりました。農地を取得するためには農家じゃなきゃ当然いけないわけで、村の農業委員会を通さないとだめなんです。私の場合、県をまたいで避難している関係で、福島県内だったらすぐ農地は求められるそうなんですけれども、県をまたいでしまうと新規就農者扱いなんだそうです。

―「新規就農者扱い」ですか？なぜ？不思議に思えます。

まさに前例がないということです。縦割り行政の最たるものですけれども。前例が無いので、いわゆる新規就農者。50 歳を過ぎたおっさんが、２町分くらいの農地を買って何をやるんだ？といった警戒感や、こっちに来て本当に本格的に農業をやるのか？と思われることもあるわけです。いわゆる調整区域なので、すぐに家は建てられない。農振地域（※）から外れているところなので、どこの馬の骨かわからない人が外からやってきて、農地を転用して、何かよからぬこと、例えば産業廃棄物の処分場にするとか、一般的にはそういう心配をされる。だから、どこの馬の骨だかわからない古農という人間がやってきて農業をやりたいといっても、後ろ盾がないとなかなか厳しかったわけです。でも、その区長さんが村の農業委員をやってまして、それから佐々木春樹氏も村議会議員をしながら農業委員もやってたんですよね。だから、１人ではどうにもならないことでも２人で力になってくれて、古農満というのは、こういう人物で、福島の浪江で専業農家をやっていて、こっちに来ても農業をやりたいんだというような話を農業委員会の中でしてもらって、それでようやく土地の購入までいったっていう感じですね。だいたい１年半から２年くらい棚上げにされていた状態で、県の農業公社とかいろいろ回ったんですけども、なかなか前例がないということで、最終的には村の農業委員会が承諾すればいいよということで、なんとか農地を購入できて、現在に至るというところです。

―古農さんが浪江から来たということは皆さんご存じで？

こちらに来て、とりあえず近くの人と「よろしくお願いします」みたいな感じで一献交えながらやったんですね。そしたら、そこから「おやじバンド」の結成につながりました。

―「おやじバンド」！

大したことはないんですよ。

―どんなバンドなんですか？

中学校の時にギターをやっていた人がいまして、この地区の夏祭りで、以前はお金をかけていろんな人を呼んでいたんだそうですけども、緊縮財政のあおりで、それもできないと。地区内からお祭りの催しに参加できるような人は誰かいないかっていうことで、じゃあ来年に向けてバンド結成してやってみようかっていうことになりました。近くの人で、いま、4 家族 7 人でやっています。お母さんたちはオカリナをふいて、ギターとオカリナのコラボ。歌も歌ったりして、催しの時に２～３曲やります。夫婦で

「おやじバンド」です。そんな感じで、本当に近くの人に恵まれて、よくしてもらっています。

―「おやじ青年団」ですね。

そうですね。一番上が 69 歳、その次が 65 歳の男性。次が 63 歳。私が 55 歳。そんな感じでね、ほんとに周りの人に恵まれて、北海道に回らない寿司を食べに行ったり、仙台港からフェリーで名古屋まで行って彦根城に行ってみたり。浪江の、もといたコミュニティはもうなくなってしまったんですけど、まあ、こっちに来てね、新たにご縁があって、いい人たちにめぐりあって、そんな感じで今もやらせてもらっています。１か月に１回、定例会っていうほどではないんですけれども、だいたいギターとかオカリナの練習は 30 分から１時間くらいで、あとは延々と４時間くらいはこれ（飲み会）をやっていますね。

―今は新型コロナのせいで集まれなくて寂しいんじゃないですか？

寂しいですよ。ちょっと時間を短くして、歌うたうのをやめたり、マスクをしながら飲んだり。自宅持ち回りでやってます。近くに飲み屋さんがないもので。だから、そんな親密な関係で、家族ぐるみのお付き合いをさせてもらってます。

最初の夏祭りで区長さんが皆さんに「今度、新しい区民になった古農さんです」と紹介してくれました。その中で、区長さんが、浪江から避難されて、秋田に行って、当地に来ましたって話されたので、私から言わなくても、この地区にいるぶんには「浪江から来た古農さんだな」って。最初の一発目に、そういうふうに紹介してもらったので、あとの方は全然気にしてません。

―いい形で地区に入れて本当によかったですね。

そう、いい形で入れたのかなと思います。実は、この地区は戦後開拓として入った人たちが多くて、長くても、まだ３世代までしかいないんです。

―戦後開拓って大変だったと聞きます。

そうです。一世の、初代の方が今もおられますけども、だいぶ古い方でも３代目くらい。いわゆる歴史が浅い地区に入ったものですから、昔からのいろいろなこととかがなかったですね。これは佐々木春樹さんから言われたんですけども、２～３候補地はあったんですけど、今、私が住んでる地区が戦後開拓で苦労なされた方がほとんどなので、こっちの方がいいかなって話もあって。周りの外的な影響、環境っていうのかな、それは大きいですよね。

―戦後開拓ということは、いろいろな所から集まって来られた人が新しく地区をつくった。

そうですね。この住所が、大衡村大衡字茅刈場って言うんです。茅葺屋根の茅を刈る場所だった、いわゆる荒れた原野みたいな所だったって聞きました。そこを開拓して開墾したっていう話ですね。

―古農さんの現在の農地も、その誰かが開拓された土地なんですね？

そうです。ここに住んでいた前のオーナーが戦後入ってきて開拓した。そのお子さんが娘さん 2 人だったので家を継ぐ方がいらっしゃらなくて、初代の方がお亡くなりになってどうしようかなと悩んでいた矢先に私が入ってきたというわけです。農地に行くためには家の前を通っていかなければいけない土地で、農地だけ売るってわけ

にいかないからということで、家と土地とワンセットで買ってくれということでお話があって。

農業の再出発

―水田？畑？

田んぼです。土地がどういう性格かわからなかったので、まずクローバーをまきました。クローバーはマメ科植物なので、空気中の窒素を根粒菌で地下に窒素をため込んで土地が肥えるんです。土地の性格を見ようと思ってクローバーを撒いたのが始まりです。クローバーの生育がいいところは畑にしてもいいわけです。クローバーの生育が悪い所っていうのは水田跡地ですから水はけが悪くて、極端な話、梨とかキウイとか、そういうものを植えてもあまりよくない所なわけですね。だから、やみくもに植えるんじゃなくて、土の性格を見極めるためにクローバーをまいたんです。まいたらば、花が咲いたので、じゃあ養蜂、どうだろうと。この後には、キウイフルーツを植える計画でいます。福島でもやっていたものですから。新規にやるっていうのは、なかなかリスキーで、やっぱりやったことがあるものを継続してやるのが安心。養蜂もそうです。

―浪江でもやっていられたんですね。

そうなんです。わりと蜜もとれています。

―土地の様子を見ながら考えてゆく感じですね。

そうです。だって 20 歳くらいの新規就農者とは違いますから。今までずっとやってきたからさ。それはわかりますよ。

―素人考えだと、この土地で前にやっていたものをやった方がいいのかなと思ってしまいそうです。

田んぼは、これからはもうあり得ないので。

―お米、厳しいですよね。

果物も、それから蜂蜜も、競争相手が少なくて、自分で売れるっていうのが魅力です。浪江でもそういうふうに梨を作っていて、自分の家で売ってた経験があるので。当時のお客さんは、もうほとんどの方が、お亡くなりになったりしてるんですけども、今度、「道の駅なみえ」ができて、そこに生産物を出す時に「古農果樹園」とは付けず「古農養蜂園」と付けました。「古農さん、宮城で一生懸命やってるんだ」ってアピール効果も狙って出したらば、とりあえず 50 本ほど全部完売してしまった。こんなに売れると思わなかったです。

―買った人から連絡が来たりしたのではないですか？

来ました。一人。ラベルに生産地はどこって書かなきゃいけないから。生産者は古農満、そこに携帯電話の番号も書いてあるので、それで、やっぱり懐かしくてお電話を、というのが一件ありました。

―そこには大衡村の住所だけで、浪江の住所は書いてないんですよね？

そうです、そうです。だって古農なんて名字は、珍しいっていうより、古農っていったら俺しか出てこないでしょ。浪江で、道の駅で、古農って聞いたら、俺のこの頭しか思い浮かびませんよ。古農なんて 3 軒くらいしかないんです。

―それにしても、以前、同じように農家をやってたとはいえ、農機具とか設備備品とか設備投資に結構お金が必要だったのでは？

全部、新しく買いましたよ。

―結局、買うしかないんですよね。そういうところに補助金は？

補助金は出ていないです。全部、自分です。補助金っていうのは、購入は農協で、とかって結構しがらみがあるんです。でも養蜂器具なんて農協で扱ってませんし、買えない。養蜂は畜産業なんですけども、同じ農業っていっても特異な畜産業ということなので。

―大衡村の農協は養蜂に関わったことがなかったんですね？

ない、ない。ないし、これだけ希少価値のあるものだからこそ自分で売れるわけですよ。国産の蜂蜜なんて、日本で消費するハチミツの 0.7%くらいしかないと思う。零細養蜂家が絞ったハチミツは熱処理をしていないのでハチミツが生きている。ハチミツを買って水で 7:3 くらいに薄めるとミードっていうハチミツのお酒ができるんです。これはエジプトでも、ピラミッドの中から出てきて利用できたのがハチミツだけだった、壁画にもハチミツを使ったお酒（ミード）が古くから飲まれていたみたいだと。ミードを作るためには生きた酵母がないと発酵しない。安い 300 円くらいのハチミツではできないわけです。

養蜂農家として

―浪江で養蜂をやっていた時のお付き合い、関係業者や、養蜂の器具や、そういうものも浪江の時の経験や繋がりが生きた？

そうです。私が 33 歳の時に養蜂を始めたんです。親父さんが亡くなるまではやってたんですけど、親父さんが亡くなって労働力が足りなくなったわけですよ。そしたら蜂をやってる手がかけられない状態になっちゃって、途中でやめてしまった。もう手が回らなかったっていうのが、やめてしまった理由なんですけど。震災があって、何かしなければってなった時に、やっぱりもう一回、ハチミツやりたいなって思ったんです。私が 33 歳の時はインターネットなかったですから、いろんなものを思い出しながら検索かけると、ああここだって。昔取った杵柄ではないですけども、そういうようなところから一式全部買いました。そして、「おやじバンド」のメンバーに、去年、一番搾りだとかって言って、秋に絞ったのを分けたんです。ハチミツを絞るからコーヒーの空き瓶とか持って来てって言ったら、遠慮して一つくらい持ってきたんですよ。500cc ぐらいの。でも、ぐわーって回したらいっぱい採れるんで、「えー？！ハチミツこんなにいっぱい採れるの？」って。4 リットルの、いわゆる焼酎のでっかいペットボトル、あれを来年は二つ持って来ようとか言ってたんですけれども、それを見ていた「おやじバンド」のメンバー 1 人が、「俺も養蜂やりたいから古農さん教えてくれ」ってなった。

―それはすごい！

それで、今年の春に種蜂を買って、今、私の他にここで養蜂は二家族やっています。意外と採れるんですよ。採れてびっくりして。なかには旦那さんより奥さんの方が「かわいい」とかって、ペット感覚で絞っているみたいです。

―「こうやって食べるとおいしいよ」とか情報交換しますものね、きっと。

そう。だから、年金プラス養蜂だと言ってます。

―なるほど。養蜂いけるぞと。

そう、いけると。少ない国民年金でも養蜂やれば大丈夫だって。

―これから副業は大事ですものね。養蜂って体力はそんなにいらないんですか？

いらない、いらない。だって、蜜が溜まった枠一つで最高に重くても３キロぐらいです。それを遠心分離機に２枚とか３枚で回すだけですから。絞る時が一番、重い思いをするかな。

―養蜂家にとっての天敵は何ですか？

オオスズメバチ。今シーズンは終わりましたけど、スズメバチに入られると全滅しちゃいます。あとは熊。くまのプーさん、ハチミツ大好きですから。うちらのところにも熊がいるんですよ。去年は２群ほど熊にやられました。

―えっ、熊、いたんですか？

いました、いました。それで電気を流す柵をつけたら、もう大丈夫でした。今年、「おやじバンド」のメンバーの一人も、熊ではないんですけどイノシシに鼻でガンってやられて倒されちゃって、蜜蜂の卵が。だからそれでやっぱり電柵やらなきゃだめだなって。もう一人の方は何もされないんですけど、人の振り見て我が振り直せ、で、速攻で電気柵をやりました。

心境の変化

―仲間ができて楽しそうですね。

１か月に１回の定例会の時とか、事あるごとに飲んでお話ししたり、「今、どんな感じだい？」って家に遊びに来ながら蜂を見ていったり。一人の方は釣りが趣味で、海釣りするんですけども、大漁のときにはおすそ分けだって、こっちにもお魚が泳いできます。そんな感じで、こっちに来て楽しくやってると思うんだけど。秋田の時にはこういう生活は考えられなかった。どうしても前向きになれないし、何でこんなふうになっているんだろうとかって考えたりしていました。そこらへんはやっぱり心境の変化っていうのは５～６年を過ぎたあたりから徐々にね。忘れることはできないんですけれども、だんだんと、やっぱり、今からどう生きるかっていうことの方がひじょうに大事であって、今までの事よりもこれからのことを考えるように、考え“られる”ようになった。それは大きいですね。時間が経つっていうことは。人間だから、大なり小なり順応するんでしょうね。今までのことよりも、これからのことを考えたらば、やっぱりね。踏み出さないとさ。でもね、これいろいろな考え方があってね、俺はここに来てそういうふうにやってるけど、やっぱり年配の方、うちのおふくろ 80 歳くらいですけども、年配の方はやっぱり人生のほとんどが浪江だったわけですから、これはやっぱり大きいですよね。俺、震災の時、46 歳でしたけど、そこから仮に 90 歳まで生きるとして、だいたい半分ですけれども、72 歳だったうちのおふくろが、10 年経って 82 歳になって、90 まで生きるとすればやっぱり人生の中で、浪江で暮らした時間の方がすごくウエイトが大きいわけですから。それを前向きになれって言ってもなかなか大変だと思う。だから置かれた環境によって、若い人、子どもたちとかはすぐ順応しますけども、なかなか年配の人は順応しきれないっていうか、難しい。思い出が出てくるっていうか。

―お母さんはたしか福島で、古農さんのごきょうだいのお近くにお住まいでしたね？

そう、そう。それでこっち（大衡村）に引っ越してくると同時にこっちにベースを構え

て、うちのおふくろのところの身辺整理というか、引っ越しをして、こっちに私が来て半年か一年ぐらいの間に物を行ったり来たり引っ越しして、最終的に私たちがここにきてから一年後に、また一緒に住むようになりました。今、一緒に住んでいます。

―では今は古農さんとお母様とおつれあいと３人暮らしですか？

今年の春に息子が来ます。就職というか、看護師なんですけども。うちの子どもたち３人なんですけど、みんな看護師なんです。福島の病院に勤めていたんだけども自分には合わないみたいな感じで、今年の春にとりあえず辞めて大衡村に来ることになっています。やりたいことがあるって、映像の仕事がしたいって言っています。ドローンの電波の免許をとって時々撮影に行ったりしています。YouTube の撮影の依頼が時々きているみたいです。息子も、いろいろ悩んだみたいだけど、やっぱり震災後、価値観が変わったよね。

―どんなふうに？

例えば、うちなんかは友達と飲んでいても、だいたい専業農家だから「もう死ぬまでこの場所で俺は農家の親父だな」みたいな感じで、50 歳が近づいてくるとだいたい人生って決まってくるじゃないですか。そんな話を飲んでしてたんです。でもそれが、まあ、こういうことになって、どうなるかわからないと。そして同じように梨を作ってた、俺より３つ上の先輩が突然亡くなったりして、そういうことを考えてしまうと、自分の人生だから、一回限りだから、好きなように生きたほうがいいよなって思うようになりました。震災前の価値観と、子どもを見る目は変わりました。震災後、震災を境にして。

―震災前は、浪江で生まれて、浪江で育って、農業を継いで、家を守って、これが自分たちにも合ってるし、これが良い生き方だって思っていたけれど、でも今は、それだけじゃないものもあるかなという感じになったってことでしょうか？

そう、そう。一つのタガが外れたっていう感じかな。結局、今、浪江にあるものはあるものとして、またこっちはこっちでって。さっき話したように、軸足のウエイトの置き方の問題だと思うんです。秋田にいた頃は、浪江の生活が軸足 100%で、片足は完全に宙に浮いてたから不安定なわけですよ。

―もう片方の足をどこにつけていいかわからないといった感じ？

そう、そう。一歩目の足を右に出そうか左に出そうか、それとも後ろに下がって一歩なのか、って、いろいろありましたけど、こっちに移住してきて、浪江の友達も当然、大事だし浪江にはお墓もあるし。浪江から住民票を移動してないっていうことは、浪江への想いがある。でも、想いがありつつも、ここで生活していくためにどういうふうにしていくか、自分のやれることは何なのか、この地区に来て皆さんに自分の知識を還元して、皆が良くなっていったらいいんじゃないかと思って、ハチミツの話をさせてもらったりしています。そういう中で新聞取材が来たりして、それなりに反響があるんですよね。その延長でふるさと納税の返礼品にしようと役場に掛け合ったら大丈夫だって次から次へとステップアップしていく。話を元に戻しますと、軸足は完全にこっちなんですけど、それでも浪江に対する想いとは当然あるわけですから、っていう感じです。その中で子どもに対する考え方も、

好きなことをやった方がいいって。悩んでたりしますけど「悩め」って、「若いんだから悩め」って思っています。

浪江への思い

―古農さんから見て、お子さんがみんな看護師を選んだというのは震災の経験が関係あると思いますか？

思います。というのは、実は浪江町の広報誌で息子が取材を受けたのですが、息子は双葉高校で部活をやっていて震災にあったんですね。その時、緊急避難所みたいな感じで小学校に地域住民も双葉高校の学生もみんな津波が来てるから高台の小学校に逃げるぞって言ってみんなで逃げたんですけど、その時にやっぱり保健の先生がケガしている人の対応をしていて、「俺には何もできなかった。でも今の自分だったら何かできる」っていうようなことを、浪江の広報誌に息子は書いたようです。「何もできない自分が悔しかった」と。上の子と下の子はまだ看護師をやっていますけれども、いろんな話で、みんな看護師だから、共通の看護師の話で、こういう患者さんが来たとか、この薬を使ってこういうふうに福島ではこうやっていたけど宮城ではどういう処置の仕方するんだい？とか話しているみたいです。一番下の娘は地元の総合病院に勤めているんです。

―地元っていうのはどこになるんですか？

宮城の古川ですね。ここから 20 分くらいです。

―震災の時に、秋田の看護学校にいたのが一番上の娘さんで、その娘さんが卒業後、福島で就職されたんでしたよね？今もお勤めされている？

はい。

―それで、真ん中の息子さんも看護師になったんだけど辞めて今度、家に戻ってらっしゃるということなんですね。

はい。やりたいことやれ、って。医療系の資格があるから、とりあえず大丈夫だろうと。男子でも医療系の資格があれば、どこかしらには、絶対ひっかかるので。

―やっぱりさすが看護師ですね。

看護師の他に保健師も持ってるので、とりあえずやりたいことをやって、４年間やってダメだったらダメで、自分でも諦めもつくし、あの時、親父に言われて何もできなかったって後から言われるのも癪に障るから、やりたいことをやって、それでもダメだったらばしょうがねえってやるのも手だよねって話をしました。

―看護師、保健師という資格を持ってるから、逆に、安心して好きなこと探せるっていうところもあるのかもしれませんね。お子さんたちは、浪江のことや、浪江の家のことを、どんなふうに思っていらっしゃるんでしょう？真ん中の息子さんが当時、高校生ということですが、皆さん、浪江は故郷だって思っている感じですか？

そうです。震災の時は、高校 3 年生になる年でした。高校 2 年生の 3 月。一番下の娘は3月 11 日が中学校の卒業式だったんですね。卒業アルバムをもらって、お世話になった方々に午後から挨拶に行こうねって言ってた時に震災が起きたんです。だから卒業式っていう、ひとつの区切りを終えたので、まだいいのかなと思ってます。震災直後、秋田に避難してる時には、「お父さん、ちょっと戻って免許証とか持ってこなきゃだめだから」って、秋田まで免許証も無くて

車を運転して行ったもんですから、そういうので一回、浪江の自宅に入ったときにね、思い出の物を、汚染されてるからちゃんとペーパータオルを持っていって拭いて。それはお金で買えないものなのでね。一番下の娘は、ソフト部でピッチャーをやっていたものですから部活で使っていたグローブとボールを持ってきてくれとか。そういう想いは、ちゃんとまだあそこ（浪江）にあるわけですよ。

―今、一番、不安なことって何ですか？

やっぱり家の問題がひじょうに大きいです。浪江の私の地区は帰還困難地区、帰れない地区なんです。解除されたところは、戻ってもいいし、家を壊すこともできる。環境省が壊してくれるんです、とりあえず無料でね。でも帰還困難区域は、壊すっていうことすら、まだ今、発表になってない。この先、私が生きている間に、環境省なり国なりが、ある程度のものをアナウンスしてくれれば対応できますけども、それも今から20年後か30年後だから、私が75～76歳になった時に、例えば痴呆症になってて、もしくは死んでいたりすると自分の息子世代に世代替わりするわけじゃないですか。そういうのがひじょうに不安ですよね。ちゃんとやれるのかっていうのもさることながら、原子力災害ってすごい年月をかけて復興していかないとだめな問題なので、確かにここにはコミュニティがあったんだけども、子どもの感じ方によって、全然ちがう。家を取り壊すとか、なかには修理して住んでる方なんかもいらっしゃるんですよ、居住制限区域が解除されて。だから、自分では今、判断できないというか、悩んでる。それだけ大きな問題なんだけれども、俺が死んで息子の代になったときに、安易に「じゃあ取り壊せ」っていうのも寂しすぎるかな～って。息子にこういう話すると「問題の先送りの何ものでもねえべ」って話はされるんだけども。でも国が態度を示さないから、当の本人たちも苦労しているっていう状態ですよね。

―国が態度を示さないというのは、自分で何かしていいよとも言わない？

そう、だって立ち入り禁止だから。業者も入ってこない。帰還困難区域は、除染をしますよっていうようなこともアナウンスされてない。何年後に、除染して戻ってもいいですよということもない。結局、解除にならないと業者も入ってこなければ、家を取り壊すこともできない。もう農業辞めたって言って農地を売るとか売買もできないわけですよ。もうそこは凍結された場所なので。そういう状態がずっと続いて、自分の世代だけじゃなく息子の世代になったときに、すごく困惑するんじゃないかなって思います。もう分別がつく年頃なのでね。息子は27歳なんですけど。だから今からちょっとずつ話はしてるんですけど。

浪江の現在

―現在も浪江の家に入るときは事前に現地で申請をする必要があるわけですね？

申請します。申請しないと、うちは道路のすぐ近くだから、必ず俺が白い防護服を着て入っていく。警察のパトカーが来て、必ず止められる。やっぱり治安が悪いというか、一時期、警察も撤退した場所だから、うちなんかでも、だいぶいろいろなものを盗まれているわけですよ。現金もさることながら、鍵の閉まっている米を入れておく予冷庫とか。鍵を閉めてあるのに、鍵を壊すんじゃな

くて、ドアのヒンジ部分の、六角レンチで外せるんですけど、そういうような工具で鍵が閉まった状態のところを外して、がぱっと外して持って行ったりされているわけです。トラクターとか、ちょっとした管理機とか、そういうようなものはみんな盗まれて、Yahoo!オークションに出てたというのも普通ですよ。私が取引しているクボタさん、農業機械の会社ですね、「新しい中古車を買った人から修理の依頼がきたんだ」と言ってましたが、その修理依頼は全部機体番号や刻印されてる情報がみんなサンダーで擦られて機体番号がわからなくなってたそうです。なんぼクボタの機械でも、こういう機械は直せませんって。結局、オークションで買った人は修理もできない。機体ナンバーが削ってあるのはクボタでは修理受けつけないそうですから。

―こっちから持って行って売った人が金儲けして、おしまいっていう話なんですね。

そう。それも、サンダーで機体番号を擦るくらいだから、それは絶対に盗んできたやつなんですけど。人がいないから、大胆不敵にも。だいぶトラクターが盗まれてます。梨を作ってた先輩も、やっぱり震災後に盗まれて、被害届を出して、たまたまヤフーオークションで自分の機体だって見つけて警察に言って取り戻したって言っていました。

―オークションに出した人は捕まった？

その間に何回も転売されてるから出した人もわかんないんだって。

―自分のトラクターを取り戻すのにお金は払わずに大丈夫だったんですか？

そう。戻ってきたって。だからオークションに出した人は損したってことですね。

―自分は買ったけど売れなかったっていう話になるわけですね。でも困難区域だと外に物を持ち出すこと自体も制限があるから、そのトラクターも戻ってきたのはいいけれど本当は浪江に置いておかないといけないってことですよね。

そう、そう。ただこれには裏話がありまして、私の家は帰還困難区域なんですけども、私の家の前を通っている道路は外れてるんですよ。その道路を介して、家があって道路があって、その先に農地があるんですけど、その農地は帰還困難区域なんですね。道路だけが解除されている。その道路を通らないと居住制限地域に行けないから道路は外れているわけです。ということは、道路に車を停めて持って行くことは可能ですよね。震災後１年くらいは人も誰もいませんでしたから、警察もいなかったから。もう盗り放題ですよ。

―浪江のお宅には今、定期的にどれぐらいの頻度で行かれてるんですか？

１か月に１回くらいは行ってます。道の駅に品物を納めに行くので、そのついでに。それから、お盆、春秋のお彼岸。解除されている道路からお墓まで 200m くらい離れてるんですけども、お墓には直接入れないので、そこから手を合わせています。おふくろも連れて行って手だけ合わせて。線香はあげられない。

―申請してもお墓は入れない？

いいえ、お墓も入れるんですよ、申請すれば。でも申請が厄介だし、入るのには防護服着ないといけない。それが厄介だから、一応、道路は大丈夫っていうことなので、車から降りて、道路上で、１～２分、手を合わせてくる。持ってこられない物は無いんですけれども、持ってきて、必ず、汚染してるかど

うかサーベイメーターで測るんです。汚染されていたらば持ってこられない。

―今、放射能はどれぐらい？

空気中にはほとんどないです。大気中にないし、今ある放射線、毎時１マイクロシーベルトとか２マイクロシーベルトとかですけども、それは雨降って地面に放射性物質が沈着して、ある程度固定化されたものからの放射線ですね。

―でも、かなり高い？

まだまだ高いですね、うちなんて。

―そうすると実質的にも帰る見通しは持てない状態なのですね。

どうにもこうにも、個人でやろうとしても制限されているわけですから、できない。農家なんて、自分が判断して自分で行動して自分で完結するっていうのが一番いい所じゃないですか、サラリーマンと違って。でも、それができないもどかしさ、歯がゆさ。

―浪江の地区の皆さんで、その後、集まったり連絡とったりは？

しています。地区の総会を必ず毎年３月に１回やります。地区自体は、解散はしていないので、地区の総会はあるんです。でも、今年の３月はコロナで、郵送で議案が出てきて、賛成するか、しないかみたいな、書面での開催という形になりました。

―地区の総会の議案ってどんな内容ですか？

例えば、地区共有の土地のことがあります。東京電力からの賠償が出ているんですが、個人の土地だったら個人に入りますけども共有地の場合は共有財産っていうことで地区に入ってくるんです。その使い道とか、どういうふうに使ったとか。帰還困難区域は、固定資産税は減免されているんですけれども、居住制限区域は解除になったもんですから、今は固定資産税が半分くらいかかるんです。あとは地区で今後どういうふうにしていくか、っていうのが一番の議題ですね。毎年毎年集まって、震災後１年目から集まっていたんですけれども、「会えてよかった、来てよかったの会」って言うんですけど、やっぱり年数が経ってくると、出席率がだんだん下がってきたり、高齢の方が亡くなってきたり、息子さんと連絡が取れないとか、そういうようなところを話し合って、俺は知らないけれどあの人の電話番号は知ってるといったような、そういうころで絆というかコミュニティを切らさないようにしていく。あとでお金の問題になった時に連絡手段が何もなかったらどうしようもなくなっちゃうから。そういうことですね。物理的にはそういう問題ですが、精神的にはやっぱり、「今どうなの？」「体の調子はどう？」っていう近況報告の場でもあるわけ。総会っていう名の下だけれども、必ず総会が終わった後には自由時間、お茶のみ時間みたいなのがあるので、そういう時に必ずうちのおふくろを連れて行ってるんですけども、近況報告や「どうすんだ今度？」「今後どうすんの？」と意見を聞いたり共有する場になっているんですよ。

―今、地区のみなさん福島県内におられるのですか？

福島市、それから二本松市。二本松は浪江町が役場を置いた所だから。それからいわきが多いですね。でも遠くは、東京、横浜などの神奈川。私が秋田にいた頃は、「秋田からわざわざご苦労さん」って言われるほど秋田は避難者としては遠かった。

―地区の中で、帰還困難と居住制限とが混

在しているということはないのですか？

地区ごとに決められたので、うちらの地区は帰還困難区域。隣りの地区は帰還困難区域じゃないんですね。線量が低かったんですよ、たまたま。だからそこに行くための道路を解除してあるわけです。うちらの地区のお墓は帰還困難区域に入ってるんですけども、もう１か所、同じ地区でも別にお墓があって、そのお墓の場所が隣りの地区にある。うちの地区のお墓が隣の地区にあるんです。そこはちゃんとお参りできるわけなんですよ。

―お墓の前に行って手を合わせられる。

そう。でもうちらのところはできない。だから、同じ地区なんだけども、お墓の場所によって、お墓参りできるところとできないところとがあるんですよ。だからいろいろ千差万別ですよ。農地も、隣りの地区と近い所の家の人は隣りの地区に農地を持っていたりしますから。帰還困難区域と居住制限区域で、今回解除になった隣りの地区と、うちらの地区では、農地に対する賠償金も違うんですよ。早く戻れるから賠償額は少ない。うちらのところは帰還困難で、いつ解除になるかがわかんないから賠償金は高い。そういうところで軋轢が生まれたりするわけです。お金の大小で。

―それが現実なのですね。

うちらのところのような純農村地域と都市部に隣接した田んぼでは固定資産税が違うので、評価額が高い所は賠償金も高いわけですよ。だからといって俺は何も言いませんけども。やっぱり資産価値が高い土地は、種目が農地であれ、高い賠償金をもらってますよ。

浪江・福島の変化

―この間の浪江のまちの変化というのはどう見ていますか？

50 代、ちょうどうちらの世代、同級生なんかが、戻って農業を再開したとか、比較的放射線量の低い沿岸部の話ですけども、一家みんなで戻って息子は県の農業短大に行って、こんな時代だからこそ農業を頑張るみたいな感じになっている人たちもいます。誰もやる人がいないから、その地区のそいつに任せるしかない、みたいな状況があります。

―地区をまるごと背負っちゃう。

そうそう。うちらの先輩でも、サラリーマンやったけど大変だって。やっぱり、解除になったから、自分の家は無くなったけど、ちょっとした小屋と機械倉庫をつくって、花農家をやってた先輩なんですけど、花は食べるもんじゃねえから、大丈夫だからっていうことで花を再開した先輩がいますね。時々電話かかってきて、私も時々畑にいる時にはちょっと声かけて話してくるんですけど。後輩も農業をやってて。それから、道の駅ができたのが大きいかな。結局、つくっても売れない状態だったわけですよ、農家がね。でも、道の駅ができたことによって、今まで農協が米や野菜を買い入れていたりしてたんですけど、実際のところ、野菜をちょっとつくって農協に出したって農協は持って行かないですよ。10 ケースとか 100 ケースくらいずつ毎日運ぶんだったら別ですけど。でも、そうじゃなくて売る先が見つかって、当然、売るまでには放射線の検査等もしますけど、そうした上で、ひと手間かけて売り口ができるようになったっていうの

が、生産者にとってはすごく、精神的にもメリットがあります。

―道の駅では、結構、売れますか？

うん。私が見た限り、浪江焼きそばとか有名な物も含めて。私が出しているハチミツだって、どこの誰々がつくったやつだっていうネームバリューがある。震災前でも、農業を一生懸命やっていた人って、みんなが知ってたりするわけですよ。その人が出しているんだっていうふうになると、やっぱり懐かしいからとか、ちょっとでも助けたいからとかっていう感じで買っていってくれるんだと思うんです。お墓参りに来たついでに。みんなそうですけど、震災から10年経っても、つながりってどこかに求めるんですよ。浪江町との接点っていうのかな。だから、行ったついでに道の駅に回って、近くの人のお土産でもなんでも、浪江焼きそばを買っていっては浪江にお金を落としていく。浪江町民だった人がね。ひじょうにありがたいです。

―浪江の中で、完全ではないにせよ、人とモノが動きはじめたということですね。

そうですね。ようやく今からちょっとずつ戻った人間がコアになって、戻ってる人間も集計上は千人くらいはいるみたいですから。コアがちょっとずつ大きな核になっていけばいいんだと思うんです。浪江に戻っている人は絶対的に年齢が高い方が多いので。俺なんかも、後輩から、「古農さん、浪江に戻って農業やったらいいじゃん。土地あるよ、いい土地。」と言われると、ちょっとぐらぐらっとしますね。好きなようにできるじゃん。販売の方もそういうふうな見通しがたったってこともあるし。ぐらぐらしますね。やっぱり、50代のうちらがやらないでどうすんだみたいな。もう、震災から10年経ってるから、60ぐらいでまだまだトラクターに乗れるって感じの人が浪江に戻って自分の畑をうなおう（耕す、畝を作る）としても、もう、うなえないんだって。

―60代でだめですか？

そこは70代になるわけです。乗れる感覚はあっても体がついていかない。そうなって「頼む」っていうふうになるぞっていう。そういうことを考えると、50代の俺たちが何とか浪江町を…。若くて子育て世代だと就職口が無かったりするので、だったらば、もう子どもが独立したとか、ある程度大きくなった自分らの世代が浪江に戻って復興に寄与しなければならないんじゃないかな、っていう自問自答です。

―50代の自問自答なんですね。30～40代だとまた違う。

違う、違う。なぜかっていうと、震災の時には20代30代ですよね。子どもがいたら、そこで小学校に入って高校まで出て、そこで子どもを介したご父兄、PTA関係、ママ友、父友のコミュニティができあがってるわけです。でも、うちらの世代は、もう子どもが高校卒業するくらいまで浪江にいたから、震災後、そういうコミュニティってあんまりないんです。だから、子どもたちが小さければ小さいほど、浪江にいたっていうのはわかってても、実際に生活したのが避難先だったら、そこがもう、通常の居るべき場所なわけですよね。そうなってくると、浪江に対する想いっていうのも薄くなるし、さっき言ったように、そこで職を求めて、震災後、生きるために慣れない仕事に就いて、もう10年ですから。10年経てば、慣れない仕事でも慣れてくるわけですから。そうなって

くると、浪江に戻って生活をするとかいうのはなかなか難しいかな。うちらには農地っていうものがあるからさ。

―農家は、また事情が違いますよね。

農家はやっぱり農地とつながってるんですよ。特に俺なんかは農家の長男だから、こういうふうに思うのかもしれないですけれども。お墓もあるし。だから、しっぽが、農地とつながってます。

―そうすると、20 代 30 代で農家を継いでいた若手はどんな動きになりますか？

二分化すると思う。浪江に戻って新規に農業をやっている 20 代の方がいますが、そこには新規就農者支援の施策や補助金がある。浪江にいた人じゃなくて違うところから新規に入ってきた人もいるみたいです。それはなぜかというと、新しいところ、違うところに行って、好きな農業を始めたいって言っても、お金が大変。それが、浪江なら、ほぼ補助金でできますから。

―初めて浪江に行く人も、その制度を使ってやろうと思えば農業ができるってこと？

そうそう。今、ある会社が、浪江町の農地・水田を借りて、カントリーエレベーターっていう籾でコメを保管する施設が浪江に今度、２基できるんですけれども、そのうちの１基全部をその会社が作って、それを使うそうです。補助金は出るし。だから、さっき話した沿岸部に戻った農家の同級生が、10 町歩くらい米を作ってるんですけど、そこに大規模な業者がきたもんだから、「うちらは零細農家になっちまった」って言っています。

―でも、補助金が来て、大きな物もできて、一見、すごく先端的・先進的な雰囲気に見せておきながら、この土地で暮らす人はあまりいない、ということにならないのでしょうか。農業の工場ができて、そこで儲けがでてるみたいだけど、浪江町の人の生活とのつながりは全然、感じられない気がします。その会社が浪江の土地と施設を使って利益をあげても、本社が納税するなら、浪江や福島にはお金はあんまり落ちないですよね。

ただ、しかし、行政としては、農地を荒らしておくよりはいいという考えなんだと思う。しかるべき時期にみんなが戻ってくるためには、誰でもいいから農地の保全をしてもらう。ちょっとずつ、ちょっとずつ、戻ってきた人口が多くなって農業を再開する時のために今、保全しておく。荒らすと木が生えてすぐ原野になりますから、3 年も経つと柳の木が生えてきますから。

―人の手が入らないとあっという間みたいですね。

そうです。東北サファリパークになってしまう。野生のイノシシも増えましたしね。サルの害もありますし。結局、誰かが保全していかないと、農地があっても野生の動物に荒らされて、いざ浪江に戻ってきて農業をやろうとした時には、もうそこにイノシシさんが住み着いてましたよって状態。それは本意ではないと思うんですよね。

―それがゴールではなく途中のプロセスと考えれば、今できる次善の策としてありえるってことなのですね。

そう。誰も戻らないならば、やりたいっていう大手が手を挙げるのであれば、その人に任せて、施設は、インフラは整備するからどうぞって、そのくらいのサービスをしないと大手だって手を挙げないかもしれないわけですよね。だから、行政としてもなかな

か大変だし、今、お金は国から落ちてきますけれども、いつまでもあるものでもないし。非常に難しい。置かれてる立場っていうのは外から見ると全く分からないですよね。中に入って、中に住んでる人に聞かないと。

―50代の世代が復興に寄与していかなきゃいけないと思っていらっしゃるところで、こういうことをしていきたいという今後の目標というか、復興に向けてどういうことをしていきたいというのはありますか？（後藤・日青協事務局）

パッと思い浮かぶことはなかなかないんですけど。浪江とのつながりは切ることはないんですけども、どちらかというと後方支援みたいな感じになるのかなぁ。道の駅・浪江の隣に、浪江町で造り酒屋をやっていた鈴木酒造店さんがあるんですけども、彼の家は津波で工場も家も流されたんですけども、たまたま2週間くらい前にうかがいました、山形でまた酒造りを始めたんですね。そこで「寿（磐城）」っていうお酒を5升くらい買ってきたんですが、その鈴木酒造店が道の駅の隣りに工場を移転して本格的にやりだすという話をその場で聞いて、じゃあ何かやれることないかなって思ってはいます。具体的に何かっていうのは今のところはちょっとね。約100キロ離れてるところからだから明確に発言はできないんですけども、後方支援というか、何か力になれるときがあればやってみたいというふうには思ってはいるんですけれども。

―ありがとうございます。私自身、静岡の焼津市が地元なんですけれども、離れて神奈川に住んでいて、私自身の軸足がブレてるなっていうのを今までの4年間ずっと考えているところなので、古農先輩がお子さんたちにおっしゃっていた、「自分の人生なんだから、好きなことを存分に悩んでやっていけ」っていうのが、助言をいただいた気がします。（後藤・日青協事務局）

―熊本、岡山と水害や災害があって現地の青年団の若者たちが大変な状況の中で支援活動や役場の職員として頑張っている現状があるのを思い浮かべながら聞いていたのですが、今は先が見えなくても時間が解決してくれることがあるというか、10年たってどうなるかなんて、その時は想像もつかなかったけれど、いろんな苦労をくぐりぬけながらも、とりあえずここまでこれたっていう話で、今まだ傷が生煮えの人とか、何とかかさぶたになったかどうかっていう人にとって、共有できたら力になる話だなと思いました。

ここで何かを選ばなきゃいけない、どうする俺？って、このまま逃げる？仲裁に入る？とか、悩んでるCMがあったけど、悩んでる時って、わからないんだよね。俺もそういう経験あるけどもさ。その場になって、そのど真ん中にいる人って、わかんないよ、右も左も、上も下も。でも大丈夫だ、絶対何とかなるって言える、そういう助言者だったらば、もう神様だな。俺は言えない（笑）。でも、俺個人のこともあるんだけども、家族とか、周りの人に助けられたっていうのがやっぱり大きいよね。ご縁があってこっちにきて、周りの人と「おやじバンド」をやって、そして一か月に一回集まって飲んで、その流れで養蜂をやり始めて教えてるとか、そういうのは自分が持ってるものもあるのかもしれないけども、やっぱり周りの人に助けられてる部分は大きい。謙虚にそう思

わないと、自分だけでは絶対だめだもん。捨てる神あれば拾う神ありで、一生懸命やってると助けてくれるんだって、人間は。

「東日本大震災・原子力災害伝承館」というのが双葉町の沿岸部にできたんです。こないだ妻と二人で行ってきたんですけど、語り部の人から原発がどうなったとか話をきいて、その後、質疑応答で、「宮城から来たんですけど」って言ったら、「3 月 11 日は何なされてたんですか」って問われたから、「浪江町で梨の選定やってました」って言ったら、そこからいろいろ話が盛り上がりました。その後、館内でも、「古農さんって、あそこの古農さんですよね？」って言われたりして。ぜひ、機会があれば、そういうところにも来ていただきたいなと思います。私は原発の被災者だからそこしか案内できませんけれども、熊本でも水害の人でも、原発の悲惨な被災地を見たら勇気づけられると思う。家なんかも壊れたままで動物が出入りしてるところとか、除染で出た放射性物質をかためてある黒いパックの山とか、そういうのがまだまだあるので、そういうのを見ただけで、「うちらはまだ恵まれてるな。明日に向かって熊本とかに帰って地元に帰ったら全然大丈夫だ、へっちゃらだ。明日も頑張ろう。」みたいな感じに思ってくれるような、スタディツアーっていうか、オプショナルツアーみたいのができたらいいよね。

―どうもありがとうございました。

※1：佐々木春樹氏は、大衡村での青年会活動を経て、宮城県青年団体協議会役員（1997 年～1999 年）、その後、日本青年団協議会役員（2002 年～2004 年）をつとめた青年団 OB。宮城と福島ということで県を越えて、東北の青年団員として、古農さんとは旧知の仲であった。

【プロフィール】

古農　満（このう　みつる）

宮城県大衡村在住。1965 年生まれ。福島県双葉郡浪江町出身。

元浪江町青年会会長、元福島県連合青年会副会長。

もしもはいつでも
やってくる

佐藤　竜太
（福島県会津若松市/千葉県市原市）

「災害は忘れた頃にやってくる」この言葉ではなく「災害は忘れなくてもやってくる」と、「格言やことわざ」も変わってきていると感じています。

ゲリラ豪雨とはじめとする気象環境の変化は、地震・噴火 など、大規模災害における周期の短期化していると感じています。

『東日本大震災』

地元・福島県会津若松市で被災しました。今でも当時の様子を鮮明に覚えています。平日の作業中にあの時間がやってきました。昭和から現存する建屋。縦横無尽に長く揺れ続ける大地。「命」優先、建屋の電気など二の次、とにかく屋外へ避難しました。

私たちは、作業グループごと整列・点呼確認をしました。地震の影響により、工場・耐震強度の確認などで休業にもなりました。

「消防団出動」

会津は、さほど災害の影響はありませんでしたが、沿岸部から避難させてこられる方の車両誘導などで私は消防団として出動しました。地元（同町内）にある平成７年のふくしま国体の会場として設立された体育館も避難所に指定されました。「原発事故さえなければ」と何度思ったことか。被曝の可能性・スクリーニング検査の確認。長い車列。２人ずつ・３班に分かれて。先頭・車両誘導。中・検査証の確認。下・検査証準備の案内（１人につき１枚 年齢・性別関わらず）。

私は、下の班を担当 車両１台１台 窓を開けてもらい、運転手の方に用意してもらうよう「声かけ」の役割でした。この時は、100 台近い車両に声かけしました。時間は零時をすぎていました。

「災害ボランティアへの登録」

一昨年 2019 年、台風 15 号・19 号は、日本各地に甚大な被害をもたらしました。千葉県でも、大きな被害がでました。地元では、防災メール配信サービス（消防団）に登録していますが、こちら（市原市）でも、市の情報配信（気象・災害・捜索など）に登録しています。市役所から、ボランティア募集メールが届き、市内の社会福祉協議会の窓口を尋ねたのがきっかけです。ボランティア種類としては、一般ボランティアと専門ボランティアに区分されています。通常、われわれが参加するのは、一般ボランティアです。専門ボランティアの方は、その中で１つまたは２つに特化して作業される方です（チェーンソー作業や屋根解体など）。

私が携わった作業は、浸水畳の取り出し。浮遊している冷蔵庫の搬出。倒壊車庫・農作業小屋の解体・撤去（ブロック塀の運搬・解体土台からの屋根（トタンなど）の分離や樹木の伐採などです。

「講習会への参加」

市の社会福祉からの案内で「災害ボランティア養成講座」を受講しました。市原消防署から消防士の方をお呼びし、市原市内における台風を含め「天災」による被害の概要説明がありました。受講者は、男女問わず、若い方だと、20 代半ば・年輩の方だと、60 代くらいの方も受講されてました。事前の申し込み用紙により、ボランティアセンター事務局で人選。１グループ・６～７くら

い。時間を割いたのが「課題」災害時の３：３：３を考える。３分後・３時間後・３日後。それぞれ、何を優先して取り組めばいいのか。模造紙に書き出し。グループ毎に発表しました。

「優先順位」

突然の有事の際は、立場によりやるべき事が違うため数式・計算問題のように「答えが１つではない」その時点においての最善策を講じる。しかし、とっさの判断。その行動が本当にとれる人がどのくらいいるか、シミュレーションを重ねる事も大事と話されていました。

〇避難経路の確保
〇自分が無事であるか伝える手立て
〇近隣住民の安否確認
など。

様々な講習に参加するなかで、何時 自分の身に降りかかるか分からない。もしもの時に備え、講習会や訓練などには積極的に参加するよう気持ちを新たにしました。

【プロフィール】

佐藤　竜太（さとう　りゅうた）

千葉県市原市在住。会社員。福島県会津若松市出身。福島県連合青年会事務局長。

2016 年日青協事務局研修で訪問した際の福島県

タイトル	人の力に優るものなし					希望部門	第二部門
氏名	佐藤　竜太	年齢	３０　歳	職業	製造業	都道府県	福島県
所属団体	福島県連合青年会	団員数	3	役職	事務局長	活動年数	９年目

振り返れば　東日本大震災という未曾有の大災害から、あっという間に１０年の年月が過ぎようとしています。
未だに、行方不明の方も居られます。
当時は、地元・福島県会津若松市で運送（就活）しました。
現在は、仕事の関係で千葉県市原市在住です。
また、一時年の台風・１５号や１９号の時は、職場で被害に遭いました。
つくづく、他人事ではないということを痛感させられました。

2020 年度全国青年問題研究集会でも、自らの経験を基に「人の力に優るものなし」というタイトルでレポートを作成。

2021 年 2 月、地元で子ども事業を行うため、千葉県から帰省。

浪江に戻って

志賀　重夫
（福島県浪江町/南相馬市/いわき市）

浪江町青年会 OB、福島県連合青年会 OB でもある志賀重夫さんは、震災後、ご家族と共に避難の後、福島県いわき市に自宅を置き、ご自身は仕事の関係で南相馬といわきを行き来しておられましたが、現在は、浪江のご自宅でも生活を始めておられます。志賀さんには、これまで、震災後の生活や仕事について話をうかがったり手記を寄せていただいたりしてきました（『生きる』２号 2013 年、同３号 2014 年、同 4 号 2016 年を参照）。今回は、オンラインで話をうかがい（2020 年 11 月 27 日）、それを整理してまとめ、志賀さんご自身にも確認していただいたものをここに掲載します。（まとめ・辻智子、2021 年 2 月）

自宅のある地区の制限解除

―ここ４～５年（2016 年以降）の状況はいかがですか？

自分の町（浪江町）は、事故後、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」と 3 つに分かれていたのですが、3 年前（2017 年 3 月末）に帰還困難区域を除いて解除になりました。帰還困難区域をのぞけば、自分の家に誰でも出入りできるようになったのです。私の家の区域も解除になったので、家をずいぶんと時間をかけて掃除をして、去年（2019 年頃）くらいからなるべく寝泊まりするようにしています。

会社の方は、以前は南相馬といわきに事務所があったのですが、浪江町が解除になったのを機に、いわきの事務所を浪江町に持ってきました。いわきだと遠すぎて仕事をするのにも大変なので会社を説得しました。浪江の私の同級生の家の自動車修理工場を貸してもらって事務所にしました。そこに、放射能量を測定する機械をおいています。今は、社員の半分ほど、７～８人くらいが勤務しています。

―「所長（志賀さん）はいいけど、俺らはちょっと」って言う社員はいなかったんですか？

社員は、基本的には、地元の人間ではなくて、転勤してきた人が多かったので、いわきから南相馬に移住するのも抵抗はなかったみたいです。「いいよ」という形で何人か移ってきて、今、いわきから通っているのは１人だけです。いわきからだと約１時間かかるのです。南相馬の事務所もまだあります。だから、週の前半は浪江、後半は南相馬といった形で仕事を続けています。とりあえず自分の家から職場に通う準備ができたというところです。

震災後 7 年目の PTSD（心的外傷後ストレス障害）

実は、浪江の自宅に泊まれるようになってから、「俺は強い人間なんだ」という自負を打ち崩す出来事が発生しました。2 年前（2018 年）、震災後に初めて自分の家に泊まろうと思って、家をきれいにしたんです。そしたら、なんと、眠れなかったんです。夜 9 時頃に家に来て、いざ寝ようと思ったら、夜 12 時になっても 1 時になっても 2 時になっても眠れなくて…。なんなんだろうと。久しぶりに来て寂しいのかなと思ったんですが、3 時になっても寝れなくて、あ、これはいか

ん、と。なんかちょっと調子が悪いのかなと思って、わざわざ夜中の 3 時に浪江から南相馬のアパート（会社が借りている）まで戻ってしまいました。それが 3 回くらい続きましたかね。自分の家に泊まれなかったんです。

横になって寝そうになると震災の時のことが思い浮かんでくるんです。あの時、子どもたちが泣いて帰ってきたとか、そういうことが頭に浮かぶんですよね。それで、もしかしたら、まさか自分が、いわゆる PTSD（心的外傷後ストレス障害）？と思ってショックでした。自宅に泊まろうとして、でも 3 回連続で泊まれなかった時には、自分ってこういう人間だったのか、と思いました。正直に言うと、すごく悩みました。自宅に泊まれなかったということを今では笑って言えるんですけど。自分の家に泊まって眠れないなんて、なんてことだ、って、すごく悩みました。

4 回目には、自分が自分の家に泊まれないなんてありえないと自分に言い聞かせて、今日はお酒を飲もう、お酒を飲んだら車で南相馬のアパートには戻れないじゃないかって、荒療治をとったんです。

―ご自身で退路を絶ったわけですね。

自分で退路を絶って、なんとしてもそこで、と、ビールを２本飲んで、もうこれで俺は帰れない、ここで眠るしかないんだと自分にプレッシャーをかけました。でも、やっぱり眠れなかったんです。お酒を飲んでも。さらにビール２本で合計１リットルくらい飲んだんですけど、やっぱり眠れなかった。ただ、明け方の５時とか６時になったら、ちょっとウトウトできたのかな。震災のトラウマ（心的外傷）って言うんですかね？おかしい話ですけど。なんとか強制的に一晩、自分の家で過ごすことができました。

―それまでは震災の時のことが蘇って眠れないっていうことは全然なかったのですか？

私、眠ることに関しては苦労したことがなくて、布団に入ったら 30 秒で寝られる人なんです。横にいる妻と会話してても、妻に発言権が移るとすぐに寝てしまって怒られるくらい。眠れないなと思っても、皆に聞くと３分もしないうちにいびきをかいていたと言われるくらい、眠るのは早い人なんですね。震災の時も、たしかに地震が起きたら目が覚めましたけど、眠れないってことはなくて、すぐ眠れる人だったんですよ。私、ずっと。

―では、その時、まったく初めての体験だった。

ショックでした。

―震災後、家には何回も行っていたけれども、そこで眠るのが初めてということで、自分の中に何かが起きた？

そうですね。何かを思い出したというか、覚醒したというか、発症したというか。たぶん。眠りそうになると、子どもたちが泣いた顔とか、どうしたとか思い出されるんですよね。不思議と。

―その後、どうなったのですか？

泊まるのに、まず一つの山があって、その後、３日間続けて泊まれるようになるのには１年くらいかかりました。

―１年ですか…長かったですね。

結構かかりました。今だから笑えますけど、当時は笑えませんでした。自分の家に３日も泊まっていられないというのは精神的にショックでしたね。

―病院に行こうとか、誰かに診てもらおうとかは？

それは考えなかったです。というのは、これを言うこと自体が恥ずかしいというか、こんなの、おかしいだろう、あってはいけないことだと自分に言い聞かせていたので。

―事実自体を認めたくなかった、否定したかったってことでしょうかね。

そうですね。

―ご家族には話されたんですか？

言いませんでしたね。正直に言うと。結構ショックだったんです。泊まれなかったのは。ただ、今はこうやって３日続けて泊まれるようになっているので。自分の家なのに「泊まれる」って言うのは、おかしいですね。寝起きができている。

―では、今はもう普通に寝られるんですね。

そうですね。ただ、やっぱり１年前くらいだと、自分の家に泊まると眠りが浅いというか、次の日、体の調子が悪かったですね。ちゃんと眠れていないんだなという感じがします。ちょっとリハビリが必要だったみたいですね、いま思うと。俺、ほんとは弱い人だったんだと思いました。正直言うと。今は笑って言えるから大丈夫ですけど。私自身ショックでした。自分ってそういう人間だったんだって。新しい自分というか、弱い自分を発見したようで。

―これまで、仕事の方も地域に対しても責任を背負って、家族に対しても責任を感じながら頑張ってこられておられたし、実際、強くならなきゃいけないと強がっている部分もあったのかもしれませんね。

強がってる部分もありましたね。たぶん、半分以上。今だから「信じられないよね」なんて話ができますけど、1年くらい前までは、ちょっと笑えなかったですよ。ただ、仕事仲間とか、仲の良い人たちには言ったりしていました。そこで発散しないとこれは大変だと思っていました。その人たちが「一緒に泊まってあげるよ」って言ってくれるんですけど、２人で泊まれたとしても意味がないんだ、という感じで、それは、自分がちゃんと普通に泊まれるようになったら呼んで酒盛りしようねっていうことで誰も泊めませんでした。自分の中ではすごく大きな事件でしたね。

浪江への思い、震災の記憶

―志賀さん以外のご家族はまだ泊まっていらっしゃらないんですか？

息子が１～２回泊まりました。一緒に。

―息子さんはどうでしたか？

息子は、震災当時、小学校３年生だったので、浪江に対して自分の故郷という認識があまりないと思います。上の娘は中学一年だったので、震災後、15 歳を過ぎて、高校１年生になる時に浪江に行けるようになって、「浪江の家に行く？」って言ったら、「行く！行く！」って喜んでついてきたんですよね。息子は「行くか？」って言っても「えー。別にいいや～」って感じですね。娘は 1997（平成９）年生まれなので、制限が解除されて初めての成人式を浪江町でやりました。その時、娘は、当然、喜んでいたんですよね。ただ、２歳年下のいとこがいて、うちの息子が４歳年下なんですけど、だんだんと震災の時の年齢が下がってくると、うちの息子のあたりになると成人式に行っても知ってる人がいないからどうしようかな、なんて言ってますね。

―成人式はどこで？

うちの場合、住民票は浪江町のままなんです。なので、基本的には浪江町から成人式の招待が来ます。娘は喜んでいたけれど、息子はどうしようかなとちょっと戸惑ってますよね。

―息子さんにとっての浪江っていうのは複雑なんですね。

かなり複雑ですね。

―息子さんは小学生の時に震災があって、その後、転々としながらも、いわきで中学・高校と過ごしてこられたのですよね。今はどちらに？

いわきです。もう、いわき市で過ごしている方が全然長いんですよね。それなので、「浪江に泊まりに行くか？」って言っても、「いや、ゲームが忙しいから」って、そのくらいの話なんです。友達の思い出もあまり記憶にないようだし。娘と違って小さかったので覚えてないようです。

―震災自体の経験や記憶についてはいかがですか？

娘はいろいろと考えるところがあったみたいですけど、息子は、いろいろな友達のところ、例えば千葉の学校に行った時なんかも、「あの子たちとも、もっと遊びたかったなぁ」とか言っていますし、いわきに来てどうだったとかって言うので、「引っ越したのは大変だったけど友達いっぱいできたよね」くらいの話みたいですね。特に息子はあまり重く感じてはいないみたいです。逆に、救いと言えば救いかもしれないですけど。

―自分の目の前にあることだけを考えようとしてるのかもしれませんけれども浪江への思いやこだわりはそれほどないのですね。故郷のためにとか、浪江の復興に向けてとか、そういう感じもないのですね？

はい。「いわきっ子」になっちゃったのかなぁって感じがしますね。

―お父さんとしてはちょっと寂しいというところでしょうか。娘さんは？

娘は今年の春先に大学を卒業して、山梨から東京へ、住まいは千葉なのですが都内まで仕事で通っています。

浪江町の現在

―現在の浪江の町の様子について、もう少し教えてください。原発関係で人の出入が結構多いのでしょうか？以前、浪江には、どこから来たのかわからないけれども、いろいろな人がたくさん町に出入りしている状況だとうかがったのですが、今はどうですか？

５～６年前は、混沌としたというか、何というんでしょうね。南相馬市の除染作業をする人がいて町の人口が倍くらいになったんじゃないかなというくらいたくさん人がいましたが、その時期は終わって今はだいぶ減ってきています。居酒屋に行っても酒がちゃんと飲めるようになりました。以前は除染作業の人たちがいっぱいいて入れなかったくらいでした。

―除染作業が終わったということですね。放射線量はどうなのでしょう？志賀さんのお宅の周りはもう普通に戻ったのですか？

どこを基準に「普通」と言うか、非常に難しいんですけど、例えば、何もない時には毎時 0.05 マイクロシーベルトくらいだったのが、今の自宅周辺は 0.3 マイクロシーベルトくらいです。原発事故がなければ 0.05 マイクロシーベルト位だったという感じです。だから少なくとも多少はあるというのは間違いないですね、私の家は。人が住むぶ

んには支障がないとされている状態ですが。

―除染が終わったということは、もうこれ以上やっても仕方がないということなのですか？

そうでもなくて、先ほど言った、帰還困難区域と居住制限区域と避難指示解除準備区域とあるので、帰還困難区域もまだ残っているんです。発電所が立地していた大熊町とか双葉町は、90%以上はまだ困難区域なので、その中に復興拠点と銘打って駅や役所があって、そこを部分的に除染しているというのはあります。結構そういうところの除染は残っていますよね。大熊町の放射線量の低いところが解除になって役場が移ってきたり、双葉町の海側は線量が低いのでちょっとだけ解除になって復興記念館みたいなところができたりしています。帰還困難区域の面積が一番広いのは実は自宅のある浪江町なんです。

―放射線が流れて行った方向に沿って町があるからですね。

浪江町は山側に長いので双葉町とか大熊町といった発電所が立地していたところよりも基本的に面積が大きいのです。そうすると私の家から西側に３～４キロ行くと困難区域なので、その先は住めないということになります。ただ国道は通れるようになりました。浪江町では帰ってきている人たちが 1,500 人くらいという話です。かつての人口の 10%くらいが戻ったか戻らないかというところです、今のところ。

―お知り合いはどんな感じですか？

同級生の中では戻ってきたのは１人か２人です。町の東側の、海側の低地で農業をやっている友人や、自分のところで自動車修理工場をやっていた友人が戻ってきています。

―その場合、ご家族もご一緒ですか？

家族で戻ってきている者もいれば、家族は別の場所に置いて１人で帰ってきている者もいます。結構、様々ですね。

―ただ、お子さんはあまり一緒にいらっしゃらない？

そうですね。学校は、「なみえ創成小学校・中学校」という学校ができていて、児童生徒が 20～30 人くらいいます。ただ、やっぱりわざわざ転校して来ようというより、現在いる学校で卒業させてって考える人が多いですかね。

―子どもの年齢や家族の状況によって本当に様々でしょうね。高齢の方は浪江に戻りたいって言って戻られる方が多いと聞きますが。

そうですね、私の家の近くのご高齢の方は戻ってる方が多いですね。やっぱり子どもたちが小さい人たちは、まだまだ全然、戻っていませんね。

―子どもが小さければ戻れないし、ある程度、大きくなってきたら今度は進学や大学、就職となると、なかなか家族皆で浪江に戻るというところまでは難しいですね。

うちみたいに娘が巣立ってしまったりすると、もう浪江に一緒に住むチャンスはないでしょうね。

新しいまちの風景

―先日、浪江駅近くで花農家さんのものすごい大きなハウスを見せてもらいました。その時、メガソーラーの話など、今まで考えられなかったような新しい産業が浪江で始まっているとうかがいました。そこでは必ずしも地元の人ではない人が働いている

ようですが、町のありようがずいぶん変わってきたようですね。

「福島水素エネルギー研究フィールド」というのができました。このあいだ浪江の道の駅で、経済産業省、環境省、福島県、浪江町という顔ぶれで説明会のようなシンポジウムがありました。トヨタ自動車も来ていてMIRAIを見せてくれました。水素で動く車です。もしかしたら水素で電気が作れるのかな、使えるのかな、とちょっと喜んでいたんですけど、そこで作っている水素は民間人・個人には売らない予定のようです。浪江では水素自動車に燃料は入れられないということですね。研究目的の施設だからだそうです。実は、正直なことを言うと、MIRAIを買いたいなぁと、ちょうど会社の車が寿命なので買い替えたいなぁと思ったんですけど、かなりの値段でした。水素自動車の購入には補助がつくようですが、それでも400～500万円はするようで。浪江町役場も公用車としてMIRAIを購入しますって言っていました。でも、燃料の水素を入れるところがないので難しいですね。世界最大級の水素を作る施設がある浪江で公用車の水素自動車に水素を入れられないっていうのも何だかおかしい話ですね。（追伸：役場の公用車だけは燃料を入れることができる話が出ています）

―そういう動きや、まちの変わり方を志賀さん個人としてはどんな思いで眺めておられるのですか？もしかしたら仕事関係ですでにかかわっていることもあるかもしれませんが。

私のように震災前からずっと同じ仕事ができているというのは幸せなことかもしれないです。南相馬に「福島ロボット・テストフィールド」ができていますけど民間人は入れていないみたいですから、あまり雇用の創出にはなっていないかもしれません。これからでしょうね。双葉町に震災遺構や記念館ができたりして、福島県の浜通りにはいろいろな施設ができました。だいぶお金もかかっていると思います。ただ、それによって、直接的に住民が潤ってないし、この先どうなるかっていったら、まだよくわからない。いろいろやっていただいてるのはありがたいなと思いはしたのですが、まだまだ先は見えないですね。

―震災前のように原子力発電所の中に入ったりして仕事をすることもあるのですか？

震災前は100%、発電所関係の仕事でしたが、今は現場に行くことはありません。商品販売はしていますが、私の営業所の売り上げベースで発電所関連は３～５%くらいです。環境の測定、森林の測定、ゼネコンさんの仕事が多いです。ただ、除染作業やゼネコンがいなくなると一気に仕事が減ってくると思うので、ここ２，３年が転換期だと思います。

―汚れていることで仕事が生み出され、それがなくなれば仕事がなくなっていくという複雑な心境ですね。

前にも言ったかもしれませんが、複雑な気持ちで仕事が増えていって、そして減っていくかもしれないということですね。自分としては、何としても仕事を続けていかないといけないので、何でも、とにかく仕事をして、ここで生きていくと思っています。

―新型コロナ感染症関係で新たな仕事の分野が開拓されたりすることはないのですか？これまで開発・製造されてこられた技術やマスク、排気装置などが活用されると

か？

そうなんです。かつてSARS（重症急性呼吸器症候群）が流行った時に作っていたマスクを、震災の時、５～６枚持っていて、その SARS 用マスクを子どもにつけさせたりした話も以前したと思うんですけど、今回は、放射能を防御するフィルターを使ったドーム型の寝袋のような入れ物が、担架で人を運ぶ時にかぶせて個人を隔離できるということで、だいぶ売り上げがあります。SARS の時には 30 台くらいしか売れなかったんですけど。人が入っている内側を陰圧にして、内側にいる人の息が外に出てこないという仕組みです。担架やストレッチャーに載せておけるので個人個人が隔離されるのです。

―今までの技術や商品から新しい展開ですね。ではお仕事が原子力発電所や除染だけでなく、それ以外にも広がっていくかもしれませんね。

ただ、医療系の物品販売は店に行って買い物をするのとはわけが違うみたいで、なかなか難しいかもしれません。

―浪江の住民の一人として原子力発電所の今の状態をどんなふうに見ておられるのですか？原子力発電所の中の情報を日常的に耳にする機会が減ったように思うのですが。最近だと汚染水の海洋放出をめぐって議論をしているという話は聞きますが。

発電所は結構情報をホームページで公開しています。思ったより詳しいことがいろいろ出ていますよ。でも、内容が専門的すぎて、少し易しく書いてはあるのですが馴染みのない人が見てもよくわからないかもしれません。

―現在、原子力発電所の安全は一定保たれていて、現状維持か、少しよい方向へ進んでいるということですね？

間違いなく前へ進んでいるとは思います。ただ、この山が３千メートル級なのか、１万メートル級なのかが実はわからない。とりあえず 5 千メートル級の山だと仮定してロードマップを作っているけど、それは仮定であって実際のところ本当には山の高さはどのくらいなのかわからないともいえるような状態でしょう。ただ、進んではいる、と思います。

―長い時間がかかるものでしょうしね。

チェルノブイリ原子力発電所みたいに石棺をつくって閉じ込めた方がいいのではという気もしないではないです。ドロドロに溶けたものを取り出してどうするのかと考えると、なかなか難しいなと思います。ただ、溶け落ちた燃料をそのままにもしておけないから。ただ、とにかく、やらなきゃいけないことはやらなきゃいけない、そういう状態です。汚染水の海洋放出も、安全規制上、数値としては問題ないと思いますが、風評被害もありますし漁業者が反対するのもよくわかります。技術的に安全かどうかというよりも、安心や風評の問題が大きいので、そこをどう決着つけるかが重要ですね。せっかくここまで来たのにやめてくれっていう漁業者の方の気持ちもわかりますし。

―地域の外には伝わっていないけど、町の中ではこんなことが起きているということは？

やはり仕事ですよね。ここに戻ってきたくても、まだ仕事をする年代の人が仕事をしようと思った時に仕事がない、例えば、55歳で新しく仕事をするとなった時、まったく業種も違う会社が雇ってくれるかという

問題もありますよね、仕事がないので、浪江の外でやらざるを得ないという現実があるのかなと思います。

浪江のまちの中で、かつて小学校の通学路だったところを通ると、「あれ？ここ、どこだったかな？」って、自分の町なのにわからなくなることがあります。建物など目印がなくなってしまったからでしょうね。それだけ復興が進んでいるということでもあるんでしょうけれども。小学校も中学校も取り壊しが決まっています。夏に「自分たちの卒業した学校を見よう」という企画がありました。そこに、ドローンを飛ばして学校の上を飛び、周囲を撮影して動画で流すというお手伝いをしました。浪江にもロボット・テストフィールドの滑走路がありまして、南相馬がメインなんですけど、南相馬から飛んできて浪江でちょっと降りられるようになっている、そのテストフィールドのお披露目会があったんです。一般公開だったので、その時、ドローンをちょっと飛ばしてくれないかという話がきました。せっかくだから、小学校の上を飛んで、学校のまわりをぐるっと回って撮影することにしました。その動画は浪江町の YouTube で流しているので見ることができますよ。その小学校は、自分も、自分の子どもたちも通った学校だったので、すごく感慨深かったですし、現在の状況を上から撮影できたので、とてもいい機会でした。

―役場はどんな様子ですか？

他の地域からお手伝いにきて下さっている職員の方が、まだ結構たくさんいらっしゃいます。役場の職員の中でも辞めてしまった人も結構いるので人手不足の中、とてもありがたいことです。そういう方がいないと今も手が回らない状態だと思います。

―地域の中から新しいまちをつくっていこうというような機運や雰囲気というのは？

役場職員は、そういう状態なので、役場に頑張ってというのは荷が重いだろうなと思います。どうすればいいかわからないけれども、「ドローン飛ばして」と言われたら、「いいよ」といってお手伝いしたりしていますが。私が浪江に戻ってきた目的の一つは商工会に入るということでした。再開した事業者も少ないと聞いたので、ぜひ自分の町に戻って商工会に入りたいと思っていました。浪江に来て一年ちょっとしたので商工会に入れてもらいました。

浪江での暮らし

―商工会にはどんな方々が？

600 くらい登録されています。ただ、その中には廃業した方もいたりして、実質的に動いているのは数十件ほど、登録の 10%くらいでしょうか。そもそもまだ浪江の中で事業をやれていないとか、震災で避難をして避難先の二本松で事業を始めた人もいます。町の中には、そんなに人はいないと思います。ただ、何ができるかわからないですけど、とりあえず商工会に入って、何かできたらと思います。先ほどのシンポジウムも商工会から案内が来たんです。そういう時は、なるべく行くようにしています。

―商工会が一つの拠点になりそうでしょうか？

お店をやっていた人たちは住民を知っているし、住民も店の人の顔を知っているし、そういう意味では、たまに帰ってきた人も安心できる。商工会というより、生き字引的な商店のおじさんたちって重要なのかもし

れません。商工会は、それほどパワーがあるわけでもないので、事業者の支援をしてあげることがメインですからね。商工会自体が何かをするというより、サポートをするということでしょうかね。

商工会ですから、「商」と「工」ですよね。「工」の方、建設業や製造業の方は仕事があるんですよ。ただ、「商」の人たちはあまり仕事がありません。

―大きなスーパーが開店していますね？

人がいないから商店が赤字になってできないのか、商店がないから人が来ないのか、難しいところですね。でも、イオンが来てくれたのはひじょうに助かります。食材を買いに行くのにはありがたいです。ただ、あのくらいの大規模組織じゃないと普通の商店がやるのは、難しいかなという気がします。本当は以前から浪江にあったショッピングセンターがやってくれると嬉しいところなのですが、全国規模ではないところでは耐えられないのかもしれません。だから、まだうちの社員で南相馬にいる連中に、浪江に引っ越して来いとはいえないですよね。南相馬も田舎ですけど、飲み屋もあるし、タクシーもあるし。避難していなかった地域なので浪江とは段違いです。

これからに向けて

浪江には、若い人がいません。（少ない）小学校があるし、子どもはいないわけじゃないですけど、何十人しかいないところなので、子どもが生まれて、学校に入って、結婚して、年をとって死んでいくっていう人生のサイクルがまだそこでは難しいです。私は、まだ 55 歳、もう 55 歳かもしれませんけど、このあたりでは 55 歳はまだ若い部類です。私は、浪江への想い入れはあるし、青年会もやっていたので自分もすごく強い気持ちを持つことができたので、こうやっているんですけど、そうじゃなかったら、わざわざ不便なまちに引っ越してくるっていうのは難しいかもしれません。私は「浪江に帰りたい」と思っています。ふるさとですし、昔の思い出も含めて「ふるさと」です。その思い出が自分の心を突き動かすところがあるのだと思います。でも、私の妻に言わせると、「女は未来に生きるけど、男は過去に生きる」のだそうです。笑い話ですけど。女性は順応が早い。「だから嫁に来るのかな」って言ったら、「それは性差別だよ」って笑われました。家を捨てて嫁に来る女に対して、男は新しいところに順応しづらいのかもしれないです。いつまでもずっと昔の話ばかりしているって。

―じゃあ復興は男性じゃなくて女性がメインにやった方がいいんじゃないですか？

本当に。私もそう思います。「昔はこうだった」とか、「今の若い者は」とか、こだわりがあるし、「自分がやらなきゃ」って勘違いするんですよ。「女は未来に生きるけど、男は過去に生きる」んですね。

―今の浪江は圧倒的に男性のまちになっているかもしれませんね。もっと女性がいないとだめですね。

ほんとですね、若い人や女の人が戻ってこれるような環境になればいいですね。

―震災後、10 年後なんて展望できなかったと思いますけど、今、ふりかえってみて、10 年たって、どうでしたか？

「戻りたい」と思っていましたけれど、「そうなれるかな」って正直、どこかで思っていました。ただ、今から考えると、その「戻

る」の定義が何だったのかという気もしますね。あの時、自分が戻りたかったのは、震災の前の、皆がいる「あのまち」だったんです、きっと。そういう幻想を追っていたし、それを糧に生きていたんです。ただ、自分が戻りたかったまちがもう存在しないのは、薄々わかってはいたけれど、現実に、ここ（浪江）に戻ってみて、週に 3 日、泊まったりしてみると、そうではなかったんだ、自分が戻りたいと思っていた町はもうないんだということを実感します。だからといって、今からどこかに行くという気はないですが。やっぱり「過去に生きる」男なのでしょうかね。妻も浪江出身で、浪江の小学校を出ているんですけど、浪江への想い入れは私ほどはないようです。やっぱり復興には女性が必要ですね、柔軟に考えられるのは女性かもしれない。男は凝り固まっちゃっているから。

―今日、お話をうかがって、自分の家で眠れないという話がとても重かったです。笑いながらお話ししてくださいましたが、つらいだろうなと思いました。おうかがいしたいこととしては、これからの 10 年、浪江でどんなふうに過ごしていきたいですか？（後藤・日青協）

実は、今、このあたり一帯、イノシシがすごく多いんですよ。うちの庭も結構、掘り返されたりしていますし、このあいだも年配の方がかけた罠にイノシシが 2 頭かかったりして、被害がすごいんです。そこで、私が思ったのは、定年までに狩猟免許を取ろうということです。これから 10 年、15 年たつと、今、やってくれている人たちが、いい感じの年齢になるので、私たちが 60 歳とか 65 歳から、その人たちの代わりをしなきゃいけないんじゃないかなと思っています。そのために狩猟免許を取っておこうかなと思っています。

ここでは、ジビエができません。隣の南相馬市でも 3,000 頭くらいのイノシシの死骸が土をかぶせておいてあったりしている状態で、専用の焼却炉を作ろうかって話も出ているくらいです。とにかく、イノシシが減らないので、このままだとそんなことをしなくちゃいけなくなってくるかなって、最近、思い始めました。

―そうやって地域の中でのサイクル、循環を考えて、次の世代としてやろうとしていこうとしていること、地元に根づいたことをやろうとしているということをうかがって、すごくカッコいいなと思いました。（後藤・日青協事務局）

今、思うこと

最後に、言いたいのは、震災があって、いろいろなことがあったんですけど、一番残念なのは、いろいろなところで分断が起きたということです。帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除区域と分けられて、区域がどこで、賠償金が倍だったとか、中間貯蔵でお金が入ったとか、入らなかったとか、そういうことで亀裂が入ってきて、それが分断ラインだったりして、すごく難しいなと思いました。どこかで線を引かなくちゃいけないんだけど、その線の引き方が妥当だったのかと考えます。現実に、そういうことが起きているので、それを時間が癒してくれるのを待ちつつ、元のようなまちの姿が少しでも戻れればいいなと思っています。

―なかなかしんどい状況がありますね。

福島市の方に行って放射線を測っていた

ら、そこに来たおばあちゃんが、自分がつくったアスパラが風評被害で売れないんだよって言うので、「おばちゃん、だいじょうぶだよ。おれなんか自分の町にいられなくて逃げたんだから」って言ったら、おばちゃんから、「あんたたちは、お金をもらえて逃げられていいよね」と言われてショックでした。それからは、自分が逃げてきたっていうのは、そうそう言えなくなっちゃった。

―浪江から避難しているということはあまり言わないようにしていると前にも言っていましたね。

避難している人の一部の人たちが、例えば、毎日パチンコ屋に行っているとか、ものすごくいい車に乗っているとか、そういうことをやっかまれたり、避難民なんだからもっとこうしてほしいと言ったり、それを受け入れている側の人にしてみれば、そんな言い方しなくてもって思ったりとか、正直に言うと、そういうことはいろいろあります。極端な話ですが、避難して、マンションをキャッシュで買うということもあるわけです。賠償金も、自分の家があった人はもらえたけれども、アパートに賃貸で住んでいた人は、賠償金はそんなにたくさんはもらえないわけです。そうすると、そこでも格差が出るわけです。いわきの人たちにしてみれば、避難してきた人で自分の家に帰れない人が新しく家を買うので、いわきの土地の値段が 3 倍になったというのですが、そこで、いわきの人から「うちの息子が 35 になったから家を建てようと思うんだけど土地が高くて買えないんだよ」って言われると、こっちが、責められていないのに、妙に自分が意識しちゃったりして、特に何も言われていないのに、ということがあります。以前、他で言われたことがあるから、自分が直接言われたわけじゃないのに、そういうふうに思われたりしているんだなと思ってしまったりします。

―そういう気持ちを、10 年間、引きずりながら過ごしてこられたんですね。

いろいろなところで、自分の立場をわきまえるというか、線を引いて動かないといけないということもありましたね。正直に言うと、水害や洪水で被害を受けた方に比べると保障してもらえる金額が違いすぎて、それで助かった部分もありますし、それがなかったら住宅ローンかかえてどうなっていたかと思いますけど、でも水害だったら保障はどうかと考えると格差がありすぎるという気もします。マンションを買えちゃうくらいもらえるわけですから。洪水だったら再建資金 50 万円とか、そのくらいが関の山なのですから、それはやっかみもでるでしょうし、こっちも申し訳ない気分にもなります。ひじょうに言いづらいことですけど。ただ、賠償金をもらった人の間でも軋轢があるし、格差ができた、溝ができた、それはぬぐいされないことだと思います。あとは時間が解決してくれるのを待つしかないですね。

私の家、（都会の人から見ると）すごく広いんです。親も一緒に住むかもしれないということで、家を大きくつくったんです。そうすると、そこに今、一人でいるとすごく寂しい。会社のアパートがまだ南相馬にあって、浪江の自宅からそこ（南相馬）に戻ると、妙にほっとするです。避難所でも、だだっぴろいところにいると落ち着かなくて、壁をつくって自分の周りを囲って安心するっていうのがありますけど、だだっ広いところ

は落ち着かないんですね。だから、もしかすると、さっき言ったのはPTSDじゃなくて単に広すぎて不安だったのかな、なんて笑っていますけど。アパートは一人で住むには快適です。ただ自分の家があるから家に居なくちゃなんて、今は笑って言えるようになったのが、よかったです

―ありがとうございました。

お役にたったのかどうか・・・

―いえ、なかなか言いにくいこと、聴けないことも含めて、あるがままを率直におうかがいできるのは、本当にありがたいことです。これも青年団のつながりで支えられているところがありますね。

それは完全にありますね、100%、青年団の人たちだからですね。先ほども「先輩」って後藤さんから言われて、以前、静岡県団の人たちが来てくれて浪江も見ていってくれたんですが、その時にも年齢的にもだいぶ違いますけど静岡の人たちに「先輩」って言われて、親近感がわきますよね。年齢が違ってもつながれるので。県団や日青協のつながりっていうのは、すごく信頼できるつながりですよね。「先輩」って言われると、気持ちがひらくのがわかります。よかったな、幸せだなと、私は思います。

―ありがとうございました。

【プロフィール】

志賀　重夫（しが　しげお）

福島県双葉郡浪江町在住、出身。1965 年生まれ。

会社員。

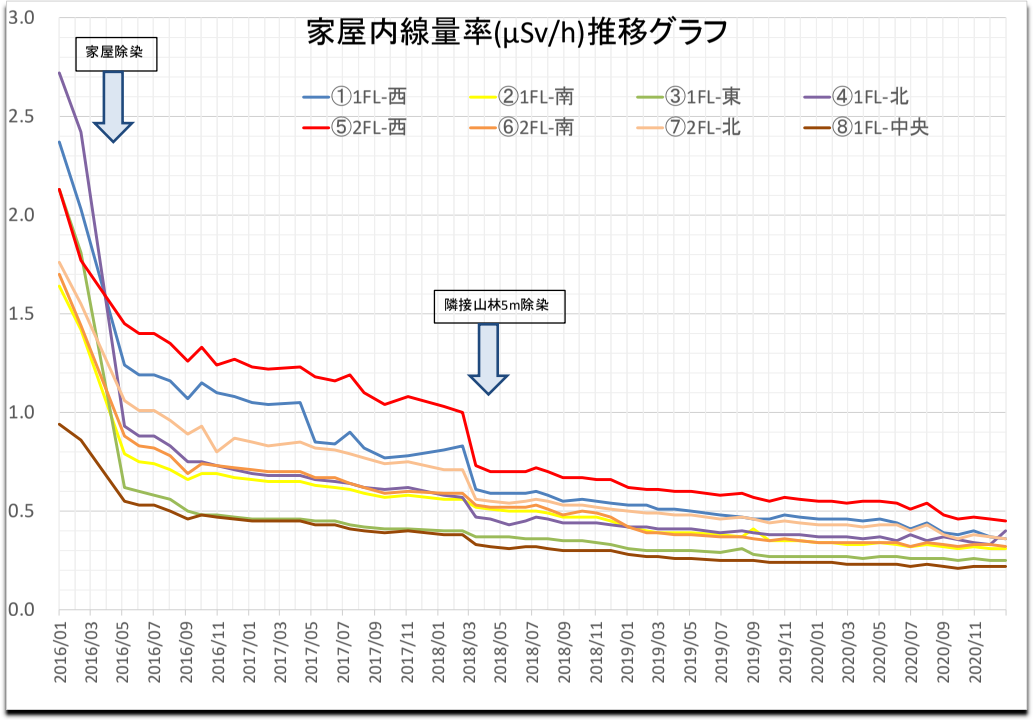
元福島県連合青年会副会長。

震災パネル第１部⑦。
『生きる』第２号に寄稿した手記の抜粋。

家屋内測定記録

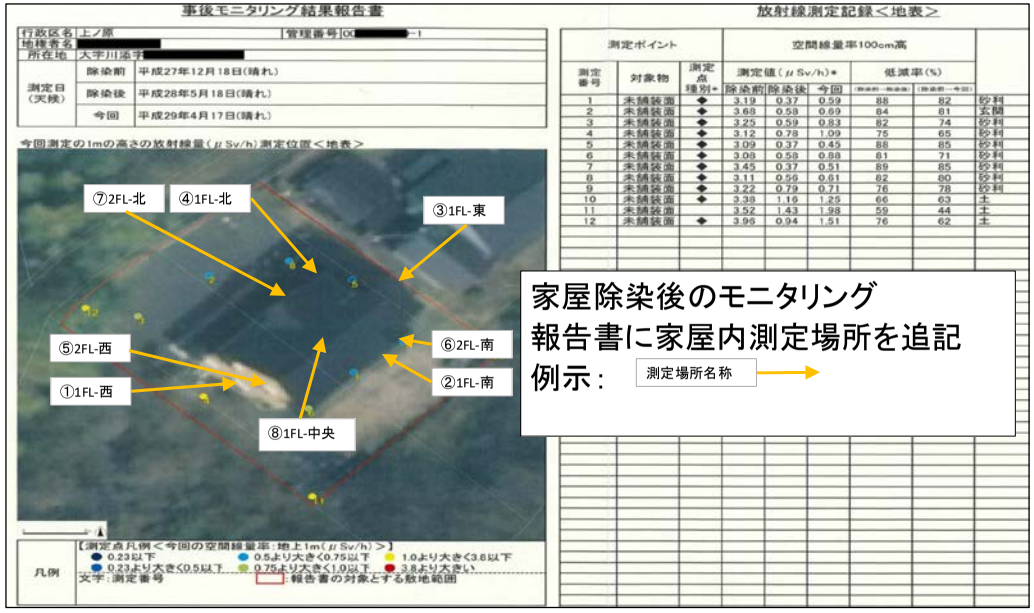
2016(H28)年1月～
2021(R3)年1月）

年月	家屋内測定場所　（単位: μ Sv/h）							
	①1FL-西	②1FL-南	③1FL-東	④1FL-北	⑤2FL-西	⑥2FL-南	⑦2FL-北	⑧1FL-中央
2016/01	2.37	1.64	2.13	2.72	2.13	1.70	1.76	0.94
2016/02	2.03	1.42	1.81	2.42	1.77	1.44	1.55	0.86
2016/05	1.24	0.79	0.62	0.93	1.45	0.88	1.06	0.55
2016/06	1.19	0.75	0.60	0.88	1.40	0.83	1.01	0.53
2016/07	1.19	0.74	0.58	0.88	1.40	0.82	1.01	0.53
2016/08	1.16	0.71	0.56	0.83	1.35	0.78	0.96	0.50
2016/09	1.07	0.66	0.50	0.75	1.26	0.69	0.89	0.46
2016/10	1.15	0.69	0.48	0.75	1.33	0.74	0.93	0.48
2016/11	1.10	0.69	0.48	0.73	1.24	0.73	0.80	0.47
2016/12	1.08	0.67	0.47	0.71	1.27	0.72	0.87	0.46
2017/01	1.05	0.66	0.46	0.69	1.23	0.71	0.85	0.45
2017/02	1.04	0.65	0.46	0.68	1.22	0.70	0.83	0.45
2017/04	1.05	0.65	0.46	0.68	1.23	0.70	0.85	0.45
2017/05	0.85	0.63	0.45	0.66	1.18	0.67	0.82	0.43
2017/06	0.84	0.62	0.45	0.65	1.16	0.67	0.81	0.43
2017/07	0.90	0.61	0.43	0.64	1.19	0.64	0.79	0.41
2017/08	0.82	0.59	0.42	0.62	1.10	0.62	0.77	0.40
2017/09	0.77	0.57	0.41	0.61	1.04	0.59	0.74	0.39
2017/11	0.78	0.58	0.41	0.62	1.08	0.60	0.75	0.40
2018/01	0.81	0.56	0.40	0.58	1.03	0.59	0.71	0.38
2018/02	0.83	0.56	0.40	0.57	1.00	0.59	0.71	0.38
2018/03	0.61	0.52	0.37	0.47	0.73	0.53	0.56	0.33
2018/04	0.59	0.51	0.37	0.46	0.70	0.52	0.55	0.32
2018/05	0.59	0.50	0.37	0.43	0.70	0.52	0.54	0.31
2018/06	0.59	0.50	0.36	0.45	0.70	0.52	0.55	0.32
2018/07	0.60	0.50	0.36	0.47	0.72	0.53	0.56	0.32
2018/08	0.58	0.49	0.36	0.46	0.70	0.51	0.55	0.31
2018/09	0.55	0.47	0.35	0.44	0.67	0.48	0.53	0.30
2018/10	0.56	0.47	0.35	0.44	0.67	0.50	0.53	0.30
2018/11	0.55	0.47	0.34	0.44	0.66	0.49	0.52	0.30
2018/12	0.54	0.45	0.33	0.43	0.66	0.47	0.51	0.30
2019/01	0.53	0.42	0.31	0.42	0.62	0.42	0.50	0.28
2019/02	0.53	0.40	0.30	0.42	0.61	0.39	0.49	0.27
2019/03	0.51	0.39	0.30	0.41	0.61	0.39	0.49	0.27
2019/04	0.51	0.39	0.30	0.41	0.60	0.38	0.48	0.26
2019/05	0.50	0.39	0.30	0.41	0.60	0.38	0.48	0.26
2019/07	0.48	0.38	0.29	0.39	0.58	0.37	0.46	0.25
2019/08	0.47	0.37	0.31	0.40	0.59	0.37	0.47	0.25
2019/09	0.46	0.41	0.28	0.39	0.57	0.36	0.46	0.25
2019/10	0.46	0.35	0.27	0.38	0.55	0.35	0.44	0.24
2019/11	0.48	0.35	0.27	0.38	0.57	0.36	0.45	0.24
2019/12	0.47	0.35	0.27	0.38	0.56	0.35	0.44	0.24
2020/01	0.46	0.34	0.27	0.37	0.55	0.34	0.43	0.24
2020/02	0.46	0.34	0.27	0.37	0.55	0.34	0.43	0.24
2020/03	0.46	0.33	0.27	0.37	0.54	0.34	0.43	0.23
2020/04	0.45	0.33	0.26	0.36	0.55	0.34	0.42	0.23
2020/05	0.46	0.34	0.27	0.37	0.55	0.34	0.43	0.23
2020/06	0.44	0.33	0.27	0.35	0.54	0.34	0.43	0.23
2020/07	0.41	0.32	0.26	0.38	0.51	0.32	0.40	0.22
2020/08	0.44	0.33	0.26	0.35	0.54	0.34	0.43	0.23
2020/09	0.39	0.32	0.26	0.37	0.48	0.33	0.38	0.22
2020/10	0.38	0.31	0.25	0.36	0.46	0.32	0.36	0.21
2020/11	0.40	0.32	0.26	0.34	0.47	0.33	0.38	0.22
2020/12	0.37	0.31	0.25	0.33	0.46	0.33	0.37	0.22
2021/01	0.36	0.31	0.25	0.40	0.45	0.32	0.36	0.22



富士電機社製の 積算線量計DOSE-e　8台を使用し約1カ月毎に測定値読み出し。
7台は窓際、1台は一階中央部に設置し積算線量率と測定時間から線量率を算出。

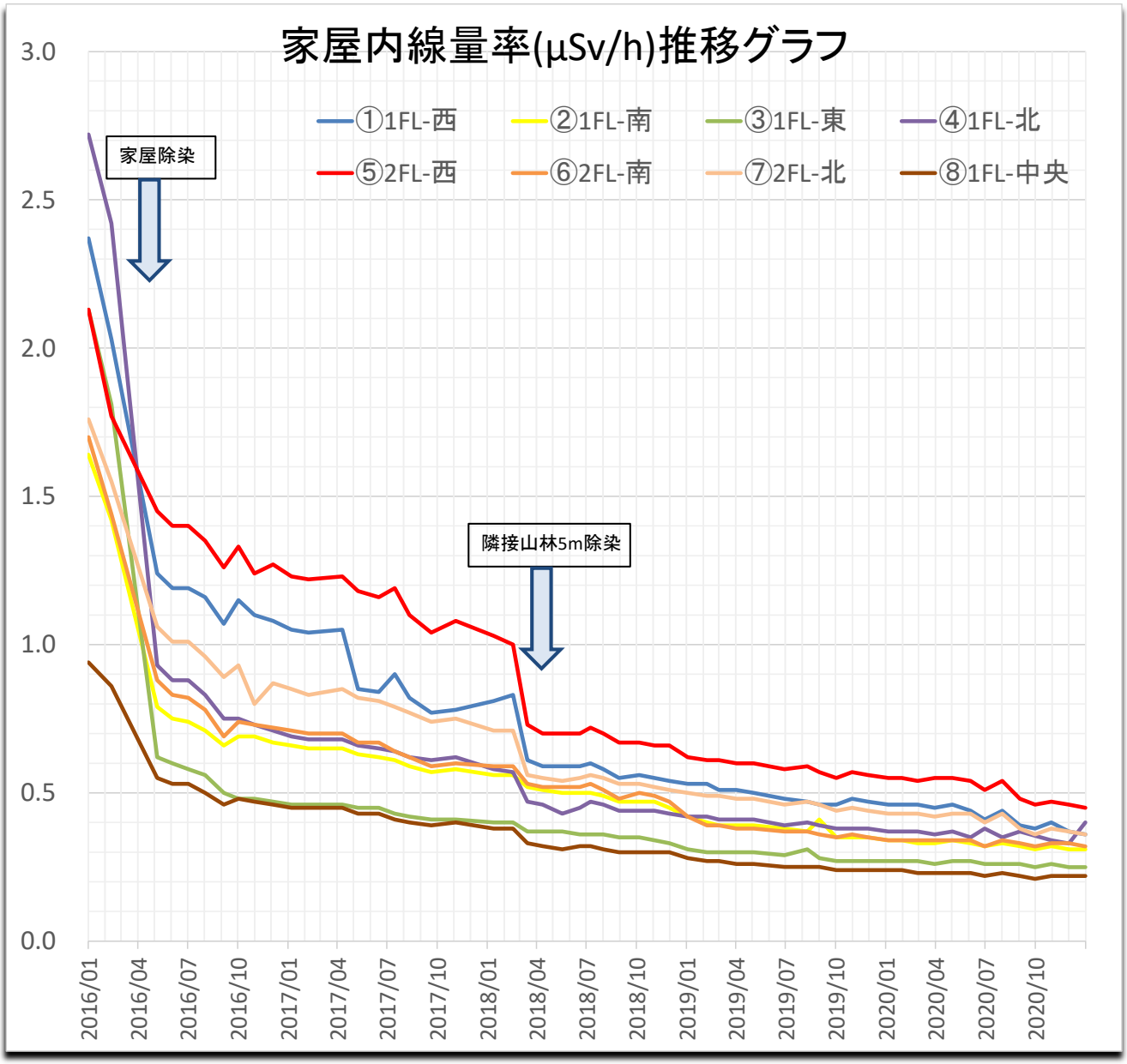
測定器：富士電機社製 DOSE-e



DOSE-e（201512-202101）■まとめグラフ化2021_04

家屋内測定記録

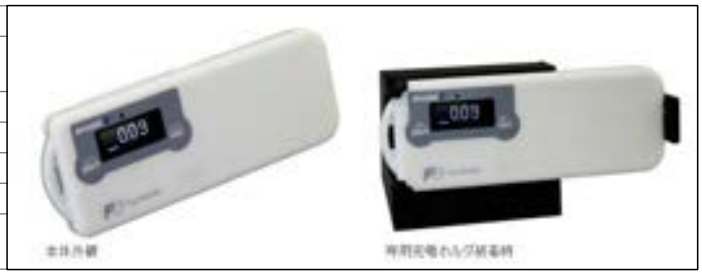
（2016(H28)年1月～2021(R3)年1月）



富士電機社製の 積算線量計DOSE-e　8台を使用し約1カ月毎に測定値読み出し。
7台は窓際、1台は一階中央部に設置し積算線量率と測定時間から線量率を算出。

測定器：富士電機社製 DOSE-e

検出器	X・γ線用シリコン半導体検出器
測定範囲	積算放射線量：0.001mSv～99.99mSv 放射線量率：0.01μSv～999.9μSv/h
表示機能	積算放射線量、放射線量率、アラーム表示
外形寸法	長さ 120mm × 幅 46mm × 厚さ 15mm
質量	約110g
使用時間	充電式内蔵電池にて30時間以上
データ保存	1日の積算放射線量と最大放射線量率を1年間保存 （保存データは、別売の専用ソフトウェアにより読み出し可能）



DOSE-e（201512-202101）■まとめグラフ化2021_04

真の復興をめざして

宍戸　克己
（福島県伊達市）

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所の事故から 10 年が過ぎようとしているが、昨年から感染拡大している新型コロナウイルス感染症の猛威がその記憶をより鮮明にさせる。それは、分断という意味でである。新型コロナに感染してしまった人、感染させてしまった人が、世間から誹謗中傷され社会問題化しているという報道にふれるたび、震災当時、原発事故による避難勧奨地域が机上で線引きされ、実際には隣同士でもその支援や補償の内容が異なりコミュニティの分断を引き起こしたことが思い出される。福島ナンバーの車が首都圏から敬遠されたという話もよく聞いた。私も福島の米や果物は、放射能に汚染されているだろうから買わないと何人かから言われた。農業を通じて親しく付き合ってくれていた人々が自然と遠ざかっていったのである。

震災当日のことを少しだけ思い出してみたい。私は介護施設に勤めていた。突然の大揺れにより駐車場のアスファルトはまるで荒れ狂う海のように波を打ち、車が前後左右に大きく揺れぶつかり合っていた。倒れてくる棚や下駄箱をよけながら、自動ドアを手で開けやっとのことで外に出たものの、立っていられずに地面に膝をついた。揺れている時間はものの数分だったが、このまま世界が終わるのだろうか、と思うくらいに深刻な気持ちになった。揺れが収まり建物内を奥に進むと、頑丈な机が倒れ、棚や引き出しの物が散らかっていた。夕方になり、テレビからは見慣れた仙台平野を飲み込む黒い津波の映像が映し出され、言葉を失った。

原発事故のことを知るのはその数日後となる。原発が爆発事故を起こし、放射能がまき散らされたという情報に接し、その放射能はまさか内陸までは来ないだろうと思っていたが、浜通りから風に乗って北上し、南相馬市、浪江町、飯舘村、川俣町、伊達市、福島市、二本松市と中通りを南下したのであった。ふつうは、毎時 0.04 マイクロシーベルトという放射線量が、青年会館の雨どいの下では 30 マイクロシーベルトだった。直ちに健康被害はない、という当時の官房長官の話をしばらくは信じていたが、実は原発では大変な事故が起きていたということがわかった。放射能にさらされた被害は、10 年たった今でも癒えることはない。住宅地周辺の除染は数次にわたって行われたものの、広大な山林、田畑の除染は思うようには進まず、廃炉まで数十年という事故処理の見通しもはっきりしない。私の住んでいる地域でも、未だに干し柿は全量放射能検査が行われ、山菜のタケノコは出荷できない。

ところで、復興という言葉をよく耳にするが、復興とは何だろうかと思う。元通りにはならないし、なかったことにもできない。新しい生活を余儀なくされてスタートすることが復興なのだろうか。津波で流されたところに新しい建物ができたら復興といっていいのだろうか。心の復興ともよくいわれるが、心を上書きしていくことで以前の気持ちをしまい込むことなのだろうか。震災では、津波被害に遭われ、大事な人を亡く

した人、住むところを失った人、生きる希望をなくした人など、大変な方々がたくさんいる。そうした方々に比べると私などは被害を受けたうちには入らない。むしろ、震災のことを語る資格さえあるのだろうかと未だに自分に問いたくなる。震災後、多くの方々から大変でしたねと声を掛けられ、物知り顔で知っている限りの情報とわずかの体験を語る。しかし、被災地には全国各地から多くの方々がボランティアで駆け付けたが、私はどこにも行っていない。廃炉が進む原発を訪れたという学生グループの話もよく聞くが、私は原発の近くにさえ行っていない。海沿いを走る常磐道から遠く眺めてあのあたりだったかな、というくらいである。その程度の人間が震災を語っていいのだろうかという気持ちが実はどこかにある。これも被災地の一種の分断かもしれない。

しかし、真の復興に取り組んでいくときに、この様々な経験は伝えていかなければならないと思う。震災の経験は 100 人いれば 100 人の経験があり、大きくとも小さくともそのことを正確に伝えていくことが真実を伝えることにつながっていくのだと思う。

震災から 10 年が経つが、被災地の風景は変わっても、被害を受けた方々は、実は何も変わっていないと感じるのではないだろうかと思う。もちろん、全ての方々が前向きに生きようと努力されている。しかし、失ったものは取り戻せないし、それをなかったことにはできない。だからこそ、私たちはその方々の分の想いまで次の世代に伝えていくことをしないといけないのではないかと思う。それは、震災の事実を伝えることだけではなく、震災を通して感じたこと、学んだこと、すべての喜怒哀楽を、である。

私を含め青年団で活動してきた者にとって、青年団は社会の学校である。社会の全ては青年団で学んだのである。地域のことも、政治や経済のことも、人々との距離感も、会社での振る舞い方も、物事がうまくいく運び方も、そして生き方さえも、すべて青年団で学んだのである。だからこそ今、青年団がないからと嘆くのではなく、青年団がなくとも、若い世代に伝えることが大事なのである。そして若い世代から誰かに伝えることが、社会を変えるということだけでなく、自分自身を成長させていくんだということを実感してもらえるよう、積極的に若い世代に関わっていくことが、OB となった私たちの今の役割なのかと思う。

震災後、福島県浜通りと中通りをつなぐ復興道路としてつくられた東北中央道（後側）と道の駅「伊達の郷りょうぜん」

【プロフィール】

宍戸　克己（ししど　かつみ）

福島県伊達市在住、出身。1960 年生まれ。社会福祉法人職員・農業。元福島県連合青年会事務局長。

第二章
各地域で発生した自然災害にまつわる青年たちの実践の記録

私の震災体験

阪　光平
（北海道夕張郡長沼町）

平成30年9月6日午前3時7分に発生した北海道胆振東部地震は、北海道では観測史上初となる震度7を記録する未曽有の大災害となりました。胆振管内厚真町では大規模な土砂崩により民家が飲み込まれ、多数の犠牲者が出たほか、震源の近くには北海道最大の発電所で、北海道で消費される電力の大半を賄っていた「苫東厚真火力発電所」があり、ここが被害を受けたことによって北海道の大半に電力が供給されなくなる「ブラックアウト」が発生し、多くの道民の生活に影響が出ました。ここでは北海道の青年団で活動する自治体職員の私がこの災害に直面し、どのようなことがおき、どのように考え、行動したかを記述していきたいと思います。

まず、あまり報道されてはいないですが重要なこととして、この前日の9月5日夜、北海道では珍しい台風が上陸し、大きな被害が生じました。通常であれば台風が日本列島に上陸したとしても、北海道に到達する前に温帯低気圧に変化し、北海道には、それらしくない不気味な湿度（北海道の夏は本州と比べると乾燥しているため、この温帯低気圧の湿度は、私は不気味と感じてしまいます）と風、そして雨をもたらすのですが、この年の台風21号は日本海上を北上し、勢力を保ったまま北海道に上陸するという少し珍しい動きをしました。北海道で一番強い風が吹いたのは深夜で、私は夜中の3時にあまりの轟音に目が覚め、聞きなれない台風の音がいやに怖かったことを覚えています。

私は北海道の長沼町役場の職員なので、災害等が発生した時は役場から招集がかかります。このときは、台風の勢力が弱まった朝の5時ごろ上司から招集がかかり、職場へ行くこととなりました。当時所属していたのは教育委員会の社会体育係という、町内のスポーツ施設を管理する部署で勤務していたので、この台風でスポーツ施設に被害が生じていないか確認して回ることとなったのですが、台風の少ない北海道では珍しい超強風にあおられたことによって施設に大きな被害をもたらしていました。

前年改修したスポーツセンターの屋根は少しはがれ、公用車をしまっていた車庫は束石が倒れ建物がひしゃげシャッターが動かなくなり、屋外施設でも野球場のバックネットが強風で押し上げられ、また、怪獣でも来たのかというくらいの倒木が大量に発生し、中には道道（北海道の所管する道路）の方に倒れた木が電線に引っかかっているといったすさまじい被害が発生していました。なお、この木は高さ30mはあろうかというポプラの木でした。

僕は業者に、建物の修繕や倒木の撤去を依頼しました。また、被害を受けた施設を利用する予定の団体に対し、台風により被害が発生したため施設を使用できなくなった旨通知するといった業務に追われました。一番大変だったのはやはり道道に向かって倒れた木の撤去で、業者の方がチェンソーを持って高所作業車で上にあがり、枝や幹

を切っていくのですが、交通量の多い道道に落ちた木を、何人かで協力して交通に支障のないところまで持っていく作業がひどく骨が折れました。業者はそれなりの大きさに木を切って落としてくるのですが、やはり重量は相当なもので、しかも作業時間も結構かかりました。

こうして作業に追われているうちに一日が終わり家に帰ってきた僕は、慣れない肉体労働でくたくたになっていたので、そのまま布団に入り眠りについたのです。

結果として、僕は 2 日連続で夜中の 3 時にたたき起こされることとなりました。

生まれて初めて聞く地鳴りは、前日の台風をはるかに超える大音量で、僕に地震の恐ろしさを感じさせました。

ゆれている時「これは地震だ、しかも今まで経験したどの地震よりも大きい」と思いました。現に長沼町の震度は 5 強で、それまで僕が体験したのは震度 4 が一番大きな地震だったので、結果として思ったとおりでした。また築 45 年以上経過した老朽化したブロック造の職員住宅に住んでいた私は、この地震でひょっとしたら屋根が落ちてきて自分を押しつぶされることもあるかもしれないと思い、とりあえず布団の中で頭だけ両腕で守っていました。どのくらいの時間ゆれていたのか、もはや覚えていませんが、屋根が私を押しつぶすことはありませんでした。揺れが収まってから私は「これだけ大きい地震なのだから、確実に招集はかかるはず（役場の決まりで、震度 4 以上で招集がかかる）」と飛び起き、住んでいる住宅の 1 階に行き（珍しいかと思うのですが、メゾネット方式の職員住宅なので各戸に階段があるのです）自分の飼っている猫の安否を確認しました。猫は、名前を呼んでも出てきませんでした。たぶんその時は、どこか身の守れるところでうずくまっていたと思うのです。私は、自宅の家具が倒れているということがなかったので多分大丈夫だと思い、そのまま職場に向かいました。このときは、まだ町に電気は来ていました。

役場には自分の他に既に何人かの職員が出動していました。僕は上司と合流し、2 日連続で所管施設の被害確認にいくこととなったのですが、道中、外灯の電気が突然消えていく様を目撃しました。台風の時も朝から夕方まで停電していたため、これで長沼町は 2 日連続で停電することとなりました。このあと北海道は、地域によっては数日電気が復旧しませんでした。

電気がつかないスポーツセンターを、懐中電灯で確認して回ったところ、書庫の棚から文書をつづったファイルが落下していること以外は、大きな被害はありませんでした。途中、青年団の仲間たちの安否が心配になり、私の所属する長沼町青年団体協議会（長青協）のグループ LINE で会員が無事かどうか確認しました。会員たちもすさまじい地鳴りの音で飛び起きていたらしく、すぐに無事であることを報告してくれたので僕は安心しました。

そのまま町内の体育施設の確認をして回ったところ、倒壊・破損している施設はなく、地震の被害は前日の台風のそれよりもずっと小さいようでした。このことは、僕にとっては少し意外でした。しかしこの後、私は災害の残した傷跡というものを実感する

こととなりました。

長沼町役場の職員は、災害対応により 2 日連続で通常勤務より早く出勤することとなったため、地震による施設の被害確認終了後、2 時間ほど家に帰っても良いこととなりました。なので、僕はシャワーを浴びるため家に帰ることにしました。このときも停電していたのでガス湯沸かし器が作動せず、冷水シャワーで体を洗うことにしたのですが、これが冷たくて大変でした。電気に関して言えば、道内の市町村では停電が数日継続したところと、長沼町のように比較的短期間で電力が復旧したところと状況はまちまちでしたが、長沼町の中にあっても状況はさまざまで、役場・病院が近いところから早く電力が復旧しました。僕の家は病院がすぐ近くにあるので、電気は翌日には復旧していました。暗い夜を過ごしたのも 1 日だけでしたし、冷水シャワーを浴びたのもこの時きりであったように思います。

私が勤務していたスポーツセンターも電力の復旧が早かったので、2 日目以降は臨時の携帯機器充電所を開設することとなり、そのための作業と、台風の被害を施設ごとにまとめ、補正予算を編成するための作業に追われました。

このとき、連日の災害により精神的に憔悴した青年団の団員が、グループ LINE にひどく気弱な投稿をしました。彼は町内でトマト農家を手伝う 22 歳の青年なのですが、前日の台風時に倉庫のシャッターがわずかに開いており、そこから倉庫内に猛烈な風が吹き込み屋根が吹き飛ばされてしまったのですが、悪いことにそれが収穫した米や麦などを貯蔵する乾燥機の上部分でした。機械が雨などでまともに濡れてしまえば使い物にならなくなる。乾燥機は 1 台何百万円もする高額なものなので、彼は台風によりこのまま農業を継続できるか、一夜にして瀬戸際に立たされることとなりました。彼はひとまず家族と協力し、ブルーシートで機械の上部分を覆い簡単な防水対策は行ったそうですが、これだけでは当然足りない。一刻も早く屋根を修繕しなければ、多額の借金を抱えたまま離農することになってしまう。彼はこの恐怖心を抱えたまま猛烈な地鳴りを伴った地震の朝を迎え、また、彼の住んでいる地域は電力の復旧が遅かったため、暗い夜を過ごすうちにすっかり憔悴しきってしまったのです。LINE では彼のそうした状況が語られました。彼は私に言いました。倉庫の屋根を直してくれる業者を紹介してほしいということと、「肉が食いたい」。

私は施設管理をしている仕事柄、建設業者には多少の知り合いがいたので、農業倉庫の屋根を修繕できる会社の社長に電話をしましたが、同様の相談を多数受けているため、すぐに確認に行くことはできないと言われました。しかし、ここで食い下がってはいけないと思い、何とか確認に行ってあげてほしいと頼み込んだところ、何とか説得することに成功しました。後から聞いた話ですが、彼の父親と僕の相談した社長は同級生であったため面識があり、屋根の修理も比較的早く行ってもらえたそうです。

もう一つの彼の相談には頭を抱えました。スポーツセンターで行っていた携帯機器の充電所に町内最大手の肉屋さんが来ていた

ので（北海道では長沼町はジンギスカンで有名）、お店に行くから肉を売ってほしいと相談したのですが、この停電により冷凍庫の肉がすべて解凍されてしまい売り物にできず、大量に廃棄することになってしまったというのです。よく考えてみれば、仮に肉の買い置きをしていた人がいたとして譲ってほしいと相談しても、長時間の停電により肉が解凍されてしまえば、食べても食中毒になってしまうかもしれない。このままでは彼に肉を食べさせてあげることはできません。

何とか彼に肉を食べさせてあげたいと、ダメもとで近所のスーパーに売っていないか見に行きました。このスーパーは役場や病院に近く比較的早く電力が復旧していたからです。畜産コーナーに行ったら、なんとジンギスカンが販売されていました。ここは復電が早い地域だったので、肉が完全に解凍されてしまう前に再冷凍することができ、なんとか販売できる水準のものが残っていたようです。僕はこれを購入し、同じく電力が復旧していた「青年の館」で焼肉を実施することにしました。私と彼の他数名の会員が訪れ、焼肉を食べながら再会を喜び、情報交換をおこないました。この時は特に何も感動的なことはなく、いつもの飲み会のような雰囲気でしたが、これを実施したことで彼を元気づけてあげられたと私は勝手に信じています。また団歴の長い私は、青年団の絆のようなものを彼が感じてくれればいいなと思っています。

この数日後、北海道全域で電気が復旧し、僕の住む長沼町でも間もなくいつもどおりの日常が戻ってきました。しかし、被害の大きかった地域では、震災から長く仮設住宅にお住いの方も多くおられました。令和 2 年 12 月の北海道新聞で「多くの災害ボランティアを受け入れてきた厚真町ボランティアセンターが令和2年12月をもって閉所する」ことが記事になりました。平成 30 年 9 月 7 日に開設されてから 2 年あまり、当初は壊れた家財道具の片づけや被災した人たちが集うイベントの開催、最近では仮設住宅から次の住まいへの引っ越しを手伝うなどの活動を行ってきたそうですが、住民の方のボランティア出動要請がなくなったので閉所することとなったそうです。厚真町と長沼町はあまり距離が離れておらず、町を通過した際に仮設住宅が建っていることを遠目に見たことはあったのですが、被害の大きかった地域では、今日に至るまで住処を失い仮設住宅にお住まいの方が多数おられたということを僕は知りませんでした。

災害ボランティアセンターを設置した厚真町社会福祉協議会の方に、震災直後の様子や活動の内容などを伺っていきます。（次頁以降の「震災を体験して～北海道胆振東部地震の記録～山野下誠（語り）」につづく）

【プロフィール】
阪　光平（さか　こうへい）
北海道岩見沢市出身、北海道夕張郡長沼町在住。北海道青年団体協議会会長。

震災を体験して
～北海道胆振東部地震の記録～

山野下　誠（語り）
（北海道勇払郡厚真町）

平成30年9月6日午前3時7分、北海道胆振地方中東部を中心に震度7を記録した大地震が発生し、大規模な土砂災害や北海道全域で停電する「ブラックアウト」を引き起こすなど、多くの被害が発生しました。ここでは、震源に近く最も被害が大きかった勇払郡厚真町で社会福祉協議会に勤務され、震災後は「震災ボランティアセンター」を組織し、被災者の生活再建にあたられた山野下誠氏にお話を伺いました。

（これは、2020年1月19日に北海道青年団体協議会会長の阪光平さんが話をうかがい、記録にまとめ、それを山野下さんに確認してもらったものです）

―まずは、当日の個人的な震災体験について教えてください

地震の発生は深夜であったため、すでに就寝していました。発震時はあまりに激しいゆれのため、ベッドから逃げることもできず、マットレスにしがみついている状態でした。窓際にベッドがあったのですが、きっと窓から外を見たら地割れが見えるのではないか、と思うような強烈な揺れでした。家も窓ももう持たないだろうと思うほどに。しかし、窓ガラスが割れることはありませんでした。固定した家具は倒れませんでしたが、固定していなかったものについては倒れてしまいました。私が住んでいたのは厚真町本郷という地域で、地盤があまり良くありません。しかし、これほどのゆれ方なのだから、活断層が動いたのか、あるいは北海道以外の地域が震源地ならば、とてつもない地震が日本のどこかで起きたのだろうと思いました。私は古い耐震基準の家に住んでいるので、うちが無事ならほかの家も大丈夫だろうと考えました。

ゆれが収まってからベッドから出て、窓から外を見ましたが、目に見える範囲のところでは家屋の倒壊はありませんでした。ただ、後から聞いた話ですが、私の家から500m程度離れた小高い所に建っていた家屋は家が倒れたりしていたそうです。私はいったん地震が収まった後、家族に声をかけて安否を確認して、それから外に出て近所の方がお互いに無事を確かめ合っている様子を見て大丈夫だと確認し、私が勤務している社会福祉協議会が運営する施設へ向かいました。そこには生活支援ハウスというグループホームがあり、30名程度おられる利用者の皆さんの安否を確認するためです。しかし、メガネが地震でどこかに吹っ飛んでしまっていましたし、電気も止まってしまっていたので見つけられませんでした。否応なく車をゆっくり運転していって、なんとか利用者の方の安否確認もできました。この時は３時30分ぐらいであったと記憶しています。

私はそのあと、車で厚真町役場に向かうこととしました。到着したとき、すでに役場には職員の方が集まっていました。役場には非常用発電機があったため、照明がついていました。私ども社会福祉協議会の本部

がある建物は役場が管理しているケアセンターという施設の中にあって、そこにも人が集まっていました。事務所の様子を見たら地震の影響で書類が倒れ、惨憺たる有様でした。

4 時 00 分ごろ、役場にいれば何か情報が得られるかと思いましたが、役場もその情報収集の真っただ中であったので、私は何の情報も得ることはできませんでした。なので、家に帰って明るくなるまで倒れた家具などを片づけていました。明るくなって携帯電話を見つけてから、再度役場に戻って情報収集をしました。

この時点では震源が厚真であるというのも判明していませんでした。わかったのは 6 時か 7 時。私の家が無事だったので、そんなにひどい地震だったのかと思いました。いかんせん情報があまりにも少なく、地震の全容がすぐに把握できませんでした。この時点では電気は止まっていましたし、水道は断水していました。これでは用を足すことすらできません。避難者の方のために最初にしたことは、簡易トイレ設置のお手伝いをする事でした。

避難所の開設については、すぐに役場で取り掛かっていました。厚真町内では福祉センターが一番大きな避難所であったため、朝には人が水を求めてやってきましたが、福祉センターの水道も断水していましたので、水を得ることはできませんでした。しかし、昼には自衛隊が到着し給水を開始しました。

―避難しに来た人数は

人数は常に増減していましたが、一番多かったのは 9 月 7 日の 1,118 人。これは厚真町の人口の 4 分の 1 にあたります。一番被害が大きかったのは北部の山間。この地域は全域でライフラインが断たれていました。基本的に住民の方は自宅の最寄りの避難所に避難することとなっているのですが、自宅近くの避難所が土砂でつぶれしまっていたケースもありました。福祉避難所になるような施設もありましたたが、山の上にあったので地震で全壊。施設の入居者 100 名は全員避難することができました。

―避難所生活は最長の方で何日続いたのですか

地震からおよそ 3 カ月か経過した 11 月 30 日には 21 名。避難所は 12 月 6 日まで開設していました。避難所には仮設住宅に移れなかった人が長くいました。11 月 30 日時点でも体育館のような所で集団避難していた人もいました。福祉センターには和室のような部屋もあったので、避難者の方の年齢や体調に応じて和室を使っていたりしていました。スポーツセンターでの避難者は段ボールベッドとパーテーションを使っていました。段ボールベッドのおかげで、避難者の方は振動・音・冷えから守られました。

―避難所での生活（衣・食・住）はどのようなものであったか

避難者の方の着るものは、各自で持参するようお願いしておりましたが、断水していたため、洗濯はしばらくできませんでした。停電が解消されたのが 3 日目くらいで、断水も徐々に解消していきましたが、地震から 1 か月くらいまでライフラインが整わず、不便なエリアがありました。水道が復旧しない地域の方は、自宅が無事でも避難所にいました。避難所は在宅避難者の方も利用するため、仮設のトイレなども沢山導入

されました。食事も、避難所での生活を余儀された方だけではなく、在宅の方にも提供しました。

介護などの要因により、避難所に来られない方もいました。集団で避難できない方、在宅避難者も相当数いました。浄水場と、避難所となるべき施設も土砂に流されました。社会福祉協議会の職員もここで亡くなった人がいます。ここに建っていた地域の会館も被災し、消失しました。

災害を大きくした要因の一つに前日の台風によって地盤がゆるんでいたことがあげられると思います。山肌が大量の雨を含んでいたので、地滑りを誘発しました。山が崩れた、というよりは地滑りがあったという方が正しいのではという印象でした。水のように噴出した土砂により大きめの道もあちこちで寸断されました。中には道路自体が崩れていたところもありました。通常のルートでは町に入れないので、田んぼのあぜ道を通るだとか、裏道を通って町に入る必要がありました。

食べるものについて、最初は町の商工会関係者や自衛隊の方が炊き出しを行ってくれました。福祉センターのところで調理を行い、各避難所に配送するセンター方式をとっていました。1日に3回、これを1週間続けてくれました。夜間は発電機を使って発電し、投光器を使って照らしました。災害協定を結んでいるので各方面から発電機の貸し出しを受けることができました。初日は町で用意した食料の備蓄でやりすごしました。自宅で避難していた人は自分たちで持ち寄ったキャンプ道具等で、カップラーメンをつくっていたなどの話も後から聞きました。自治会がしっかりしているところは見回りなども実施しておられたようです。1日目、私は町内にあるすべての避難所の写真を撮りながら回りました。灯油タンクは相当数倒れていましたので、自衛隊の方がタンクの油を抜いたりタンクを起こしたりしてくれました。2階建ての施設にあった、避難用の階段も倒れていました。

1か月くらい自衛隊の方から食事を提供していただいていました。他にも、炊き出しのボランティアも来てくれて、励ましも含めてイベントを開催しているかのような感じで、ラーメンやカレー、牛丼などをふるまってくれました。

―厚真町では震災ボランティアセンターを発足させておられたようですが、どのような経緯で設立されたのでしょうか

災害対策本部の方とどうするか協議し、地震から２、３日のうちには立ち上げることを決めましたが、どういう事をするかは役場の災害対策本部と協議が必要でした。災害ボランティアセンターと看板を掲げることによって、町外から来ていただくボランティアの方の窓口として機能しやすかったり、また被災者の方の「ボランティアに頼ること」の敷居をさげることになります。主に、災害に起因する心配りが必要なことをするために立ち上げました。

―そこで業務をしていた方の普段のお仕事は

北海道社会福祉協議会の方と、道内の市町村にある社会福祉協議会と相互に人材を派遣しあったりする協定を結んでいたので、各地の職員延べ400名程度の方からご協力をいただくことができました。２日目の朝には、早くも他の社会福祉協議会から先遣隊が来てくれました。災害支援のNPOの方

にも入っていただいて設立準備を進めました。

災害ボランティアセンターに応募し、活動しに来てくれた方は延べ 5,504 人、活動件数は 1,229 件となっています。一番多いのは活動を始めて一か月程度がピークでした。厚真町では災害ボランティアセンターは地震から 2 年以上にわたって運営しましたが、ほかの町では数か月で閉鎖してしまうところが多いようです。ほかのところよりも長期間運営したのは、生活支援相談員を 11 月から配置し、継続して被災者支援に携わることになったことも大きいと思います。仮設住宅が 11 月 1 日から入居開始になり、2 次避難をしてきた方々の体調・コミュニティ・生活をサポートしながら再建していく。被災したことにより、家にいることができてもご苦労されている方もいる。なので、窓口としては閉じることはせず、相談を受けていけるよう維持しました。他のところでは通常の生活支援のなかでこういったことをやっていくところが多いようですが、福祉のお世話にはならないんだけど、災害に被災したってところではお世話になってもいいのかな、という方は相談しやすいと思います。認知度も高い。小さな町の中でボランティアを募っても、十分な人数を確保できない。町外からもご協力いただくため、災害の冠を被せたセンターを維持することとしました。

体操教室などにも取り組みました。これは地元のボランティアさんが中心となって進めていただいたものです。仮設住宅の相談支援を行う生活支援相談員生活サポートアドバイザーといった方々も専門職として社協のスタッフとしてかかわりながら仮設住宅の中の外出機会の創出だとか、運動不足解消のサポートに取り組んでもらいました。

ボランティアの方には、他に仮設住宅からの引っ越しなどの手伝いなどもしていただきました。他にも被災された方を元気づけるために演歌歌手や、重機を伴って被災した人の貴重品を取り出すなどの活動をした技術系ボランティアの方も相当数いました。私どもボランティアセンターを通じた活動以外にも、多くのボランティア団体が活動していましたが、全体は把握していません。

一番多かった活動は、家財を片づけたり処分したりする手伝いです。運び出して運搬してごみ処理場まで持って行って処分の手伝いをする。この活動は災害ごみの処分場が閉まるまでやっていました。主に家の中を片づけていましたが、厚真町は農業の町で、農家も多く、たくさんの納屋も被害に受けました。高齢者も多く支援を必要とすることもありました。

他にもポスティング（全戸訪問）でニーズの聞き取りなどをおこないました。発災直後は皆さん避難所にいましたが、家にも避難所にもいない人は町外の親類の方などを頼っていたので、家を空ける人が多かったのですが、人がいないので見ず知らずのひとたちがウロウロするといった状況が発生し、住民の方は不安そうにしていました。このことに対応するため、災害ボランティアセンターから派遣した人には黄色いビブスを着て活動してもらいました。残念ながら悪質な訪問販売をする業者などもいたようです。中には宗教的な、人の弱みに付け込むような物言いをして壺やネックレスを販売

する霊感商法する人もいました。住民の方を不安にするような、いろいろな方が来ていましたし、空き巣もありました。しかしボランティアの方に夜警はお願いせず、警察に回ってもらいました。

―ボランティアの年齢の内訳は

各世代ともまんべんなく来ていたと思いますが、SNS の発信が多かったため、40 代以下の方々が少し多かったように感じます。SNS での発信を毎日していたため、最後まで応援してくれる仲間をつくることができました。

―若者のボランティア活動について

厚真の若者たちはみな顔見知りで、避難所でリーダーシップをとって周りから頼られている人もいました。やはり、避難所生活の中にあっても、人から頼られる職業の方は尊敬されるような振る舞いをしていました。他には、自治会などもしっかりと機能していて、もともと培われていた地域の結びつきが強さを感じました。

厚真町に青年団はありませんが商工会や商工会青年部があり、そういった方々が炊き出しとか一生懸命やってくれました。あと、若い人たちが企画してくれた綱引き大会などの復興イベントを通じて地域の結びつきを感じました。

―震災ボランティアセンターの取り組みについて、困ったことや戸惑ったことは

困ったとまではかないが、被災直後、大勢の方がボランティアを志願してくれました。しかし、来てくれたボランティアの人数は、一日最大で約 280 人。この時お願いしたのは地震で被災した家の家財の片づけとか、災害ごみに出すといったことでしたが、ごみだからどんどん捨ててもいいかというとそうではなくて、住んでいる人にしてみればそれらがとても大切なものだったりするのです。片付いて綺麗になるのが早ければいいかといえばそうではない。被災した人のペースに合わせて作業してもらいたいとお願いしていました。

あと、ボランティアさんの不均衡というか、大勢の人がいても作業はゆっくり進めていかなくてはならない場合があります。手持無沙汰になる人がいたのは大変申し訳ないと感じておりますが、でも理解もしてほしい。

新聞では、ボランティアの割り振りに時間がかかっているとか、作業を待っているボランティア方がいるのに、その方に作業が割り振られなかったということを書かれました。しかし、災害が発生したとき日本全国に飛び回って各地でボランティアをなさっている方がいて、その方がおっしゃっていたのは、むしろマスコミが不勉強であると。ボランティア作業の開始までに待ち時間があったり、仕事の割り振りに時間がかかることは、どこの被災地でもあった。それは仕方のないことなんだと。

―地場産業の木炭製造について

厚真町は山が多いので、昔から農家の方の冬の仕事として、木炭の生産が行われたのですが、この木炭製造業も震災によって被害を受けました。震災当時、工場は昔より少なくはなっていましたが、町内に 4 か所ほどありました。しかし、それらすべて地震で被害を受けました。具体的には、窯本体が地震に耐えきれず押しつぶされるというものです。中には再建をあきらめた人もいました。それは、本人の気持ちでは窯を再建したいが、もともと窯があった場所が山間の

危険地域なのです。もう同じところに窯を作れない。再建場所が見つからなくてあきらめる人もいましたが、結果として、４か所あった窯のうち１か所が NPO などの支援・協力により再開できたことは、とても有難いことと思います。

―再建のめどが立ったところの手伝い

災害ボランティアセンターでは、被災者の生活再建を目指して活動しているのですが、こういった産業の再建についてお手伝いするのは難しいというか、どうだろうかという意見がありました。気持ちの上では、困っているのだから助けたい、なにか援助できないかなという気持ちがありました。私達は災害ボランティアセンターの運営だけではなく、そういった情報を NPO 法人や行政と共有できる会議の場を持っていますし、センターでは受け入れられなくても、そういう情報を共有して、全国の知見のある人たちのアドバイスをいただいたりできるネットワークを持っています。

「生業（なりわい）の再建なくして生活の再建はできない。」いくら家があっても、仕事がなければ生活の再建はできない。災害ボランティアセンターでは仕事の再建そのものを手伝うことはできないかもしれないが、厚真町の木炭の文化を地域の財産として考えて再建できないか。こういった我々の願いに共感していただいた NPO の方の尽力もあり、１か所の再建については炭窯の再建プロジェクトとして取り組むことができました。窓口は町外の NPO です。学生さんや、他にもいろんな人もきていただいて何とか成立しました。あと、産業のうち、畜産業というか、生き物が難しいと思います。牛を飼っている人は、家の事よりも牛。被災者の生活につながっていると考えれば支援したいが、牛につながっているということがあれば支援すべきなのかどうか。そこの判断基準は難しいと思います。

災害は、被災地された方々の生活を破壊し、住処や日常を奪っていきます。しかし、人々は互いに寄り添い、励ましあいながらこれを乗り越えていくことができる。今回取材させていただいた山野下氏のお話をうかがいながら、人の絆の大切さを感じました。

【プロフィール】
山野下　誠（やまのした　まこと）
北海道勇払郡厚真町出身、在住。生活支援担当主幹・厚真町高齢者生活福祉センター長

震災から十年を迎え

榊原　裕一
（岩手県陸前高田市）

まもなく東日本大震災から十年になります。陸前高田市では復興工事の終わりが見えて来ています。高台造成やかさ上げの工事が完了し引き渡された土地に家を建て仮設住宅や公営住宅を出た方、市の中心街や元の土地に本設の店舗や工場を建て商売を再開する方が多くなりました。そして、道路工事も進み通勤や買い物の便も改善され多くの市民が生活の基盤を取り戻し整えつつあります。

また、防潮堤や水門の防災施設以外にも、野球場やサッカー場、市民会館などが完成しイベントや大会が行われ市の活気も徐々に増えています。

新型コロナが流行する前は、市青協も六十回続いた青年芸能祭やその後継の青魂祭というイベントを行うことが出来ました。

これも今までご支援頂いた方々のおかげであり心より感謝しております。

さて、これからの課題ですがそのひとつは人口の減少による人手不足です。私の地域は震災前から高齢化が進み、若者が少なくなりそれが震災で更に深刻になりました。私の地域は市内でも土地の引き渡しが遅く、それを待てず他の地域に家を建てた方もおり現在は震災前の半分以下の戸数になっています。子供も少なく、地元に残れるところに就職する若者も少ないです。

すると、各組織は本来卒業する年齢の方がいつまでも現役で残り、後任の人材が入らないことになっています。そうなると地域に必要な組織を維持するには、掛け持ちをせざるをえず個人の負担が増えています。そして、運営の縮小や企画の見送りが増えています。

市内のイベントは増えていましたが、地域の行事はなかなか震災前のように開催出来ないのが現状です。

若者が地元に残り、地域の人口が増え、各組織の人手が十分になり、運営が充実するにはまだまだ時間が掛かります。

このような環境に加えて新型コロナの流行もあり、運営がますます厳しくなっています。どのようなやり方が正解なのかわかりませんが、視野を広げ出来ることを探しコツコツと活動の土台を整えていきたいと思います。

【プロフィール】

榊原　裕一（さかきばら　ゆういち）

岩手県陸前高田市出身、在住。陸前高田市青年団体協議会事務局次長。

2011 年 10 月 24 日に開催した
青年芸能祭の様子。

青年世代の私たちにできること ～福島県で暮らし、これからを考える～

長谷川　綾
（福島県会津若松市）

東日本大震災（以下、震災）から10年の歳月が過ぎようとする中、被災地で暮らす青年たちの生活ははどのように変わったのか。長谷川綾さん（30）は「地元のために何かしたい」という想いから福島県連合青年会に加入し、現在会長を務める。震災で多くの犠牲が出た福島県で活動する長谷川会長と、佐藤竜太さん（39）が、今の胸中を語った。

（これは、日本青年団新聞（ユースポスト）2021年3月号に掲載した記事です）

■当事者だから伝えられることがある

福島県内の仮設住宅はほぼ撤去され、震災直後の生活はもはやなく、震災前の日常に戻った。長谷川会長は、地元の人間にとっても震災の記憶が風化しているように感じる、と危機感を募らせている。青年会活動を通じて全国の仲間に震災について語る時、「私はどこまで震災を理解しているのか。何もわからず話をしているのでは」という気持ちに駆られる。そこには、自身が福島県民として生きているからこそ、震災を経験していない人たちに正しく伝えていく役割を果たしたいという想いがあった。今もなお毎月のように震災遺構を巡り、語り部さんにお話を伺っている。また、青年会活動だけでなく北会津公民館で活動している「パズル」という若者団体にも所属し、震災の実相を学ぶ取り組みに参加している。「テレビやネットの情報だけでは、何かが起きたときに対処はできない」と改めて気づき、青年会として防災・減災の活動を実施したいという思いも高まっている。

佐藤さんは仕事の関係で千葉県市原市に引っ越しており、休日や青年会事業がある日は地元に戻って、長谷川会長と一緒に活動している。震災以降、社会福祉協議会が主催する災害ボランティア養成講座を受け、有事の際に一人でも多くの命を救う支援ができるよう努めている。佐藤さんは令和元年房総半島台風の被害を直接受けた地域に居住しており、あらためて災害は身近にあることを実感した。

コロナ禍で気軽に会うことを自粛せざるを得ない状況であるが、それでもお互いの情報や地域課題の共有は怠らない。「万が一はいつでも起こる」と、被災したからこそ実感している。

■これから先の10年

まずは自分たちが活動する地域から防災を見直したい、と長谷川会長は語る。今の小学校５～６年生は震災当時１～２歳で、震災を経験していないのと同じだ。再び大きな災害が発生した時に、子どもたちにもできることがある。次の世代につなぐためにも、青年会役員それぞれが得た知識や経験を福島県でいかしていきたいと意気込む。

全国の仲間から届く応援の気持ちが
福島の青年の支えだ

【プロフィール】

長谷川　綾（はせがわ　あや）

福島県会津若松市出身、在住。福島県連合青年会会長。

これまでの10年、これからの10年

棚田　一論
（埼玉県志木市）

2011年3月11日、この日、日本が被災した。

震災後、「絆」「つながり」といった言葉が日本中で声高に叫ばれ、「がんばろう日本」と合わせて、「がんばろう東北」は復興支援活動のスローガンとして全国各地に広がった。支援の形や方法は時間と共に変わりながら、それは10年が経過した今なお続いている。地震で倒壊した家屋、津波に流された大地、東京電力福島原発で住処を追われた人々、決して元通りになることはない。だが、一人ひとりがこの被災の歴史の上に立った生き方に努めている。

戦後未曾有の大災害と言われる東日本大震災から10年。私の祖母（母方）が住んでいた福島県南相馬市にもう祖母は居ない。一昨年に他界し、今は数回清掃をするために親戚や私たちが足を運ぶ程度だ。祖父は10年以上前に他界した。祖母という核で集まっていた親族は、少しずつお互いに距離が生まれている。被災した地域や傷ついた心は、多くの人たちの力で街の再興と心の復興の道を歩む一方で、10年という歳月の中で生涯を全うした人も少なくない。

2012年、震災の避難していた仙台市に住む叔母の家（母の妹）で祖母は認知症を発症した。その後、半年ごとに両親の家と叔母の家での生活が続く。叔母の家で祖母が生活をしている時、余震が起こると祖父の遺影を抱きかかえていたそうだ。認知症が悪化した晩年も、祖父の事は忘れることはなかった。祖母は住み慣れた自分の家で生活を再開することなく他界した。祖母は幸せだったのだろうか。私は、「自分の家に帰りたい」という声を幾度となく耳にしている。しかし、医者からは一人で生活することは難しいと診断を受けているため、祖母は自分の家に帰ることはできない。帰りたいと願う祖母、帰れないことを知り苦悩する母・叔母・叔父。本質的な意味合いからすれば比較しようはないが、故郷に帰れない祖母の姿をどこか北方領土問題と重ねてしまう時があった。私だけでなく妻や子どもたちも祖母のためにできることをやろうという想いがあったので、毎週電話をしたり、約束をしたりすることで刺激を受けてほしいと願いながら努めた。それでも祖母が亡くなった一報を受けた時、もっとできることはあったのではないかと思い返してしまった。私にとって、東日本大震災と祖母の死はつながっている。

私は南相馬市に年一回以上は帰るようにしている。祖母が住んでいた実家に行くわけではなく、津波によって流された、小さいころに遊んでいた場所がどのように復興したのかを見る。地域に住む人たちの意識（気持ち）がどのように整理しているのかを聞く。孫世代として、目に見える変化と見えない変化を知り、少しでも祖父母に報告したいからだ。こうした感覚や感情は、日青協という職場に従事し、全国の青年団の方々から学んだ感覚だと思っている。この感覚は、これからも大事なことだと思っている。

時間の流れは誰にも止めることはできない。私たちは歴史の最前線に常に立たされ、

過去から学び、今を知り、未来を育む役割が絶えず求められている。戦争・震災を知る世代と知らない世代をつなぐだけでなく、日本の歴史や世界の歴史を背負って生きている。大げさではなく、実感として青年期は大変だ。だけど楽しい。

たくさんの人や出来事に出会い遭遇し、そこから学んでいく。誰かに伝えていく。ちょっとでも昨日より今日が楽しい一日にしていけるようにがんばろう同世代の仲間たち！

【プロフィール】

棚田　一論（たなだ　かずのり）

福島県南相馬市出身、埼玉県志木市在住。2009 年から日本青年団協議会に所属し、2019 年～現在、日本青年団協議会事務局長。

2014 年の職員旅行で福島県のスパリゾートハワイアンズへ。

福島県いわき市の塩屋埼灯台

2016 年の事務局研修でも福島県を訪問。

東日本大震災から10年

中園　謙二
（岡山県倉敷市）

もう10年なのか、まだ10年なのか。この 10 年間に被災した様々な地域の現状を私たちはどれくらい見られているのだろうか。間違いなくまだ復興はできていないのではないか。自分はどれだけ災害や復興、防災減災といったことに向き合えているだろうか。日本青年団協議会の会長としてというよりは、一人の青年団員として、地域に生きる青年として、子どもたちの親として、様々な想いの中この 10 年を節目に自らを振り返るため筆を執らせていただいた。

2011 年 3 月 11 日。大きな地震があったのを知ったのは仕事中、20時頃だったと思う。テレビから流れる映像にこれはただ事ではないのではと思ったもののまだ楽観的な考えがあった自分をよく覚えている。

当時は県青年団の会長という立場もあってこれまで様々な支援活動に携わらせていただいた。募金活動をはじめ、被災した全国の仲間の声を聴き、実際に陸前高田市に行き、災害派遣ボランティアとして復興の手伝いもさせていただいた。そこで見た光景、ボランティアガイドのお話、被災地の青年団の仲間の話。どれもが生々しく、悲惨で苦しかった。一方で人のつながりの温かさも同時に感じたのも事実だった。

自分たちと同じ思いをしないでほしい、いつか来る災害に備えてほしい、そんな強い思いを受け取ったとも感じた。この想いを、現実を伝えなければ。そんな思いから仲間とともに 3.loveline 実行委員会を立ち上げ、復興支援ドキュメンタリー映画 message の作成、上映、講演などに取り組んできた。日青協役員をさせていただいてからは「生きる」４号、５号、「web 生きる」、震災パネル第２部、第３部と社会部役員として想いを受け取る、伝える活動、防災減災活動に取り組んできた。

そんな中、私の住んでいる倉敷市が 2018 年 7 月、西日本豪雨に見舞われた。当時は降りしきる雨に不安を感じながら夜勤のため 21 時半頃に自宅から会社へ向かった。仕事中にひっきりなしに避難勧告の通知が鳴り、工場の担当ラインも豪雨により停止。家族は、自宅は、実家は無事だろうか。本当に不安な一夜を職場で過ごした。

一夜明けて甚大な被害を目の当たりにした。テレビから流れる見知った地名、変わり果てた姿に絶望した。幸いといっていいのか自分や家族には大きな被害はなかったものの知人や友人、職場の同僚の家族などに甚大な被害が出ている方もいた。何度かボランティアで片付けも手伝わしていただいたが、被災した皆さんの表情や言葉は忘れることができない。そしてあの日、家族を置いて出勤したことが本当に良かったのか、今まで自分が防災、減災を呼び掛けておいて、いざというときの行動として正しかったのか。思い出すたびに自責の念と言いようのない不安に駆られてしまう。

東日本大震災から、私たちの暮らす日本は目に見えて大きな災害に見舞われることが増えたように感じる。地震、豪雨、台風などあげればきりがない。毎年のように「未曽有の」「過去最大の」といった言葉を耳にする。人間は自然には勝てないと思い知らされるし、この 10 年の間災害によって失った

ものは本当に大きいと感じる。特に近年はコロナ禍ということもあり避難や支援ですら満足にできないといった厳しい現状もある。しかし私たちは大災害の中でもコロナ禍でも生きていかなくてはならない。この10年で起きた事実をしっかりと継承しよう。いつか来る大きな災害のための備えをしよう。せめて災害をきっかけにつながりできた地域の現状に想いを馳せよう。それはつながりを持てた方に寄り添うことだけでなく、自分や大切な人たちを守ることにつながっていくと思うから。つながったご縁を風化させることなく、これからも現状に向き合っていきたい。

【プロフィール】

中園　謙二（なかぞの　けんじ）

岡山県倉敷市出身、在住。会社員。1980年生まれ。岡山県青年団協議会会長を経て、2015年～2017年日本青年団協議会常任理事、2018年～2019年同副会長、2020年～現在同会長。

平成30年7月豪雨　真備町の視察

復興支援ドキュメンタリー映画
「Message」の取材

高知から東北へよさこいで元気を届けよう！

大﨑　博士
（高知県高知市）

2011年5月、西土佐連合青年団が発起人となり、県内各地の青壮年層（青年団・大学生・地域おこし協力隊・行政職員・議員など）へ声をかけ、高知県内の若者40名が宮城県仙台市・名取市に向かった。みちのくYOSAKOIまつりや、美田園第1応急仮設住宅への慰問など「よさこい」を活動や交流手段の真ん中に、2012年には、名取市でのヒアリングがきっかけで、赤貝漁日本一を誇る名取市閖上地区へ、津波で流失した漁具倉庫を高知県内各地で大学生が中心となって募金活動を展開し、集まった約100万円で漁具倉庫1棟を閖上漁港に届けた。名取市市長始め、関係者・地域のみなさんと共に完成セレモニーを行った。

その活動母体は当初の西土佐連合青年団から高知県青年団協議会に交代し、この10年の名取市訪問は30回を、高知からの参加人数は延べ400人を越え、現在も年1・2回の訪問を、最近では名取市から高知へ語り部等で来て頂く自発的・主体的な交流が続いている。

この10年間の活動の軸としてあったのはもちろん「被災地支援」だ。「被災地支援」と併せて「自分たちはどうしたいか？ありたいか？」を大事にしたことが現在もそしてこれからも続く活動の源泉の様に感じる。青年団としては「自然災害の脅威を肌で感じ、それぞれの地域の防災活動につなげる」「県内の青年ネットワーク・フットワークの強化」など、参加者個人にとっては活動を通じた高知県内・学生と社会人・高知と東北、そして男女と言った「交流」を大事にした。自分たちの都合・思惑が「被災地支援」を越えてしまうと、逆に自分たちの都合・思惑が少しでも無いとこの活動はすぐに無くなっていたのではないかと思う。

これまでの活動を通じて大きな気づき・変化があった。甚大な被害を受けたニュース報道等で感じた「大変だ・可哀そうだ」と言った自分たちの感情が東北に赴く動機となったのだが、元々つながりの無い中へ飛び込んで行くのは、その相手との関係性上どんな団体・活動も一方的な押し付けになるといった当然のことが起こる。東北での活動は「売名行為」等、様々な媒体で見聞きし、自分たちにも同じような声をいくつも頂戴した。東北支援活動に限らず、どんな活動もつながりの希薄化等から最初は「一方的」なことが多い。そこで悩まず迷わず、大事なのはその先にある「つながり」づくりだと感じる。

過程は省略するが、10年間の活動の中で「一方的な支援」は「双方向の交流」に、そして「被災地」は「名取市のみなさん」と、関係が変化した。活動を通じて顔が見える関係となり、遠慮よりも配慮した関係を一緒につくっていく流れにある時から自然に生まれた。近年は先述した様に、名取市から高知へ語り部として自治会長・公民館長・副市長にお越しいただき、「防災」をテーマに交流が深まっている。高知県は南海トラフ巨大地震が30年以内にかなりの確率で発生されると言われている。防災の観点からも勿論だが、高知・東北での収穫される果実

が劇的に違う（高知は柚子・東北は桃）ように、高知市・名取市それぞれの地域の特徴を知ることで、ご当地の防災やまちづくり、そして青年団活動に活かす機会としたい。特に、宮城県の公民館など社会教育は高知と大いに違うところがあり、大変参考になる環境づくりだと感じた。

ご縁をいくつもつくり・広げ・深めても決して戻ることの無い「あの時」には遥かに及ばない、そもそも比較できるものではない。だとしても、自分たちはこれからも 1 つずつ名取市のみなさんとの交流を通じて、「忘れない東北」「東北に、そして東北から届ける確かなメッセージ」をテーマに、関係を深め、「ジブンタチニデキルコト」を大事にして行きたい。それは「若者が動き、高知で東北で、つながりを広げ深める」ことだと感じた。まだ、これから、またこれから、改めてひとつずつ。

【プロフィール】

大﨑　博士（おおさき　ひろし）

高知県高知市出身、在住。自営業。1976 年生まれ。高知県青年団協議会会長を経て、2020 年～現在日本青年団協議会常任理事。

2013 年度日本青年団協議会第 2 回理事会は福島県で開催。理事会後、フィールドワークで県内を周る。

令和２年７月豪雨を通して

大岩　誉
（熊本県球磨郡球磨村）

私の故郷球磨村は、熊本県南部に位置し人口約3,200人、村の約90%は山林で、村中央部には日本三大急流球磨川が流れる自然豊かな村です。

しかし令和２年、のどかな風景が一変、悲劇が訪れました。令和２年７月４日、後に「令和２年７月豪雨」と名付けられた災害は、１時間最大降水量83.5㎜を計測する程の雨が降り球磨川が氾濫、各地で土石流が発生するなど甚大な爪痕を残し、球磨村では25名の尊い命が奪われました。

私は７月４日早朝、隣接する人吉市の自宅で休んでいましたが、防災行政無線から聞こえる避難指示の声で目が覚めました。職場である球磨村役場から出動要請がかかるも、既に道路が浸水し通行不可になっているため自宅待機を余儀なくされテレビ等で情報収集をしていました。

夜が明けて徐々に状況がわかるようになった時は、家屋が浸水や山腹崩壊による土砂に呑み込まれ、球磨川沿いを通る主要幹線道路である国道や、球磨川の支流沿いにある生活道路も寸断。広範囲で電気、水道、通信手段などのライフラインが途絶え、各地で孤立状態が発生しました。

救助するにはヘリコプター以外方法は無く、孤立状態となった地域の全ての人を救助できたのは、悪天候と重なり数日の時間を要しました。

村内全域が被災地となった為、村外の施設を借用しての村指定避難所が開設され、そのうちの１つは球磨村から車で１時間程離れた、旧熊本県立多良木高等学校（平成31年３月末閉校）でした。そこは球磨村最大の避難所となり多い時は約230人が避難され、７月７日からは旧多良木高校避難所が私の勤務地となりました。

避難所では新型コロナウイルス感染拡大防止の為、検温・消毒が徹底され、施設内は関係者以外立ち入り禁止。一時期は炊き出しさえも出来ないと、本来であればボランティアの方やマスコミ関係者など多くの人が支援や情報発信をしていただくところですが、今までとは違った形での運営となりました。

しかしながら現地には行けないが、せめてもと多くの救援物資やメッセージが寄せられました。中でも、避難所内でナオト・インティライミさんのリモートライブが支援団体の協力で開催され、小１時間程度でしたが明るい歌声や笑い声が響き渡り、大きな励みとなりました。

現在は、避難所も閉鎖され、多くの人が仮設住宅に入居されています（多い時で356世帯1,000人が入居）。寸断されていた道路は自動車での通行は可能となりましたが、通行許可証が発行された車の通行に制限され、片側交互通行・未舗装道路の部分が多く、土砂に埋もれたままの家屋や自動車もあるなど手付かずの場所もあり、まだ多くの皆様からの支えが必要とされています。

発災を機に、改めて普段からの地域コミュニティが必要だと感じました。消防や警察、自衛隊などが救助に来るまでは、地域住民同士で助け合い・励ましあうなど、多く

の人たちの温かさが身に沁みました。私も避難所では、地域の顔見知りの方と話をするだけでお互いに安心感が生まれ、情報が錯誤する中でも、正しい情報を取得・発信ができ、自分なりの役割を担えたと思っています。

普段から地域行事に参加するなど少しでも地域の輪に入ることで、非常時には自分がやるべきこと、自分にできることが見いだせるのではないでしょうか。

豪雨前のような美しく自然豊かな村に戻るには、どれぐらい時間がかかるかわかりませんが、これまでの御恩・感謝を忘れず、これからまた自分が出来る事を精一杯していこと思います。

【プロフィール】

大岩　誉（おおいわ　ほまれ）

熊本県球磨郡球磨村出身、在住。1988 年生まれ。

元熊本県青年団協議会常任理事。

2020 年 7 月 4 日、川の氾濫は道路を浸水し、車も流されるほどの勢いだった

2020 年 10 月 4 日、球磨村の神瀬橋。
橋脚のみ残っている。

2020 年 10 月 4 日、球磨川沿いの建物。
傾き、後ろに倒れそうになっている。

2020 年 10 月 4 日、河川沿い。
崩れた所は土嚢で補強している。

追憶

大塚　拓也
（熊本県熊本市）

2016 年 4 月熊本地震から、令和 3 年 4 月で丸 5 年が経とうとしております。4 月 14 日 21 時 26 分、熊本県熊本地方を震央とするマグニチュード 6.5 の地震（前震）が発生し、同県益城町で震度 7 を観測、その 28 時間後の 4 月 16 日 1 時 25 分には同じく熊本県熊本地方を震央とする地震（本震）が発生し、西原村と益城町で震度 7 を観測しました。死者 267 人、負傷者 2,802 人、住家全壊 8,668 棟、半壊 34,720 棟と甚大な被害をもたらしました。私はこの時は上記の両日とも中央区水前寺にあります熊本県青年会館（宿泊施設）にて夜勤をしておりましたところ被災に見舞われました…この時の記憶は 4 年と 10 ヶ月経った今でも鮮明に覚えております。当時は館内に宿泊者も多数おりましたので先ず避難誘導を優先して対応に追われておりましたところ、余震の地鳴りと建物の軋む音、電気は停電していた為非常用電源のみの薄暗い中での作業で私自身も精神的、肉体的にもかなり切迫した状況だったことを今でも思い返せる程の経験でした。記憶に新しいのが令和 2 年 7 月の人吉球磨で発生した豪雨災害はもとより甚大な被害をもたらし、周知の通り皆様の心にも深く刻まれた事でしょう。自然の猛威は癒える事もままならないうちに…次々と災害の爪痕を残します、それにともない我々は困難に直面します。今後もさまざまな災害に見舞われることもあることながら、これにより過去の出来事が風化してしまうことが懸念されますが、私達はこれから幾度となく起こりうる災害に対し、どういった活動が出来るか…風化させないため後世に語り継がなければならないと考えております。一人ひとりが今できることを…。

熊本県青年会館（外観）

熊本県青年会館（内部のひび）

熊本県青年会館（外壁のひび）

【プロフィール】

大塚　拓也（おおつか　たくや）

熊本県熊本市出身、在住。1982 年生まれ。

熊本県青年会館職員。

2つの災害を通して

尾方　希望
（熊本県球磨郡多良木町）

熊本県では、近年大きな災害を2回経験している。1つは2016年4月14・16日に発生した熊本地震。もう1つは、2020年7月4日に発生した令和2年7月豪雨。

この2つを通して感じたことを私の主観ですが、述べたいと思います。

情報

近年、ネット環境の発達により様々な情報を得ることが出来るが、災害時ではデメリットが目立ってしまいました。LINE・Facebook・Instagramなどの SNS を介して災害発生時から様々な情報が飛び交う中、一緒になってデマも飛び交ってしまい必要な情報が本当に正確なのか不明な状況になりました。一番は行政から発信する情報をもとにした方がいいのかと思うのですが、ほかの情報が邪魔をしてしまい、必要な方に届かないことがありました。

またネット環境について、今までの災害で電話はつながりにくくなるため災害伝言板の活用や LINE は使えると思っていましたが、今回の水害で人吉球磨地域や八代にかけて通信設備の故障や停電の影響で通信障害が起き、固定電話は全く使用できず、ネットは不安定で LINE でも十分に使用できない状況が 1 か月近く続きました。スマートフォンはキャリア(auやSoftbank等)によって電波の入り具合にも差があり、私自身も災害当時、LINEの受信はできたので沢山の方から心配の声をいただいていましたが、こちらから連絡が出来ず、無事をお伝えしたくても返答できないもどかしさがありました。またこの通信障害により情報を得ることも難しい状況にあったため、周囲の方々と直接情報交換を行っていました。通信障害は仕方のないことではありますが、正確な情報をみんなで共有しあうことは大切だと感じました。

支援物資

被災して避難所に身を寄せている方々にとって必要な物であり、熊本の災害でも全国各地から沢山の物資が届きました。しかし、避難所によって量や質に差が出たり、日々必要な物資が変わるため、以前必要と情報があった物資が必要以上に届き避難所を圧迫してしまい、物資の把握や仕分けに人出がとられる状況になりました。また、熊本地震の時に物資として届いた大量の水が活用されず残ったままになってしまい、期限が切れてしまったと報道でありました。せっかく全国から届いた支援物資のため、破棄せず飲用水以外の方法で活用されたようです。上記のような状況にならないために、場所が必要になりますが、避難所に直接送り集めるのではなく、決められた共通の場所で回収し避難所によって必要な物資を供給するという方法ができたらいいのではないかと思いました。

物資の中でも大きな割合を占める食糧。日々改良が進み、そのまま食べられるものや水を入れて食べられるもの、長期保存が可能なものなど様々あります。私は福祉施設（特別養護老人ホーム）で栄養士として勤務しており、施設自体は被災しませんでしたが、取引業者が被災し食品の納入が厳し

くなったため、一時期施設内に備蓄していた食料を使用したり、物資として届く非常食を使用し、高齢者に食事を提供していました。非常食は形態（普通食だけでなくミキサーやソフト食を食べられる方が大半を占める）が合わなかったり、味は改良され食べやすくなっているものもありますが正直美味しくないものもあり、そのままでは提供出来ず、加熱時に調味料を加えたり形態に合わせての加工が必要でした。幸い施設内は電気・水道は１日だけ不通になっただけで使えたので、調理器具の使用が出来、入居者には加工して食べて頂いていました。食事は生きるために必要なことです。今後あってほしくないですが、いざという時のために備蓄はもちろんつくり方を知っておくこと、味に慣れておくことも必要かと思いました。

また食糧以外にも衣類が物資の中にありましたが、避難所にあった物資の中に虫が入っていた等で衛生的に不十分なものもあったと聞きます。避難所内で不衛生な状況が発生してはなりません。ただ物資を送りたいという気持ちだけでなく受け取った側への配慮も必要だと感じました。

周囲の声

青年団を通じて知り合った全国各地の方々から災害直後から心配の声や励ましの声を頂き、一つひとつの言葉が本当にありがたく、みなさんから元気を頂きました。また、物資や募金の申し出にも声掛けて頂きました。ただ残念だったのがボランティアです。災害時新型コロナウイルス感染症の流行のため、社会福祉協議会が運営するボランティア募集には県内在住の人のみと限定され、県外からボランティアに来たいとお話を頂いてもお応えできず申し訳なく思いました。

最後に

私の主観ではありますが、地震と水害 2 つの災害を経験し感じたことを述べさせて頂きました。私はなぜか今まで、身近で災害は起きないだろう、テレビで見るぐらいだろうと思っていました。しかし、災害大国・日本と言われるぐらい、近年全国各地で災害が発生しています。いつどこで何が起きるか分かりません。起こらない方がいいですが、いざ有事の時の備えや行動が本当に大切であり、備えるために今まであった災害での反省点をしっかり今後にいかしていかなくてはいけないと感じました。

まだまだ熊本地震や令和 2 年 7 月豪雨での爪痕が大きく残っていますが、復興に向けて前を向いて自分ができることを行っていきたいと思います。

【プロフィール】
尾方　希望（おがた　のぞみ）
熊本県球磨郡多良木町出身、在住。1989 年生まれ。
熊本県青年団協議会会長。

令和２年７月豪雨災害

木屋　ありさ
（熊本県球磨郡球磨村）

災害起きる前日、私は地区の避難所勤務のため３日の午後 11 時から避難所にいた。次第に雨音がいつもよりひどくなり、4 日の午前 3 時から停電になり避難所前の道路に水が溢れ出し、近くの球磨川からも大量の水が流れ込んでいた。危険を感じ、慌てて避難されていた方々と共に高台にある保育園へ向った。しかし、外に出ると道路が濁流になっており歩くのがやっとだった。水かさがあがるスピードが早く、近くのお宅の 2 階にあがらせてもらった。ここに居ても危ないと思っていたが、保育園まで行く術がなかった。その時に、消防団が「2 階まで水が上がってくるのを待ち、プールをボート代わりに使って濁流を渡ろう」と声を掛けてもらい救助してもらった。保育園に着いたのは午前 5 時頃だった。どこにも移動する手段がなく、その場にいるしか方法がなかった。避難中にポケットに入れていた携帯が水没してしまい、家族や友人とも連絡が取れず不安で仕方がなかった。私がいた避難所には約 100 名の避難者がいた。様々な気持ちを抱え、住民の方々と協力しながら避難者の把握や持病の確認を行っていた。私達が地区の避難所を出られたのは１週間後だった。

その間にも、多くの方々が物資を届けてくれたり皆で声を掛け合ったりとどうにか１日１日を過ごしていた。

球磨村青年団の会館も被害にあった。中の物や天井は泥だらけになっており、歩くのがやっとの状態だった。発災日から時間が経ち、片付けをしようと思ったが人手が足りず球磨郡の青年団へ声を掛けた。多くの団員が来てくれ、泥の掻き出し等を手伝ってくれた。とても嬉しく、ありがたかった。

今回の災害で「自然災害」という言葉がとても近くに感じた。一瞬で球磨村を変え、多くの人たちの命を奪い、私たちの生活を変えた。災害の恐ろしさや普通の生活を送れることへのありがたさ、家族や友人、人とのつながりの大切さを強く感じた。又、発災からずっと多くの方々からの支援を頂いており感謝しかない。今は、復興に向け自分たちにできることを考えながら一歩ずつ力を合わせ球磨村を取り戻していきたい。

【プロフィール】
木屋　ありさ（きや　ありさ）
熊本県球磨郡球磨村出身、在住。1993 年生まれ。
球磨村青年団団長。

2020 年７月５日、球磨村を通る国道 219 号（役場下から馬場洞門まで）。道路のコンクリートは割れ、球磨川の水が溢れる。（写真提供：球磨村役場）

2020 年 7 月 5 日、神瀬（蔀（しとみ）地区から堤岩戸地区）。濁流によって橋が全壊となる。
（写真提供：球磨村役場）

2020 年 10 月 4 日、球磨村青年団の団室にて（上：外観、下：内観）

団室にて泥だらけで発見された
球磨郡青年団協議会の優勝旗
（文化祭･体育祭）

団室の入口
球磨郡青年団協議会主催の体育祭ポスター

新型コロナウイルスと水害と

瀧森　道太
（熊本県球磨郡湯前町）

令和２年１月中国・武漢で初めて検出された新型コロナウイルスによる感染症COVID-19により例年とは違ったスタートを切った球磨郡青年団協議会（以下、球青協）は、毎年６月に行っていた球青協体育祭、毎年９月に行っていた球青協文化祭の中止を５月の理事会で決めました。早めに今後の動きを決定し、特別な状況下に対応した青年団活動を考えるためです。青年団にとって一番大切な「顔を合わせて話をする」ということを制限され、どのように活動するか悩みながら過ごした６月は例年通り雨の多い時期でした。

７月に入っても雨は続き、７月３日の23時過ぎには私が暮らす球磨郡湯前町に土砂災害警戒情報が発令されました。激しく屋根を打ちつける雨音に恐怖を感じながら眠りにつき、携帯に入ってきた地元消防団からの連絡で目が覚めました。７月４日、あたりが明るくなってきたころ自宅を出て消防団の詰所へ。ポンプ車で付近の見回りを行いましたが、いつも見慣れた川は見たこともない水位まで上昇していました。道路の至る所で冠水や土砂崩れがみられ迂回の誘導をしながら数時間がたちました。昼過ぎには雨は小康状態となり、詰所へと引き上げテレビをつけたところで最悪の光景を目にしました。球磨川が決壊し人吉市、球磨村が濁流に飲み込まれた姿は本当に信じられませんでした。

各青年団の仲間に連絡をいれ安否確認し、幸いにも死傷者が出ていないことが確認できたときにはほっとしたのを覚えています。

被災からの２か月は球青協の活動は自粛しました。球青協に登録している団員の８割が役場職員ということもあり災害対応に追われ、消防団に所属している青年団員は地域の復旧に尽力しました。青年団の仲間で災害ボランティアに参加してくれた人もいました。

球磨川上流域の湯前町、多良木町、あさぎり町は比較的被害も少なく１か月ほどで落ち着きを取り戻したようでした。下流域の錦町、相良村、山江村では家屋の１階が浸水する被害もあり避難所が完全に閉鎖されるまでに２か月かかりました。水が屋根まで達し、流される被害もあった球磨村は半年たった今からやっと復旧作業が本格化するようです。復旧復興がいつになるのか現在でも目途がたっていません。

球青協ではありがたいことに140名ほどが団員登録してくれていますが、一人ひとり被災体験に違いがあり差があります。すべての加盟団が同じように活動することができなくなりました。来年の活動に向けて計画を練り始めている団、集会は行えているが今後の動きに悩んでいる団、まったく活動できていない団、青年団で集まることすら難しい団。球青協を運営していく立場にある私を含めた役員はどうしていいかわからず、満足な活動をおこなえないまま年度末を迎えようとしています。

球青協役員を継続する人、役員を降りて自町村団に戻り盛り上げようと考えている

人、青年団活動に終止符を打つ人。それぞれが新型コロナウイルスと令和 2 年 7 月豪雨を経験し考え、次へと進んでいきます。私は令和 3 年度も球青協として活動することを決めました。7 月豪雨から半年間青年団は何もできなかった、力不足だった、と悔やんでいたからです。

しかし、本当はそうではなかったのだと最近思うようになりました。それは郡の青年会館にあった『球磨郡青年団協議会 35 年史 あゆみ 』という先人たちが残してくれた冊子に次のような一節があったからです。

【終戦後の混乱した状態の中で、何とか世の中を明るくしたい、人々に楽しみを与えたいという数名の若者により球磨郡青年団協議会が結成された。】

球青協の始まりは世の中を明るくしたいという思い。

球青協の目的は人々に楽しみを与えること。

落ち込んでいる人吉市球磨郡をこれから盛り上げていくことが球磨郡の青年団の役目だと、この冊子から教えてもらいました。先人たちが残した想いを引き継ぎ、新しい時代に則した青年団活動を考え、次の世代へと青年団文化を残していけるように活動していこうと思います。

がまだすばい！人吉球磨！

【プロフィール】

瀧森　道太（たきもり　みちた）

熊本県球磨郡湯前町出身、在住。1990 年生まれ。

球磨郡青年団協議会会長。

2020 年 7 月 4 日、
橋は流され家屋は浸水した。

2020 年 7 月 4 日、国宝指定の青井阿蘇神社。水位が上昇し、社殿までの橋や鳥居も半分以上が水に浸かる。

2020 年 7 月 4 日、川の氾濫によって道路の中央には自動販売機が流された。

2020 年 8 月 3 日、球磨村青年団の団室を球磨郡で活動する仲間たちと清掃。

2020 年 7 月 4 日、土砂崩れによってビニールハウスも壊れる

2020 年 10 月 4 日、球磨村青年団団室。

2020 年 7 月 8 日人吉市内の様子。橋には流されてきたゴミがかかる。
（写真提供：人吉市役所）

2020 年 8 月 3 日、青年団有志による球磨村青年団団室の復旧作業後。

地震から５年・・・
熊本の今

古奥　紗耶佳
（熊本県上益城郡益城町）

2021 年１月 14 日で熊本地震（前震）の発生から４年９ヶ月が経ちました。
被災した地域では道路や建物の復旧・復興が進み、地震前と同じような生活を取り戻しつつあります。仮設住宅のあった場所も仮設住宅が解体され、公園など元の姿に戻っています。

2020 年８月には、地震で甚大な損害を受け不通となっていた JR 豊肥本線（熊本駅と大分駅を結ぶ路線）が全線で運転再開しました。また、同年 10 月には地震による土砂崩れで通行止めとなっていた国道 57 号線も開通し、熊本市内から阿蘇や大分へのアクセスが便利になりました。国道 57 号線が開通したことで、地震からの復旧・復興がかなり進んだように感じ、とても嬉しく思います。

熊本地震の本震で崩落した阿蘇大橋も新しく架け替えられ、2021 年３月に開通予定のようです。崩落した阿蘇大橋は「赤橋」（開通当初の色が由来）と呼ばれていました。私も昔から「赤橋」と呼んでいて、幼少期から家族と何度も通ったので、阿蘇大橋が崩落したことを知ったときは「えっ！？赤橋が崩落したの・・・」とショックを感じたことを今でも覚えています。

阿蘇は幼少期から家族とよく遊びに行っていた思い出の場所で、今でもよくドライブに行くくらい大好きな場所です。なので、国道 57 号線と阿蘇大橋の開通は本当に嬉しく思います。

また、熊本のシンボルである熊本城も震災で大きな被害を受けました。熊本城も復旧工事が進み、2019 年 10 月から立入規制区域の一部が特別公開されるようになりました。そして、2021 年４月には天守閣が完全復旧し、天守閣の内部まで入れるようになるようです。先日、熊本城を見に行きましたが、石垣などはまだ崩れたままのところもたくさんありました。そでだけ地震の被害が大きかったことを改めて実感しました。まだまだ時間はかかりますが、少しずつ熊本城が復旧していく様子を見届けていきたいと思います。

私たちの生活は、仮設住宅やみなし仮設を出て、元の場所や地震前に住んでいたところとは違う場所で生活を再建し地震前と同じような生活を取り戻しつつあります。私も、約３年前にみなし仮設を出て、新たな場所で生活を始めました。普段の生活では地震のことを思い出したり考えたりすることも少なくなりました。しかし、今も使っている物の中には地震で傷がついたものもあり、時々その傷を見て地震のことを思い出すことがあります。地震の被害が大きかった地域を車で通った時にもふと当時のことを思い出すこともあります。年月とともに地震のことを考えたりする時間は減ってきましたが、これからも地震のことを忘れずに生活をしていきたいと思います。

南阿蘇村震災遺構
"數鹿流崩れ"

南阿蘇村震災遺構
"阿蘇大橋"

【プロフィール】

古奥　紗耶佳（ふるおく　さやか）

熊本県上益城郡益城町出身、在住。1984 年生まれ。

前熊本県青年団協議会事務局長。

第三章
道府県団の取組みと日青協の実践

2011 年以降現在まで、日青協は東日本大震災やその後に起きた様々な災害の被災地の歩みに寄り添い、青年たちが体験した事実とそこから感じたことを日本青年団新聞の取材という形で伝え、各地の青年と共有してきました。

ここでは『生きる』第 5 号（2017 年）以降、現在までの日青協の取り組みを、日本青年団新聞の記事の採録などで紹介します。

震災の教訓を桜で伝える

～桜ライン 311　秋の植樹会～

岩手県青年団体協議会

（日本青年団新聞 2017 年 1 月号）

◆私たちは、悔しいんです

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災による津波で壊滅状態になった岩手県陸前高田市。地震後の報道で、1933 年にも同規模の地震が起こり石碑を建てていたことが分かった。「これより下に家を建てるべからず」との石碑の教訓が活かされず、自分たちの町が流されてしまった。そのことが予め分かっていれば、津波に奪われた命はもっと少なくて済んだのではないか。この悔しい思いを同じくする若者が集まり、次代の人たちが二度とこの悔しさを繰り返すことのないよう、津波到達地点を桜の木でつなぎ、後世に伝えるため活動しているのが桜ライン 311 である。2011 年 10 月、陸前高田市青年団協議会（市青協）と、市内で活動していた SAVE TAKATA、難民支援協会の 3 団体の協力で立ち上がった。

毎年 11 月と 3 月の 2 回、ボランティアを募り植樹会を行っている。市内で 170km に渡る津波到達地点に 10m 間隔で桜の苗を植えていく。毎年少しずつ成果が見えるようになっている。今回も 11 月 19 日と 26 日の 2 回にわたって秋の植樹会を行い、両日で約 250 名の参加があった。26 日は快晴に恵まれたが、19 日は昼過ぎから雨が降り出す悪天候の中での植樹となった。植樹地は津波の到達地点なので、平坦なところだけでなく傾斜地もある。そんな地でも参加者は懸命に植樹してくださった。今回植えた桜の苗は、両日で 42 本。ボランティアが植樹できないような足場の悪い場所等は、市青協も協力して別日に植樹を行っている。これまでに植えたのは累計 1,063 本となった。

◆次代のために伝えていく

桜ライン 311 では、植樹のほかにも、東日本大震災の被害の風化防止、災害に対する正しい知識の普及・啓発活動を行っている。全国各地で講演を行っているほか、市内外の学校での植樹会や講演、パネルディスカッションにも参加し、これからを担う若い世代との交流を大切に行っている。

この活動をもとにしたドキュメンタリー映画「あの街に桜が咲けば」（小川光一監督）も 2014 年に制作され全国各地で上映会が行われた。現在、上映は行われていないが、この映画の書籍版が発売されている。ぜひ読んでいただきたい。

災害はいつ起こるか分からない。日本全国、また世界で様々な災害が起きている。東日本大震災からもうすぐ 6 年が経つ。あの震災を経験し、命の尊さを知っている私たちにしかできないことをしていこうと思う。

津波到達点に桜を植える

参加者と活動の意義を確認

「ハード」の復興から「一人ひとり」の復興へ

～震災から９年、被災地の今に迫る～

岩手県青年団体協議会

（日本青年団新聞 2020 年２月号）

新幹線から汽車と※BRT と呼ばれるバスを乗継ぎ、寒空の陸前高田駅に降り立った。かつて JR 大船渡線が走っていた線路跡を専用道に整備して運行していると思われがちな BRT だが、実際には一般道も走行することを、他地域の人はなかなか知る機会が無い。

陸前高田のまちを襲った大津波は、あらゆるものを押し流した。青年たちは、かつての津波の教訓を十分いかせず悔しい想いをした経験から、NPO 法人桜ライン 311 を立ち上げ、津波到達点に計１万７千本の桜の苗木を植え、桜並木で津波被害を後世に伝えようと活動している。代表理事の岡本翔馬さんは、「当事者でなくても受け止められ、簡単に携われる仕組み」づくりをめざしていると口元を緩めた。当事者が伝えようと想いを込めるあまり、受け手側に伝わらないことは、戦争体験の継承をはじめ災害以外でもよく起こる。そこで取り組みのハードルを低く設定し、将来桜並木の花見の際に思い起こしてもらおうとしている。昨年末には目標の１割となる１千７百本の植樹を達成した。持続可能な運動にするため、企業と提携しシャンプー等の売り上げの一部が活動資金になったり、Twitter の RT 数に応じ寄付を受けたりと、誰もが気軽に災害復興に触れられる形を模索し続けている。

震災前に海岸沿いや低地にあった陸前高田のまちは高台を切り開いて移転し、低地はかさ上げしたうえで、商店や野球場等のスポーツ施設、大手企業によるテーマパークが整備されつつある。他地域で上手くいかない高台移転が、なぜ計画通りに進んだのか。かつて高田青年会に所属していた陸前高田市地域振興部長の阿部勝さんは、「元々コミュニティがしっかりしていたからこそ、地権者の協力も得られ、まち全体がかさ上げに前向きに取り組めた」と語る。青年会をはじめとした各団体によって育まれた日頃からのつながりが、みんなで助け合って暮らそうという意識を高めていることが伺える。それでも未だ 300 人が仮設住宅で暮らしている現状もあり、阿部さんは「努力し続けることが復興に携わること」だと決意を固めている。

復興の背景には、U ターン者や移住者、そして青年たちの姿があった。彼ら彼女らがつくるまちでは、何十年経っても東日本大震災が忘れられることは無いだろう。

※BRT：バス高速輸送システム（Bus Rapid Transit）

まちの中心部には少しずつ商店や飲食店が戻る

保存される震災遺構の先には、
丘の上に高台移転した宅地が

今できる形で学ぼう

～被災 10 年、備えるために～

静岡県青年団連絡協議会

（日本青年団新聞 2021 年 3 月号）

静岡県青年団連絡協議会は、11 月 22 日に地域防災研修を開いた。かつて同会は東日本大震災での被災の様子を自分の目で確かめるために、スタディツアーを開催して現地を訪れていた。近年各地で発生した水害やコロナ禍を目の当たりにした同会ではこれらを災害と捉え、いつ起こるか分からない南海トラフ地震などの災害に備えようと、杉山和義会長（37）を中心に研修会を企画した。

当日は東日本大震災の被災地から、宮城県青年団連絡協議会会長で蔵王町在住の佐藤和博さん（29）と、平成 30 年 7 月豪雨で近隣の岡山県倉敷市真備町が被災し支援活動に携わった日青協・中園謙二会長のの 2 人が、オンラインツールを使って同事業に参加し、地元での体験や教訓を参加者に伝えた。その後、参加者は 6 月に改装オープンした静岡県地震防災センターで、防災にあたっての心構えや日頃の備えを学んだ。

本来は 12 月 5 日に第 2 回の研修を実施するはずが、新型コロナウイルス感染者の拡大でやむなく中止となった。しかし杉山会長は「本当は現地を実際に訪れたかったが、今できる形で学び合えたことが大切だ。静岡中の青年に伝えたい」と語り、コロナ禍でも学びを止めないという想いを強くした。

宮城・佐藤さんの一言ごとに驚きの声があがる

災害を他人事にしないために

～防災活動で学ぶ自助共助の力～

香川県連合青年会

（日本青年団新聞 2019 年 8 月号）

香川県連合青年会は、6 月 18 日から 19 日にかけて香川県青年センターを会場に、県下の青年向けに、「令和元年度香川県連合青年会活動家研修会・快適 20 時間セミナー」を開催した。

香川県防災航空隊の前隊長十河由人さんより、近年日本列島を襲う熊本地震や九州北部豪雨での現場経験から、被災の教訓や人災の軽減、減災への取り組み等が紹介され、実際の防災ヘリの映像から災害時の緊迫した様子をうかがい知ることができた。また、グループごとに分かれて無傷者や身体の様々な患部を負傷した人の設定で、阪神大震災時に関するクイズを解きながら館内外を歩き回る体験をした。受講している際には、普段の生活の中で自分たちが被災した時にどうすればよいかと不安になったが、2 日間の活動を通してしっかりと事前準備や災害対策についても考えることができた。

本セミナーを通じて、自分の身を守ることが最優先ということを再確認できた。自分の身の安全なくして、誰かを助けることはできない。災害がいつどこで発生するか、誰にも分からない。全国各地で災害が頻発する今だからこそ、私たちに何ができるのか、今一度みんなで考えていきたい。

家庭にあるもので応急処置

日本青年団新聞　Vol.103　No5　2018年9月1日　大正5年2月10日第三種郵便物認可（隔月1回）

みんなでみんなを支える地域

岡山県青年館は7月27日に平成30年7月豪雨で被害にあった被災家屋での泥出しや家財の運び出し、清掃などを担うボランティアバス（以下、バス）を派遣した。バスは、岡山県青年団協議会が募集したスタッフと、岡山学芸館高校の学生総勢50名が乗車し県内で最も被害の大きかった真備町へ向かった。

岡山県青年館を10時に出発したバスは真備町に向かう。「真備町へ続く橋を渡った途端に景色が変わった」と話すのは、岡山県青年団協議会事務局次長の岡本早紀さんだ。岡本さんは倉敷市茶屋町で暮らしている。隣接地域でこれだけの被害が出たことに驚いた。町の至る所に瓦礫の山が積みあがっており、ボランティアに入っている人の姿も見える。

岡本さんたちは午前と午後に分けて2軒の民家で泥の掃き出しや浸水してしまった柱などの切り出し作業を行った。この日の最高気温は34・8℃、照り付ける太陽の日差しがスタッフたちの体力を奪っていく。少し動くだけで汗が噴き出る中、スタッフは愚痴一つこぼすことなく黙々と作業に没頭した。熱中症で倒れてはいけないと学生たちに声をかけるものの「まだ動けます。ありがとうございます」と、高校生たちは返事をし、休む時間を最小限にして作業に励む。ボランティアを受けた民家の方からは「若い子たちに助けてもらい助かった。ありがとう」という言葉が届いた。

床下を切り出した木材の山

被災地に届けられた全国からの声

◆私たちも支えます

この度の平成30年7月豪雨で被災された方、お亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに謹んでお見舞いを申し上げます。

私が7年前東日本大震災で被災した時、青年団を通して宮城以外の東北で被災した人たちと語り、想いを共有できたことが大きな励みになりました。また、たくさんの支援をいただけたのは青年団のつながりがあったからこそだと思います。今回被災された人のために「何かできることはないか」そう思っている青年は多くいると思います。こんな時だからこそ青年団のつながりを大切にしていき、全国の仲間たちと共に頑張りましょう。

（宮城県青年団連絡協議会　会長　千葉　加奈子さん）

震災後復興祈念大会を開催

◆行動こそ最大の原動力

平成30年7月豪雨でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族の皆さまにお悔やみを申し上げます。また、被災された皆さまに謹んでお見舞いを申し上げます。

私たちもまさか地元でこれほど大きい災害がおこるとは考えてもいませんでした。こうした地域の一大事こそ、地元で活動する青年団の力も今まで以上に求められます。被災した私たちだからこそ思うのは、地域が元気を取り戻すには、被災しながらも自らを奮い立たせ、自らの行動が最大の原動力です。現地で必要な物資は何か。メディアを通じては届かない声も青年団同士なら届けることができます。熊本県青年団協議会としても協力は惜しみません。共にがんばりましょう。

（熊本県青年団協議会会長　遠山　優矢さん）

仲間と乗り越える

◆募金のお願い◆

日青協では被災地の一日も早い復旧・復興を願い、緊急支援募金を実施しております。詳細につきましては日青協Webサイトにてご確認ください。この他にも私たちができる支援活動はないか協議しております。決まりましたら、日青協Ｗｅｂサイトなどでご連絡いたしますので、ご協力よろしくお願いいたします。

また、被災の実相を伝えるための取り組みとして、日青協webサイトのコンテンツ「Web生きる」でもご紹介して参りますので、あわせてご覧ください。

日青協webサイト　http://www.dan.or.jp/

災害と向き合う仲間たち

平成30年7月豪雨は西日本を中心に未曾有の被害をもたらした。内閣府災害対策本部によると8月21日時点で死者、行方不明者、負傷者（重軽傷者含む）あわせて620名にものぼる。本紙では大きな被害を受けた岡山県内で活動する青年団員にお話を伺い、被害の実相や被災地の思いを全国に発信していくとともに、これまでも本紙で報告した被災地域から届いた声も紹介し、私たち一人ひとりがあらためて自然災害を自分事として捉え直そう。

ボランティアの説明を受ける青年たち

被災して気づく私の生き方・考え方

◆暮らしを見つめなおす

石崎　貴史さん
真備町青年団
団長
（真備町在住）

真備町に家を建てたばかりなのに、今回の災害で1階部分が浸水してしまいました。避難勧告に従わなかったため、消防隊などの救助を受けることにもなり申し訳ない気持ちです。

今は親戚の家にお世話になっていますが、9月からは避難所（市が借り上げたアパート）で生活をします。真備町は好きですが、同じ場所に住むのか、場所をかえて住むのか、引っ越すのか。まだ結論は出ていません。

復興の決意が描かれた看板

◆安全な場所はない

花房　功基さん
岡山県青年団
協議会副会長
（建部地区在住）

私は岡山県岡山市北区の建部（たけべ）という地区に住んでいます。岡山県では元来「災害が少ない県」として県内外にアピールしてきました。しかし、東日本大震災を皮切りに立て続けに起こる自然災害が地元でも起こり「どこにも安全な場所はない」と考え方が変わりました。

今回の豪雨を受け、全国のみなさんからの暖かい声に何度も救われました。災害が起こった時、少しでも悲しみが減るように努めていきます。

災害により発生した大量のゴミの山

◆居場所づくりが復興支援に

「地域にとって、青年団はなぜ必要なのか」岡山県青年団協議会の延江典子会長は東日本大震災以降、考え続けてきた。たどり着いた答えは、青年団のつながりが緊急事態でこそ活きる、ということだ。青年団は様々な活動を通じ、地域、県内、そして全国にネットワークを生み出す。被災を受けた直後の7月29日、岡山県青年祭が開催され、青年たちがスポーツに汗を流し、文化活動に情熱を込めることができたのも、居場所としての青年団があってこそだ。今回の被災で青年団員有志が、被災地に災害復興ボランティアに入ったように、青年がつながれる場所、青年団の存在が緊急の際に仲間に手を差し伸べることにつながる。

剣道大会で汗を流す岡山県の青年たち

地域の防災は学び合いから

～災害から地元を守るのは私たちの役目～

高知県梼原町連合青年団

（日本青年団新聞 2018 年 1 月号）

雲の上の町といわれる高知県梼原町。町面積の91%を森林が占め、標高 1,455m にもなる雄大な四国カルストに抱かれた自然豊かな町だ。町の人口はおよそ 3,600 人。大自然に囲まれた地域をフィールドに活動している梼原町連合青年団は、町を盛り上げる中核を担っている。地域の高齢化が進む中、地元を守り盛り上げる青年団には、町からも大きな期待が寄せられている。

11 月 2 日～3 日に梼原町内若人交流館において、避難所体験・防災研修が青年団主催で開催された。「近年日本各地で自然災害が発生し、尊い命が犠牲となっている。もし、地元が大きな災害に見舞われたときにどう動くのか、何ができるのかを事前に学ぼう」という団員の一人宇賀文里さんの思いから誕生した企画だ。

2 日午後 7 時から避難所体験として、交流館に集まった 28 名の青年たちで、各自持ち合わせの道具で電気・ガス・水道の全てを止めた状態で非常食の調理をはじめた。懐中電灯と蝋燭の明かりだけで料理することを通じて被災時の食事方法の疑似体験をした。その後、㈱高知県消火栓標識代表取締役甲藤氏による講義が行われた。熊本地震時に被災地を訪れた甲藤氏の実体験や、高知県に来ると確実視されている地震や津波について、質問を交えた講義を頂き、参加者から多数の質問が上がり好評であった。

防災カルタでは、講師にチームスワン（team swan）を迎え、お手製の防災カルタを使い、災害への日ごろの備えや、災害時に注意すべきことを学んだ。カルタの札を基に寸劇を行うなど楽しみながら防災について学習することができた。感想ではカルタのゲーム性と防災を組み合わせたことへの評価や更なる改良の意見、商品化の可能性についてなど、より踏み込んだ時間となった。

翌 3 日は、避難所の運営方法についてカードを使って遊びながら学ぶ避難所運営ゲームを実施した。参加者は、仮想の避難所で様々な条件を想定した避難者を、限られた人員と物資で対応する難しさを実感した。「体験すると大変さがよくわかる。こうした訓練がいざという時に役に立つ」と参加者の一人浜口洋幸さんは語る。お互いのチームの避難所の運営方法を見比べたところ、違った配置を行っていることに気づき、実際の被災の際はどう対処していくかを考えさせられた。

最後に、「災害が起こった時に地元を守るのは私たち。今日の学びを参加できなかった仲間たちに報告し、何かあった時に動けるようにこれからも学び続けます」と参加者からは感想が寄せられた。地域を支える青年団として、これからも地域に根差した活動を続けてほしい。

防災・減災を学ぶ

仲間と共に

復興に向けた地元の歩み

～うるま市から想いを寄せて～

沖縄県うるま市青年連合会

（日本青年団新聞 2020 年 2 月号）

昨年 10 月 31 日、沖縄のシンボルとして愛されてきた首里城が、突如として焼失した。沖縄全体が悲しみに包まれるなか、うるま市青年連合会会長ひがこうじの比嘉晃志さんは首里城再建に向けた復興チャリティーを地元の同級生に持ちかけ、集まった有志 7 人らで実施することを決めた。開催にあたり、うるま市教育委員会や地元の方々にも協力を仰ぎ、手作り T シャツの販売、屋台の出店、太鼓や音楽などのステージパフォーマンスを企画。イベント当日の 12 月 8 日、うるま市安慶名地域交流セしまぶくとしおンターには島袋俊夫市長をはじめ約 800 人の参加者が集まった。参加した人たちからは比嘉会長の元に多くの感謝の言葉が寄せられた。「首里城が消失して、モヤモヤを抱えていた人は多い。地域を巻き込み協力してつくったチャリティーだからこそ、意味は大きい」と比嘉会長は話す。イベントで集まった約 43 万円の義援金は、翌日には那覇市役所に届けられた。地域青年の想いが、沖縄の宝再建を力強く後押しし続ける。

沖縄のシンボルを取り戻すため、立ち上がる

日本青年団新聞　Vol.102　No.5　2017年9月1日　大正5年2月10日第三種郵便物認可（隔月1回）

大分県における災害状況や対応について、日青協の谷口博一常任理事が大分県連合青年団の阿南貴詞団長を取材した。

■被災時の状況について

大分県では、同日の午後7時頃から雨足が強まり、県内各地で避難指示が発令されました。

特に県西部の日田市では、花月川を渡るＪＲ久大（きゅうだい）線の橋が流され、6日の午前10時半ごろには、日田市小野地区で大規模な土砂崩れが起き、3名が犠牲になるなど甚大な被害を受けました。

■青年団員への被害

団長としては、日青協から大分県団への安否確認の電話やＦＡＣＥＢＯＯＫで安否確認ページの開設などをいただき、各加盟団へ安否確認のメールを送信しました。3名の団員から返事があり、大きな被害は特にないとの報告を受け安心しました。また、私は県職員でもあるので、避難所に関する本庁の連絡係員として、連日県庁と日田市との連絡調整を行っていました。青年団員の被害状況としては、1名の団員（大分市野津原在住）の自宅が河川氾濫による避難指示を受け避難し、自宅の被害も多少あったようです。

土砂崩れで多くの民家が流された

■災害時の印象

熊本地震に引き続き、予想だにしなかった災害が発生し、恐怖と不安を感じました。地元の豊後大野市では、地すべりが発生している中での大雨だったため、甚大な被害に見舞われないか、不安を感じました。

■大分県内の現在の復興状況

8月10日現在の避難者は日田市内の6世帯16人で、水道や電気などのライフラインは回復しています。また、規制された道路など徐々に解除され、流された陸橋については、来夏復旧に向けて動き出しました。

■青年団ではどのような復興活動を行っているのか

日田市のボランティアセンターのＨＰ情報を県内の各団に周知しています。各自でＨＰを確認し、参加したい団員が自分の都合がつく日に各自参加という形でお願いしています。

■今後災害が起きた時の防災について

青年団としては、団内で防災や減災に関する学習会の開催を検討しています。防災や減災に関して少しでも関心を持ち、学ぶことが大切です。地域の青年たちが、正しい知識と技術をもち、災害時に適切な行動をとれるよう、一人ひとりが意識を持つことが必要だと思います。自分たちの暮らしている地域がどんな地形なのか、避難場所はどこなのかなど、足元から今一度見直すことが大切です。

今回の豪雨で、全国の仲間から心配と激励の言葉をいただき、地元団からの無事の連絡など大変嬉しかったことを思い出します。電話やメール、ＳＮＳを活用して、今後も被災地の状況がどうなのか、発信していきます。また、顔の見える関係である青年団員同士、災害が起こった際にはお互いに助け合っていきましょう。

8月12日に、日青協から梅川美沙乃常任理事、谷口博一常任理事、大分県団の阿南会長、熊本県青年団協議会の尾方希望副会長の4名が、東峰村で行われている災害ボランティアに参加した。今回は梅川常任理事にボランティア体験を通じての感想を語っていただいた。

災害ボランティアに参加する前は、力仕事が自分にできるのか、何も知識のない私が参加したところで何ができるのだろうかと不安もありつつの初参加でした。当日のボランティア参加者は10人ほどで、主に土嚢の作成と運搬作業を行いました。最初は土嚢の作り方も分からず、教えていただきながらのスタートでした。しかし経験者の方々のリーダーシップもあり、お昼の休憩前には土嚢袋が足りなくなるほど、想定以上の成果をあげることができました。自分一人では何もできないと思っていましたが、人と人とがつながり力を合わせることで大きな成果を得ることができました。わずか1日の活動で復興完了とはいきませんが、こういった地道な活動を継続させることで着実に復興につながることを強く実感しました。また、基本的なボランティア活動の知識や、防災・減災の正しい知識の習得が大切だと知り、災害ボランティアは一般的なボランティアとは違った学びがありました。この貴重な経験を、今後の青年団活動にいかしていきます。

大量の土嚢を仲間と協力し並べきった

未だに雨水が残る民家

豪雨に立ち向かう若者たち

～地域を支える青年の力～

2017年7月5日の昼頃から夜にかけて、福岡県から大分県を中心に観測史上最も多い記録的な雨量を観測した九州北部豪雨。中でも朝倉市、東峰村、大分県日田市などでは1時間に100㎜を超える雨量が観測され、延べ30人以上の死者が出るなど甚大な被害をもたらした。

日青協では、8月13日に元日青協常任理事で元福岡県青年団協議会会長の戸嶋樹里さんを通じて、福岡県東峰村へ向かい、東峰村役場に勤めている熊谷貴範（たかのり）さん、同じく役場職員で現東峰村青年団員の福島彰隆（あきたか）さんに当時の状況や、被災から一ヶ月経った現在の状況を聞いた。

◆天災であり人災である

東峰村は2005年3月28日、小石原村と宝珠（ほうじゅ）山村が合併して発足し、福岡県の南東部に位置する。村域の大半が山地で、林業と焼き物が盛んな村で、村内には約50の窯元がある。そんな自然豊かな東峰村は7月5日の9時間で700㎜を超える豪雨により、川は増水し、山のあちこちで土砂崩れが起き、民家が流されるなどの大きな被害を受け、今なお10人ほどの村民が避難生活を送っている。「今回の豪雨による被害は天災であり人災とも言える」と福島さんは神妙な面持ちで語る。これほどまでに被害が大きくなった大きな原因は流木だと言う。林業が盛んな東峰村だが、木を植える際に間隔が狭くなってしまい、太陽の光が届きにくい状態だった。その結果、根っこが浅い木が育ってしまい、豪雨により土砂崩れが起きやすくなってしまった。その流された木が川の水流をふさぐことで増水し、被害は拡大した。

土砂の影響で通行止になる道も

消防団による側溝の清掃

東峰村に入った時点では、所々にがれきが積まれている印象を受けた。「役場周辺はあまり大きな被害はなかったが、山の方は未だひどい状況」と語る熊谷さん。その言葉どおり、被害の大きかった宝珠山を見に行くと、道には土嚢が大量に積まれており、山の斜面はえぐれ、雷で燃えて崩れてしまった建物もあった。豪雨、そして土砂崩れの凄まじさが伝わってくるような状態だった。

◆感じた青年の底力

福島さんが所属する東峰村青年団は、現在12名で活動しており、そのうち半分が役場職員だ。団長をはじめ消防団を兼任している団員も多く、被災後は消防団と協力し、土嚢などの運搬はもちろん、自分たちで検問を行うなど村の復興に向けて尽力している。毎年8月14日に東峰村青年団主催で「小石原夏祭り」という地域の夏祭りを開催していたが、豪雨の影響で一時的に中止となった。しかし、地元の子どもたちからの「今年もまつりをやってほしい」という声もあり「村を元気にするためにはまつりが必要」と団員の意見は一致。村内、また村外からも有志を募り、夏祭りを開催することができた。

夏祭りは多くの参加者で賑わった

大規模な復旧作業の様子

厳しい状況下でも、若者が力を合わせてまつりを開催したり、災害時復興作業に尽力し、地域のために貢献しようとする姿から、地域には若者が必要であり、若者が中心となり地域をつくっていくという気迫を感じた。また、地域再生の鍵は、青年団が握っていると改めて確信した。これからも困難に負けず地域に貢献し、盛り上げる活動を続けていってほしい。

今回被災地に入り、目を覆いたくなる状況であったが、自ら地域を再生させようとする青年の姿に、青年の持つ底力を垣間見ることができた。

日本青年団新聞　Vol.101　No.4　2016年7月1日　大正5年2月10日第三種郵便物認可（隔月1回）

うたた寝をしていた。2度目の大きな揺れに最初は驚き、途中で恐怖へと変わっていった。揺れが収まろうとするとまた大きな揺れが起こる。実際には途中で収まっていたと思うが、私は5時間くらいずっと揺れているように感じた。携帯電話の緊急地震速報が繰り返し響く。真夜中のあまりにも長い揺れに「恐い」と泣いてしまった。

本震発生前まではガスと水道を使うことができた地域でも、電気・ガス・水道が全て止まってしまった。実家では、電気は数時間で復旧したが、ガス・水道の復旧に数週間を要した。それでも県北・県南地域では全て使用でき、また熊本は地下水と温泉が豊富であるため、生活用水やお風呂の水はどうにか確保することができた。

ただ、熊本市内や周辺地域では多くのスーパーやコンビニで閉店もしくは品薄状態となり、数日間は食べ物の確保が大変だった。今は閉店している店の方が少ないが、熊本市周辺のショッピングモールでは未だ再開のめどが立っていないようだ。また、熊本のシンボルの一つでもある熊本城でも天守閣の瓦が落ちたり、石垣が崩れたりと深刻な被害を受けた。熊本城が元の姿を取り戻すまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。

その後の二度の大きな地震により、益城町・西原村・南阿蘇村以外にも、熊本市や御船町、宇土市など多くの地域で被害が発生した。

崩落した熊本城石垣

熊本大神宮も被災

市内の町にも被害が

◆災害支援に感謝

前震発生直後より警察・消防・自衛隊をはじめ、多くの方々が災害支援のために熊本に入った。九州内はもちろんのこと多方面から駆け付けた車を見かけた。また、ラジオでは、励ましのメッセージや歌を耳にした。そのたび「こんなにも遠くから、こんなにも多くの人たちが熊本のために来てくれている」と感謝し自然と涙が流れていた。テレビのニュースやFacebookでも募金活動、ボランティア活動の様子を目にした。本当にありがたいことである。

6月19日に九州ブロックの団長会が熊本県青年会館で行われた。会館もボイラーが壊れるなどの被害があったが、今は何とか営業を再開している。団長会後、九州ブロックの役員数名と被災した地を見て回った。道路は大部分が舗装され、倒壊した建物は撤去され、通行できるようになっていた。しかし、益城町や南阿蘇村など被害の大きかった地域では、倒壊した住宅の解体作業や仮設住宅の建設が進まず避難所等で生活されている方々も多くいる。また、賃貸住宅も空きがほぼないため、被災した方々が落ち着いた生活を送るまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。今でも時折強い余震も発生しているが、一日でも早く安心して落ち着いた生活ができるよう頑張っていきたいと思う。

避難所の益城町総合体育館には
多くの町民が今も車中泊をしている

熊本地震災害支援募金
協力のお願い

熊本県内の青年団活動の拠点である熊本県青年会館は、この地震により甚大な被害を受けました。一日でも早い復興を願い、5月4日の日青協臨時理事会では「熊本地震災害支援募金」の取り組みが満場一致で決議されました。

皆様からお寄せいただいた募金は、日青協から熊本県青年団協議会を通して、熊本県青年会館の復旧費用に役立てていただきます。

皆様のご協力をお願いします。

＜ご協力の方法＞

1. 郵便振込　10100-94028491
（他銀行から：〇一八支店　普通 9402849）
日本青年団協議会
2. 三井住友銀行青山支店　当座　252715
日本青年団協議会へ振り込み
※振込時に、「クマモト＋氏名」を
お書き添えください。
3. 日青協事業などの際に直接持参

◇実施期間
2016（平成28）年10月10日まで

◇問合せ　日青協社会部
（TEL:03-6452-9025）

1日も早く生活を取り戻したい

～平成28年熊本地震の日から今まで～

古奥さんの自宅の駐車場　割れた道路やむき出しのマンホールから地震の悲惨さが伝わる

4月14日以降大きな揺れが相次いだ平成28年熊本地震。全国の青年団員からも心配の声が寄せられた。また、6月下旬には九州の大雨の影響で熊本県でも土砂災害が起こるなど、今なお住民の心が休まる状況には至っていない。今号では、中でも地震の被害が大きかった益城町に暮らす熊本県青年団協議会の古奥紗耶佳副会長に当時の状況を執筆いただいた。

◆最初の揺れは突然に

2016年4月14日午後9時26分、熊本地方を震源とする地震が発生した。この地震で私の住む益城町は震度7を観測した。近所の道路には亀裂が入り、倒壊した家もあった。

私は地震発生時、自宅から3キロほど離れたファミリーレストランにいた。突然下から突き上げるような揺れに襲われ、あかりが消えた。一瞬何が起きたか分からなかったが、「地震だ」と理解するのに時間はかからなかった。この時は恐怖より驚きが強かった。家族と電話がつながらなかったが、LINEで連絡をとることができた。自宅の状況が気になりレストランを出たが、自宅周辺の道路に亀裂が入り、アスファルトがせり上がっているため、なかなか自宅に着くことができなかった。やっと自宅に着くと、家具は倒れ、部屋の中は足の踏み場がなかった。

外ではガスの臭いもして、町内では火災が数件発生していた。

真っ暗闇の中、強い余震が続いている恐怖とたたかいながら、携帯電話のあかりと見つけ出した懐中電灯を頼りに貴重品と着替えを探し出し、熊本市西区にある実家へと避難した。この時、地震発生から3時間半が経過していた。道中、県庁付近で鹿児島県警の車両を見かけ、ふと涙がこぼれた。心の中では「夢であってほしい」と祈る私がいた。

◆真夜中に続く恐怖

4月16日午前1時25分、2度目の震度7を観測する地震が私たちを襲った。避難所や車中泊で一晩を明かした人も帰宅し、自宅で眠っていた人も多くいた。まさかさらに大きな地震が起きるとは誰もが予想していなかっただろう。この本震発生により被害は拡大し、南阿蘇村では土砂崩れが発生した。阿蘇大橋の崩落には多くの県民が驚いたことだろう。被災した町村も増加し、通行止めとなった道路も増えた。益城町内でも、前震では倒壊を免れた住宅が倒壊してした。私の自宅は倒壊しなかったが、住める状態ではなくなったため引っ越しを余儀なくされた。

本震発生時は熊本市内の実家で

元の生活、少しずつ

～熊本地震から１年、暮らしは今～

熊本県青年団協議会

（日本青年団新聞 2017 年 5 月号）

2016 年 4 月 14 日に発生した熊本地震から､1 年が経過した。昨年 7 月号で当時の状況を語っていただいた熊本県青年団協議会の古奥紗耶佳さんに、現在の地域や復旧状況について執筆いただいた。

◆少しずつ復旧進む

この一年は、あっという間に過ぎていった。現在でもまだ余震は発生していて、恐怖を感じることがある。震災の映像や写真を見ると､「見たくない」と「地震を忘れてはいけない」という 2 つの気持ちが入り混じる。普段はあまり感じないが、心の傷は自分が思っているより深いのかもしれない。

被害の大きかったショッピングモールや映画館が 3 月末に再開したことは､とても嬉しかった。ほとんどの地域でライフラインも復旧した。また、被災した家屋の解体も進み、更地が増えたが、業者の不足等で自宅を再建したくてもできない被災者もいる。私は住んでいる家が変わったが、地震前と同じような暮らしができ、何気ない日常がこんなにも幸せなことなのかと実感している。

ただし、道路は仮復旧の段階の箇所が多く、未だに通行止めの場所もある。まだ利用できない公共施設も多くある。被害が大きかった分、再開や復旧に時間がかかるのは仕方のないことだと思う。熊本城はやっと本格的な復旧工事が始まった。市民や観光客に天守閣が見えるよう、透明に近い幕で覆われて工事されるようだ。復旧した姿を見られる日が待ち遠しい。また､熊本県青年会館は、受水槽やボイラー、エレベーターなどの復旧工事が 2016 年の夏頃に終わり、営業も再開しているが、壁や天井の改修は今後行われるそうだ。

私は熊本地震までは防災意識もなく、防災グッズの準備もしていなかったため、食べ物にも困った。この経験を経て、普段から防災意識を持つことが大切だと実感した。そうすれば、被害が起きても慌てたり不安に感じたりすることも軽減されると思う。

◆仲間の大切さ実感

地震後、「大丈夫？」「必要なものがあったらすぐに言ってね」と、たくさんの仲間が連絡をくれた。日青協や熊本県青年団協議会を通じて熊本の状況を心配してくれた皆さん、募金をしてくれた皆さんには、本当に感謝している。当時は孤独を感じることもあったが、心配してくれている仲間、いざという時に頼れる仲間がいることは、大きな心の支えとなった。あらためて「青年団に入って良かった」と思う。家族や私のことを心配してくれた友人・青年団の仲間の存在はとても大きく、これからも大切にしていきたい。

復旧が始まった熊本城（2017 年 4 月 14 日撮影）

2017 年 4 月当時の熊本県青年会館の内壁

他所ではない、ここでの氾濫

～一変したふるさとに立って今、思うこと～

熊本県青年団協議会

（日本青年団新聞 2020 年 9 月号）

2020 年 7 月 4 日、見慣れた景色は一変した。前日から流れ込んでいた雨雲が、球磨川流域一帯に体験したことのないような大雨を降らせ、球磨村をはじめ 13 か所で川が決壊・氾濫し、西日本全域にも大きな被害をもたらした。熊本県青年団協議会会長の尾方希望さんは――。

◆尾方さん――

梅雨ということもあって、特に危機感を持っていませんでした。3 日深夜、災害アラートが鳴っていましたが、球磨川の様子はあまり気にしていませんでした、今思うと危機感がなかったと思います。

4 日の早朝 5 時頃、勤める高齢者福祉施設の同僚から「避難している」と連絡が入りました。すぐに球磨川の状況を検索すると、どこも橋桁のすぐ下まで水が迫っていました。自宅のある多良木町から職場のある人吉市まで車で向かう途中、土砂崩れで道がふさがり迂回せざるをえないところもありました。到着した人吉市では道路の冠水が始まっており、地元消防団のみなさんが誘導してくださり、無事に避難することができました。その 1 時間後には球磨川が氾濫し、人吉市中心部で最大約 4m も冠水するとは……。

川が氾濫してからは通信障害で、電話やネットが使えなくなり、職場のテレビで被害の状況を知りました。近隣の施設でも大きな被害が出たことも、また帰りに車で走りながら見るまちの被害の様子にも、大きなショックを受けました。これ以上雨が降らないでほしい、と何度も祈りました。各地の青年団の仲間に電話が不通だったので、慌てて LINE を送り、無事を確認できた時の気持ちと言ったら忘れられません。

団員の多くは自治体職員で、休む間もなく避難所の準備や運営をしています。先日私が炊き出しの手伝いに行った際、被災者のため懸命に力を尽くす仲間や OB・OG を見かけました。声もかけられないほど慌ただしい状況でしたが、みなさんが無事で安堵しました。

全国から励ましの言葉をいただき感謝しています。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためボランティアは県内在住者に限定され、未だ人手不足の所も多くあります。感染症のため思うように動けずもどかしく思うところもありますが、自分にできることを見つけながらやっていきたいと思います。まさかと思うことは突然起こります。青年団でも仕事でもプライベートでも、普段の何気ない事に感謝し大事にするべきだと今回改めて感じました。

被災して一週間、
続く大雨で田んぼが再び水浸しに

災害から学び、行動する若者たち

自分たちで生み出した活動

日本は災害大国と呼ばれる通り、東日本大震災以降自然災害が多発し、昨年９月には台風15号が関東を直撃した。千葉県では大規模停電が発生し、復旧に１週間以上の期間を要するなど、様々な災害が各地に大きな傷跡を残している。規模を問わず、いつ、どこで自然災害が発生してもおかしくない状況だ。

本特集では全国の仲間達が実践してきた数多くある支援活動や防災、減災活動の一部を紹介していく。

地元に根付く青年団が被災して当事者となったとき、何を感じ、学び、実践や教訓に転換したのか。また、大切な全国の仲間が非常事態にあるとき、今できることは何かを考え、どのような行動を起こしたのか。困難に立ち向かう青年団の活動をふりかえり、私たちが出来る実践を考える機会とする。

Focus

日本青年団新聞2011年４月号

がんばろう宮城

宮城県：宮城県青年団連絡協議会

震災直後、安否確認のメールや電話連絡が多い中、**宮城県青年団連絡協議会**のメーリングリスト内で「がんばろう宮城」という文字が飛び込んできた。宮城県復興のため、ＴＶの戦隊もののように５色のシールに書かれ、一人の団員から送られていた。このシールの話題は、沈んでいた仲間たちの気持ちを久しぶりに元気づけた。被災直後にできることは限られているが、一団員の行動により大きな力となり、復興へと前進している。

防災は地域のつながりから

福井県：吉川地区青年団

鯖江市にある**吉川地区青年団**では、公民館事業の運営協力を行いながら防災活動をしている。小学４年生の児童を対象に、災害時には避難所となる公民館で２泊３日の共同生活を行いながら通学する合宿通学を行っている。吉川地区のなかでも防災・減災に特化した合宿通学は珍しく、床に段ボールを敷いて寝たり、ハザードマップを作成したり、防災訓練の役割を担っている。人々とのふれあいが薄くなった現代だからこそ、日ごろから地域で防災に取り組むことが必要だ。

日本青年団新聞2016年９月号

日本青年団新聞2016年７月号

防災・減災の学びを広く伝える

静岡県：静岡県青年団連絡協議会

2013年から**静岡県青年団連絡協議会**は、被災３県の青年団の協力を得て現地を訪問する復興スタディーツアーを開催。参加者は16年６月、伊豆で行われた子ども向けイベントで「防災ひろば体験コーナー」を出展し、訪問した現地の様子や日頃の備えの大切さを老若男女問わず多くの人に伝えた。子どもが遊びながら防災について学べるよう自分たちでイラストクイズ等も作成し、若者から情報発信を行うことで地域の防災リーダーとしての意識が芽生えた。

北方領土の早期返還をめざして
「四島（しま）の未来　心かよわせ　返還へ」
2月7日は北方領土の日です
独立行政法人 北方領土問題対策協会
〒110-0014 東京都台東区北上野1-9-12住友不動産上野ビル9F
電話 03-3843-3630　FAX 03-3843-3631
http://www.hoppou.go.jp

日本青年団新聞2011年６月号

復興への第一歩として

大阪府：岸和田市青年団協議会

1995年１月17日阪神淡路大震災で助けられてから、16年後の2011年３月11日に東日本大震災が発生。「今度は俺たちが」という気持ちが、**岸和田市青年団協議会**の青年団員35名を宮城県気仙沼市へ震災復興支援に向かわせた。協議会60周年記念式典の積立金を支援費用にあて、式典を中止にした。災害発生直後、自分たちに何ができるのか、何が重要であるのかを考え、団結して行動できたのは日ごろの青年団活動があったからだ。

岡山からの「Message」

岡山県：3. loveline 岡山→東日本実行委員会

2011年８月に岡山県青年団協議会は岩手県陸前高田市で瓦礫撤去を実施。参加者の有志で３．loveline（スリーラブライン）**岡山→東日本実行委員会**が立ち上がる。横断幕の寄贈や継続的な募金活動を進める中、岡山の人々から震災が過去になりつつあるように感じ、今まで被災地を訪問した際や自分たちの活動記録映像を基に映画を製作した。14年３月11日に地域住民も含め100人で上映会を行い、震災の記憶を風化させないために何ができるか、考えた先にたどり着いた行動だった。

日本青年団新聞2014年４月号

日本青年団新聞2012年９月号

火山灰売り復興の一助に

宮崎県：高原町青年団

2011年１月26日に宮崎県と鹿児島県の県境にある新燃岳（しんもえだけ）が噴火した。**高原町青年団**は、降り注いだ灰を利用したいと思い、町の復興をＰＲすることと高原町の災害義援金のために火山灰販売を開始。しかし、計画最中の３月11日に発生した東日本大震災をきっかけに「灰プロジェクト実行委員会」を立ち上げることとなった。集まった義援金は全国青年大会や現地ボランティアの際に、宮城県南三陸町や山元町の青年団員へ、確実に使えるようにと手渡しで寄付し、交流を深めた。

震災パネル
貸出無料！
※送料のみご負担いただきます

Ｗｅｂ生きる
公開中！

お問合せ先
日本青年団協議会　社会部　可部・四至本
TEL: 03-6452-9025　FAX: 03-6452-9026
MAIL: shakai_josei@dan.or.jp

生活の中で生きる青年団活動

駒澤大学教授　萩原　建次郎　氏

はぎわら・けんじろう。修士（教育学）。駒澤大学総合教育研究部教職課程部門教授。研究分野は、教育人間学、居場所、若者の自己形成空間、社会教育。

〝爪先の痛みは全身の痛み〟東日本大震災のとき、真っ先に被災地支援に赴いた関西地方のある青年団員から聞いた言葉だ。青年団は普段身近な地域での活動を主としながらも、いざ全国の仲間たちが苦境に立たされた時、自らの痛みとして感じとる。だからこそ、考えるより先に現地に赴き、現地の青年団からいま何が必要なのかを直接聞いたという。

これを「実践活動」と言うことに、青年団の皆さんはピンとこないようだ。毎年募集される全国地域青年実践大賞では、不思議なことに被災地支援や防災の取り組みのエントリーが少ない。それは冒頭に紹介したように、事前に考え計画した「実践」というよりも「人として当たり前」「ほおっておけない」という感覚が青年団の根底に流れているからではないか、と思う。

今回の特集では地元での防災や復興の取り組み、被災地へ赴いての取り組み、青年団同士が協同しての取り組みなど、多様な活動が紹介されている。何が正しい活動かというのはない。けれども共通して伝わってくるのは、日ごろから地元の子どもたちやお年寄り、まちの人々とのふれあい、喜怒哀楽を共にするなかで、彼らの笑顔や痛みを感じとる団員の姿だ。

自分たちの活動の、その先には生身の人間がいる。具体的な誰かの顔を思い浮かべたとき、きっと次の活動が生まれてくることを心から期待している。

震災パネルのご紹介

１）目的

2011 年 3 月 11 日に発生し、甚大な被害と犠牲をもたらした東日本大震災が発生してから、日本青年団協議会では地域青年の声なき声を拾い集め、2012 年から震災パネルを作成してまいりました。

震災パネルは、第 1 部「あの日の証言」、第 2 部「復興に向けて」、第 3 部「明日に備える」の計 22 枚、3 部構成となっており、第 1 部ではあの未曾有の大災害を決して風化させてはならないという想いから、冊子「生きる」で綴られた言葉から拾い上げ製作しました。第 2 部は、被災から立ち上がるため懸命に活動している青年や、全国各地の復興支援活動など地域青年の多岐にわたる活動を伝えるものとなっています。第 3 部は、震災の教訓や支援、防災・減災の活動、そこに込められた当事者の力強い言葉を紡いだパネルです。

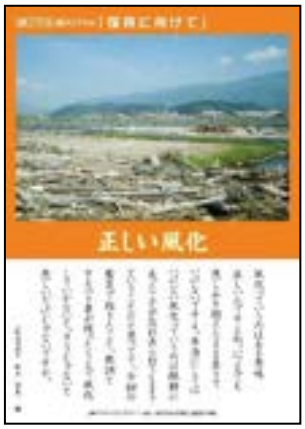
私たちは震災の記憶を風化させるだけでなく、来るべき災害に備えなければなりません。災害は、いつどこで起こるか全く予想がつかないものです。被災の記憶を語り継ぎ、いつ襲いくるかわからない災害への意識を高め、防災・減災活動に役立てるため、道府県団をはじめ自治体などにも幅広く利用を呼び掛けています。

２）作品について

全て B2 サイズ（51.8cm×72.8cm）

＜第 1 部＞　「あの日の証言」震災当時の状況や思いを展示します。（全 7 枚）

＜第２部＞　「復興に向けて」全国各地の青年たちの復興支援活動を展示します。（全８枚）



＜第３部＞　「明日に備える」来るべき災害に備える全国各地の青年たちや熊本地震に立ち向かう青年の活動を展示します。（全７枚）

3）利用実績について

震災パネルの利用実績紹介（一部）

日本青年団新聞　Vol.103　No.3　2018年5月1日　大正5年2月10日第三種郵便物認可（隔月1回）

小平市民が向き合う3・11

忘れない3．11展実行委員会事務局長　奥野　宏子さん

東京都小平市では、市民団体や行政、企業などが力を合わせ、「忘れない3．11展（以下、3．11展）」を毎年開催してきた。第7回となる今回は3月6日から11日の6日間、小平市中央公民館を舞台に、延べ約1600名の来場者があり、その一角で震災パネル展も開催された。地域で震災の取組を続ける意味とは何か。3．11展実行委員会事務局長の奥野宏子さんにお話を伺った。

―3．11展について教えて下さい。

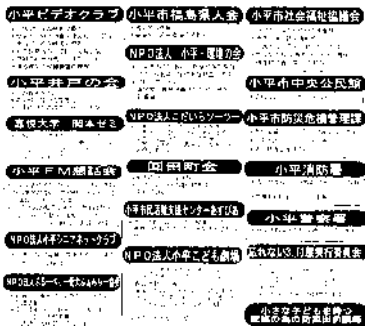
奥野）小平市は、公民館活動をはじめ地域活動が盛んな街です。2011年の東日本大震災発生後、小平市も揺れや計画停電に遭い、怖く不便な思いをしました。我が事として伝えていくのが大切と考えていたところ、中央公民館から「協力して震災についての取組をやらないか」とのお話をいただき、翌12年3月に、公民館が中心となって1回目となる3．11展を開催しました。その後、15年には運営体制が市民団体中心となり、17年には実行委員会も立ち上がって現在に至ります。劇団から子ども団体、大学、県人会、消防や市役所など22団体2企業に及ぶ幅広い層が、震災を忘れないという一点で集まっています。

―なぜ震災パネルをご利用いただけたのですか。

奥野）ある時、中央公民館のチラシ置場に、日青協の震災パネル利用の案内チラシが置いてありました。それまでは日青協や青年団のことはよく知りませんでしたが、ちょうど実行委員会の中で「震災のパネル展をやりたい、震災直後だけでなく復興や支援活動、さらに防災活動まで一目で分かるものが良いね」と話していたので、早速利用の申し込みをしました。写真だけでなく、想いのこもったメッセージもあり、文章を読んで涙が出た、という来場者の方もおられました。被災の実相を伝えるだけのものは多いですが、そこから復興、そして次の災害のために取り組む青年団の様子がわかり、とても良かったです。また来年も使いたいと思っています。

―今、地域が一丸となって震災展を開催することに、どのような意味がありますか？

奥野）全く関わりが無かった団体同士が、3．11展をきっかけにつながることが増えています。愛犬団体では、いざという時に電気がないと活動できないことに気づき、同じくブースを出していた太陽エネルギー団体と一緒になって電気についての取組を始めました。3．11展を機に各団体の活動がつながりあい、活気あるものとなっていることは、3．11展が果たす大切な役割の一つだと思います。



「忘れない」を合言葉に集う団体

小平で震災を考え続ける

災害を通して見る私たちの学び

北海道大学大学院教育学研究院准教授　辻　智子さん

「生きる」は震災を経験した青年が全国の青年たちに「聞いて欲しい」「伝えたい」と発した声がきっかけでした。体験が綴られた記録の背後には、仲間を亡くした悔しさ、故郷の壊滅的な被害へのやりばのない気持ち、阪神淡路大震災の学習が役に立ったことから今度は自分が発信をという責任感など様々なものがありますが、記録を通して受けとめあう関係は青年団の歴史とネットワークなくしては実現しませんでした。聴き手の存在は重要です。

遠隔地の青年団同士が行き来しながら関係と学習を深め、各々なりに活動の幅を広げていきました。被災地と出会い、自分たちに何ができるかを悩み、翻（ひるがえ）って自らの地域で自分たちがやるべきことは何かを模索しています。復興の過程は地域づくりの試行錯誤であり、全国各地の青年団にとって他人事ではありません。だからこそ学びあえる関係は貴重であり、日青協にはそれを支えてほしいと思います。原発被災地と避難者の現実も忘れてはいけません。

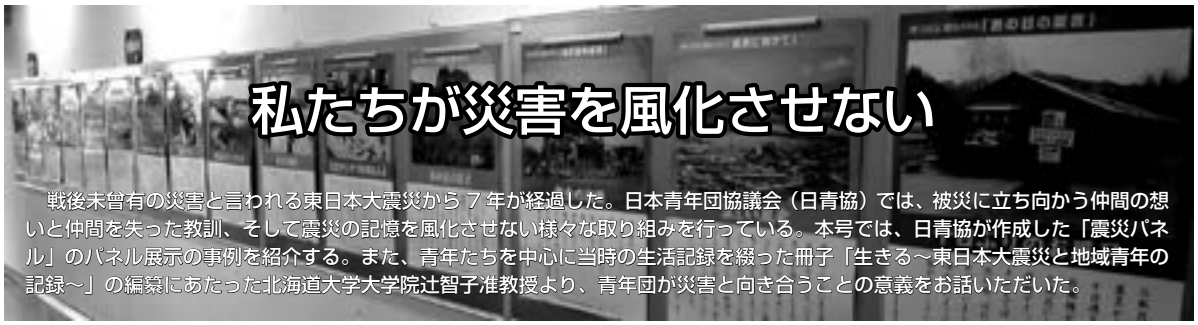
災害時の経験は日常生活の課題を凝縮して顕在化させます。避難所で居づらい思いをしたのは誰だったのか、避難生活で何が問題となったのか。非常時への備えというだけでなく、地域の日常を見直すことにもつながるでしょう。震災から何を学ぶか、記録は私たちをそこに立ち返らせてくれます。ｗｅｂを通じてさらに広く発信され、震災パネルによってより多くの人に届けられることで、この後、どのような新たな展開を見せるのか、期待しています。

つじ・ともこ。神奈川県出身、北海道札幌市在住。北海道大学大学院教育学研究院准教授。青年期教育論研究室を担当。

利用方法のご案内

日青協では、今回ご紹介した震災パネルの貸し出しや、ｗｅｂ生きるの公開などを行っている。

【お申込み、お問合せ】
日本青年団協議会　社会部
〒160-0013 東京都新宿区
霞ヶ丘町4-1 日本青年館5階
Tel 03-6452-9025 Fax 03-6452-9026
http://www.dan.or.jp/



私たちが災害を風化させない

戦後未曾有の災害と言われる東日本大震災から７年が経過した。日本青年団協議会（日青協）では、被災に立ち向かう仲間の想いと仲間を失った教訓、そして震災の記憶を風化させない様々な取り組みを行っている。本号では、日青協が作成した「震災パネル」のパネル展示の事例を紹介する。また、青年たちを中心に当時の生活記録を綴った冊子「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～」の編纂にあたった北海道大学大学院辻智子准教授より、青年団が災害と向き合うことの意義をお話いただいた。

◆7年間の軌跡

日青協では、東日本大震災発生直後に緊急掲示板の設置や支援物資、義援金を呼び掛け、復興支援ブログを立ち上げた。加えて、現場に支援に入る全国の青年団員と現場の青年団などをつなげる役割を果たし、現場の声が反映される支援を呼び掛けてきた。

翌12年からは、地震・津波・原子力発電所の事故に対し日本の青年たちがどう向き合ってきたか、その事実や暮らしぶりを記録した「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～」を発刊してきた。きっかけは「この経験を記録に残したい。多くの人に知ってほしい」という被災地の仲間の声だ。その後「生きる」は、16年に発生した熊本地震や災害に対する各地での取組も取り上げながら第５号まで刊行され、昨年度からは日青協ｗｅｂサイト上で「ｗｅｂ生きる」を公開している。

また、被災の実相や手記の更なる普及と啓発を目的に、震災パネル全３部を作成し利用促進を図ってきた。近年では一般の方からの利用もあり、仲間の想いが拡がりをみせている。

地域住民と共に育む防災の意識

文京区立千石図書館館長 谷畑 誠さん　同副館長 岡野 裕司さん

３月１日～25日にかけ、文京区立千石図書館で地域住民の防災意識を高めるイベント「３．11から７年～未来へつなぐもの～」が開催され、震災パネルを活用いただいた。館長の谷畑（たにはた）誠さん、副館長の岡野裕司さんに、震災パネル展を開催した背景や千石図書館で行っている活動について聞いた。

―今回震災パネルを展示しようと思ったのはなぜですか。

谷畑）当館では地域の方々に日ごろから防災意識を高めてもらうため、東日本大震災の翌年から防災・減災活動を行ってきました。これまでに宮城県仙台市新町や南三陸町、岩手県釜石市などのご協力のもと、震災後の被災地の様子や復興に向けた取組みを紹介する写真展示を行ってきました。

岡野）そこで今回、震災パネルのチラシと日青協ｗｅｂサイトを拝見し、平和運動や震災復興への取組を活発にされているとのことで、当館の活動とも通じる部分があると感じ活用いたしました。

―当日の様子や利用しての感想、参加者の声はいかがでしたか。

谷畑）展示期間に併せて映画祭を行っていたこともあり、延べ３００人ほどにご来場いただけました。来場者からは「私の実家も津波で流されてしまった。このような企画を続けてくれていることはありがたい」との心のこもったお言葉をいただきました。

岡野）今回、当館での避難訓練などの取組を、震災パネルを模して報告するパネルを作成し展示したことで、当館の取組も同時に知っていただく機会となりました。また、私たちにとっても各個人で何ができるのかを考える貴重な場となりました。

―地域の図書館として、今後住民の方と共に、どのように防災意識を高めていくのでしょうか。

谷畑）文京区は高地ということもあり、当館はいざというときの避難場所になることが予想されます。そうした時に、地域の方々と共に日ごろから防災への意識を育み、少しでも被害を減らせるよう職員一同取り組んでいます。

３．11は、自然災害は被災地だけでなく日本全体の問題として、一人ひとりが被災者の立場になって考え、向き合っていかなければいけないと私たちに気づかせる出来事となりました。そのため当館は東京都内の他の図書館と比べ、地域へ向け来るべき災害に対する多くの取り組みをしていると自負しています。今後もパネル展だけでなく、地域の方々とのつながりづくりを続けていきます。

―ありがとうございました。

千石防災取組パネル

当日はアンケートを設置した

「web 生きる」のご紹介

１）目的

2011 年 3 月 11 日。日本全国に大きな爪痕を残した東日本大震災。未曽有の大災害から 10 年が経とうとする今日まで、災害大国といわれる日本に暮らす私たちはさまざまな災害に見舞われてきました。その被害の実相を当事者たちの生の言葉で伝えるとともに、災害から復興に向けて歩む様相を次代に伝えていく定点観測的な記録として編纂しているのが「生きる」です。 災害の事実を風化させてはならない、どうか私たちと同じ思いをしないでほしい、もう一度ふるさとを取り戻したい。一つ一つの言葉が災害の恐ろしさ、被災の残酷さ、そこから立ち上がる人の強さを生々しく語りかけてきます。

日本青年団協議会は、防災・減災の意識啓発の一環として取り組んできた「生きる」を、いつでも、どこからでも読むことができる学習教材の一つとして「web 生きる」を製作しました。冊子にせず「気がついたとき」にどこからでもアクセスして、自由に学ぶことができます。

各地の青年たちが綴った記録は遠い町の他人事ではなくあなたに明日訪れる未来かもしれない。いつか必ず起こる災害からあなたや大切な誰かを守るために活かされることを願って、記事の執筆、閲覧を呼び掛けています。

２）URL

https://dan.or.jp/webikiru/

（下記 QR コードからも読み取れます。）

3）掲載地域について

2018

9月 6日　北海道胆振東部地震

- 水谷　あゆみ　（北海道札幌市）

7月　平成３０年７月豪雨

- 成田　勝治　（石川県能登半島）
- 松井　里美　（滋賀県守山市）
- 中園　謙二　（岡山県倉敷市）
- 石崎　貴史　（岡山県倉敷市）
- 大崎　博士　（高知県）

2月　福井豪雪

- 岡井　里紗　（福井県鯖江市）

2017

8月 8日　台風５号

- 天野　翔太（滋賀県長浜市）

7月11日　九州北部豪雨

- 高嶋　聡平（東京都）
- 梅川　美沙乃（長崎県松浦市）
- 阿南　貴詞（大分県豊後大野市）

2016

10月21日　鳥取県中部地震

- 大上　美香（鳥取県東伯郡北栄町）

4月14日　熊本地震

- 大塚　拓也（熊本県熊本市）
- 岡本　了（熊本県熊本市）
- 匿名希望（熊本県熊本市）
- 尾方　希望（熊本県球磨郡多良木町）
- 古奥　紗耶香（熊本県上益城郡益城町）

2011

3月11日　東日本大震災

- 松田　恵美子（岩手県陸前高田市）
- 千葉　加奈子（宮城県大郷町）
- 橋爪　佑太（宮城県大郷町）
- 滝田　真央（宮城県仙台市）
- 遠藤　大輔（宮城県東松島市）
- 芳賀　広美（宮城県気仙沼市）
- 佐久間　祥平（宮城県角田市）
- 佐藤　竜太（福島県会津若松市）
- 長谷川　綾（福島県会津若松市）
- 木戸　彩愛（福島県福島市）

４）記事の目次について

2018 年 9 月 6 日　　北海道胆振東部地震

「北海道胆振東部地震」を経験して　水谷あゆみ（北海道札幌市）

2018 年 7 月　　平成 30 年 7 月豪雨

能登に生きる　成田　勝治（石川県能登半島）

私にできること　松井　里美（滋賀県守山市）

平成 30 年 7 月豪雨　中園　謙二（岡山県倉敷市）

平成 30 年 7 月豪雨で被災して　石﨑　貴史（岡山県倉敷市）

2018 年西日本豪雨をふりかえって　大﨑　博士（高知県高知市）

2018 年 2 月　　福井豪雪

雪がもたらした経験値　岡井　里紗（福井県鯖江市）

2017 年 8 月 8 日　　台風 5 号

台風 5 号　天野　翔太（滋賀県長浜市）

2017 年 7 月 11 日　　九州北部豪雨

九州北部豪雨の被災地を訪れて　高嶋　聡平（東京都）

他人事からの自分事へ　梅川美沙乃（長崎県松浦市）

試される九州 ～自然は恐ろしい。でも、人もそんなに弱くない。～　阿南　貴詞（大分県豊後大野市）

2016 年 10 月 21 日　鳥取県中部地震

「鳥取県中部地震を経験して」　大上　美香（鳥取県東伯郡北栄町）

2016 年 4 月 14 日　　熊本地震

熊本県青年会館のあの日から　大塚　拓也（熊本県熊本市）

地震後の現状　岡本　　了（熊本県熊本市）

熊本地震　匿名希望　（熊本県熊本市）

いつ･どこで起きるかわからない自然災害。　尾方　希望（熊本県球磨郡多良木町）

熊本地震からやがて 2 年・・・　古奥紗耶香（熊本県上益城郡益城町）

2011 年 3 月 11 日　　東日本大震災

今の自分たちにできることを　松田恵美子（岩手県陸前高田市）

話すことへの責任　千葉加奈子（宮城県大郷町）

私の 3 月 11 日　橋爪　佑太（宮城県大郷町）

生きている理由　滝田　真央（宮城県仙台市）

レッツゴーマイタウン　遠藤　大輔（宮城県東松島市）

震災から 7 年　芳賀　広美（宮城県気仙沼市）

災害は忘れなくてもやってくる　佐久間祥平（宮城県角田市）

現状と心境　佐藤　竜太（福島県会津若松市）

会津からでは見えないリアル　長谷川　綾（福島県会津若松市）

つながりがくれた、未来　木戸　彩愛（福島県福島市）

あとがき

本誌『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の発生から一年後に第 1 号を作成し、その後、現在まで発行を重ねてきました（第 1 号 2012 年 3 月、第 2 号 2013 年 3 月、第 3 号 2014 年 5 月、第 4 号 2016 年 2 月、第 5 号 2017 年 2 月）。

はじまりは、発災直後、日本青年団協議会事務局員が安否確認と物資支援で再会した東北の青年団員たちから口々に被災時の周囲の様子や自分が避難した時のことがほとばしるように語られたことから、それを受けとめ全国各地の青年団の仲間たちと共有しようとの思いでした。当時、東北の青年たちは「誰かに話さずにおれない」「思わず語ってしまった」「聞いておいてほしい」という状況だったと想像されますが、話を聴いた者としては、それを貴重な証言として大事にしていきたいと思わずにはいられませんでした。

それを一度きりの証言集・体験記に終わらせずにつづけてきたのには、次のような理由があります。一つは、震災による被害、具体的には東京電力福島第一原子力発電所事故による避難が続いていることです。本誌にもインタビューの記録を収録していますが、福島県浪江町の青年団 OB である、古農満さん、志賀重夫さんには、数年おきに、ご自身やご家族の生活について話をうかがってきました。果てしない廃炉作業と事故による被害は取り返しのつかないものであり、これによる被害は長期にわたって多大な影響を及ぼし続けています。一人ひとりの人生にとって、その影響の現れ方はより複雑になり、あらためて事故の甚大さを思い知らされます。

二つは、震災後こそが重要であり、地域と青年たちにとっての正念場になるだろうとの思いです。震災からどうやって這いあがって次の展望と希望を見出していくのか、その時その時の「今」の話をうかがいながら、その歩みに寄り添わせてほしいという気持ちがありました。そこで見いだされる展望は、震災前から積み残されている地域の問題を乗り越えてゆくものにならざるをえないでしょうし、原子力発電所のような外からやってくる大規模な資本とそれに頼る開発政策に対する自覚的な対峙を含んで安心して暮らしてゆける生活や地域のあり方を構想するものへつながるに違いないとも思っていました。10 年たった今もなお先が見通せない大きな問題がある一方、各地域での様々な新たな動きには力強い芽吹きを感じています。

それにしても、続けることは思った以上に困難なことでした。「つらい記憶など忘れてしまいたい」「いつまでも被災地と言われたくない」という声が聴こえてくることもありました。とはいえ、他の人には同じ思いをしてほしくない、というみなさんの強い気持ちに後押しされて、今、第 6 号までたどりついています。

また、続けることを後押ししたものには、毎年のように起こる大規模な災害の影響もありました。新型コロナウイルス感染症の蔓延に苦しむ現在も「災害」の渦中にあると言えるかもしれません。これらは、災害からの避難においても、災害後の復旧や復興においても、東日本大震災での経験と必然的に共鳴し、この『生きる』に新たな語り手・書き手の参加を促すことになっています。

災害と隣り合わせの不安な世の中で私たちは生きる希望をどのように見出していくのか、今、『生きる』には、そんな大きな問いかけも重なっているように見えます。

辻　智子（北海道大学准教授）

資料 1

『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 1～5 号内容（目次）一覧

【第 1 号（2012 年 3 月）】はじめに／目次／東日本大震災に関する青年団関係の動き―2011 年 3 月 11 日～2012 年 3 月 11 日―／第 1 章　大震災での体験をつづる　震災体験を次の世代の人へ（岩手県大槌町・佐々木訓）、あの日を忘れない～2011.3.11 東日本大震災～（岩手県釜石市・小國太一）、東日本大震災手記（岩手県陸前高田市・泉田将治）、東日本大震災手記（岩手県陸前高田市/北上市・橋詰琢見）、被災体験記（岩手県陸前高田市・松田恵美子）、東日本大震災体験記（岩手県陸前高田市・村上宏）、M9.0 震度 7 の地から（宮城県栗原市・加藤義弘）、大震災から学んだ地域のつながり（宮城県気仙沼市・高橋弘則）、東日本大震災手記（宮城県気仙沼市・芳賀孝司）、東日本大震災体験記（宮城県気仙沼市・芳賀広美）、東日本大震災を経験して（宮城県登米市・岩崎大輔）、震災を経て（宮城県山元町・齋藤緑）、東日本大震災以降の行動記録と感じたこと（福島県会津若松市・吉田恵三）、継続は力なり（福島県会津若松市・渡辺直也）、出るも地獄、残るも地獄（福島県浪江町/秋田市・古農満）／第 2 章　支援活動の記録　石川県青年団協議会、大阪府岸和田市青年団協議会・泉佐野市青年団協議会、岡山県青年団協議会、日本青年団協議会／この記録冊子ができるまで（辻智子）／おわりに～青年団の仲間たちへ～（田中潮）

【第 2 号（2013 年 3 月）】はじめに／目次／東日本大震災に関する青年団関係の動き―2012 年 3 月 12 日～2013 年 3 月 11 日―／第 1 章　大震災の体験を綴る　海は繋がっている（北海道様似町・千葉浩行）、あの時（青森県八戸市・川井若奈）、生き残った者として（岩手県陸前高田市・菅野学）、3.11 を振り返って（宮城県気仙沼市・熊谷公人）、ライフライン寸断で混乱状態の震災直後（宮城県登米市・菊地健治）、あの日の食パンの味が忘れられない（宮城県大和町・武藤順子）、あの日から（宮城県仙台市・山田美香）、震災発生から 10 日間の記憶（宮城県角田市・佐久間祥平）、原発事故と向き合って（福島県伊達市・宍戸克己）、私の「おもい」（福島県浪江町・志賀重夫）、『記憶』（福島県いわき市・鈴木崇弘）、震災後の状況と「じゃんがら念仏踊り」への思い（福島県いわき市・渡部久美）、3.11 の経験（静岡県静岡市・相馬隆史）／第 2 章　暮らす　3.11 後の記録　震災後の私の暮らしを振り返る（岩手県大槌町・佐々木訓）、震災はまだ終わっていない（岩手県陸前高田市・泉田将治）、「米崎小仮設住宅から―2012 年春」（岩手県陸前高田市・佐藤一男）、ピンチをチャンスに（岩手県陸前高田市・橋詰琢見）、一歩ずつ（岩手県陸前高田市・松田恵美子）、希望が持てる地域に（宮城県気仙沼市・高橋弘則）、けせん避難所・仮設挿話集（宮城県気仙沼市・芳賀広美）、M9.0 震度 7 の地から（その 2）（宮城県栗原市・加藤義弘）、震災後に直面した雇用問題と被災地の現状（宮城県登米市・岩崎大輔）、震災を経て～その後（宮城県山元町・齋藤緑）、復興元年（福島県会津若松市・渡辺直也）、あの日から,間もなく 2 年（福島県会津若松市・吉田恵三）／第 3 章　支援活動の記録　特定非営利活動法人静岡県青年団連絡協議会～静岡県青年問題研究集会・拓け KATARI 場 2013～、高知県青年活動実践協議会にぎわいボニート～東北復興プロジェクト「ship for ship」、大分の青年たちの支援活動、宮崎県高原町青年団灰プロジェクト実行委員会／第 4 章　記録から学ぶ　『生きる』1 号を読んで　『生きる』1 号に想う（北海道栗山町・本田徹）、他人事にさせないために（北海道当別町・穴澤義晴）、「心をひとつに」～優しさは伝染する～（栃木県足利市・鈴木光尚）、語り継ぐこと（福井県鯖江市・山田絵美子）、震災から 2 年を迎えて（滋賀県東近江市・戸嶋幸司）、仲間の声を伝えたい（鳥取県米子市・砂口真）、『生きる』1 号を読んで想う（香川県綾川町・岡下進一）、この想いを伝えていく（香川県善通寺市・西梶三枝）、仲間が地域で生きてきた証（高知県檮原町・立道斉）、『生きる』からの学び（沖縄県南風原町・照屋仁士）／編集後記／（裏表紙）村上和三（岩手県陸前高田市）

【第 3 号（2014 年 5 月）】はじめに／目次／東日本大震災に関する青年団関係の動き―2013 年 3 月 12 日～2014 年 3 月 11 日―／第 1 章　暮らす　町がかわっていく（岩手県陸前高田市・泉田将治）、震災復興に伴う企業再編の動き（宮城県登米市・岩崎大輔）、故郷・陸前高田に戻って（陸前高田市・岡本翔馬）、県外避難者の現在（福島県浪江町/秋田県秋田市・古農満）、それぞれの震災―3 年経って―（宮城県山元町・齋藤緑）、今、複雑化する地域

の思い（宮城県角田市・佐久間祥平）、東日本大震災から3年を振り返って（岩手県大槌町・佐々木訓）、私の経験している震災・原発事故（福島県浪江町/南相馬市・志賀重夫）、未来の陸前高田を考える（岩手県陸前高田市・松田恵美子）、青年団の一人として（福井県鯖江市・山田絵美子）、私の「生きる」（群馬県高崎市・湯浅直樹）、前を見て生きていく（福島県会津若松市・渡辺直也）／第 2 章 まなぶ・つたえる・つながる 「あいちから」活動報告（「あいちから」実行委員会）、青森県の支援や避難者受け入れ（青森県青森市・工藤晶信、青森県八戸市・山田智久）、山形県と東日本大震災（山形県山形市・小関新太郎）、それぞれが何をすべきか考えていく（秋田県大仙市・齋藤和彦）、いわて復興スタディツアー（静岡県青年団連絡協議会）、自主製作映画「Message」の取り組み（3.loveline 岡山→東日本実行委員会）、忘れてはいけないあの日のこと（北海道長沼町・田村芳克）、北海道北見市留辺蘂町・吉田祐美）、県団旅行 in 宮城（福井県連合青年団）、私のまわりの支援活動（山形県飯豊町・細川由貴）、北海道・東北ブロック研修会（北海道・東北青年団連絡協議会）／「福島で学ぶフィールドワーク」の記録　大震災直後の福島県に派遣されて（石川県羽咋市・石井昌志）、たくさんの人に支えられて震災から 1 ヶ月で再オープン（道の駅よつくら港駅長・白土健二）、福島で学ぶフィールドワークを通じた東北支援に心より感謝申し上げます（特定非営利活動法人 3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会・赤池孝行）、頑張る人の笑顔あふれる～浜風商店街の訪問～／参加者から寄せられた感想　記憶と記録に残していく（北海道・渡辺泰典）、テレビだけでは分からなかったこと（岩手県・松田恵美子）、我々はもう歩みはじめている（宮城県・佐久間祥平、武藤順子）、地域で防災活動を（秋田県・齋藤和彦）、もっと早く行けばよかった（群馬県・天笠荘一）、大切なのはこれから（石川県・宮義一）、「キッカケ」つくり発信していこう（岐阜県・片桐充弘）、あらためて地震の備えを（静岡県・朝原桂子）、逆にこちらが元気をもらった（愛知県・神谷幸典）、つながる想い（滋賀県・藤原麻美）、押しつぶされるかと思った（和歌山県・中早洋行）、あの時感じたことは絶対に忘れない（鳥取県・中村美香）、自然の力の脅威（岡山県・渡邊誠、青井麻由美）、精一杯、生きていく（香川県・十川由人）、参加者が主体者となる活動を（高知県・大崎博士）、寒い海辺と温かいコーヒー（長崎県・梅川美沙乃）、人はそんなに弱くない（大分県・阿南貴詞）、なんでもっと早く行かなかったのか（宮崎県・松田裕明）、強く生き抜く地から（宮崎県・堀口美穂）、地域でも伝え続けていく（鹿児島県・桐野貴行、山下真奈美）、福島でもらった「お土産」（沖縄県・照喜名朝尚）、私たちの誓い／第 3 章　広がる・広げる―今後に向けて　青年が地域を元気にする（東京都日野市・池上洋通）、青年たちへの期待（岩手県陸前高田市・大坪涼子）、法政大学キャリアデザイン学部被災地実習の取り組み（埼玉県さいたま市・佐藤一子）、震災に学ぶ（北海道栗山町・澤田康文）、中国青年との学習交流、「生きる」そして生きていく（北海道遠軽町・山中ちあき）／あとがき

【第 4 号（2016 年 3 月）】はじめに／目次／第一章 原発避難者の記録　県外避難者の現在（その 2）：2014 年～2015 年　古農　満（福島県浪江町／秋田県秋田市）／第二章　暮らしと地域の歩み　自分に出来る事（及川龍徳・岩手県大船渡市）、まもなく・・・（松田恵美子・岩手県陸前高田市）、震災手記（吉田香代・岩手県陸前高田市）、高橋弘則（宮城県気仙沼市）、里海（まち）の防潮堤（芳賀孝司・宮城県気仙沼市）、仮設住宅　悲喜こもごも（芳賀広美・宮城県気仙沼市）、受入事業に協力して＜被災地学習の取組み＞（岩崎大輔・宮城県登米市）、震災を経て～５年目が来る～（齋藤緑・宮城県山元町）、震災のこと（窪田恵美・宮城県丸森町）、あんぽ柿生産再開３年目の現状（宍戸克己・福島県伊達市）／第三章　震災への想いふくしま復興スタディツアー（静岡県青年団連絡協議会）、「想い」を風化させないために（藤原麻美・滋賀県高島市）、考え、行動する年に（久保隆治・和歌山県日高郡みなべ町）、生きる（延江典子・岡山県岡山市）、防災・減災も支援になる（鳥越香織・岡山県倉敷市）／あとがき／資料・東日本大震災に関する青年団関係の動き―2014 年 3 月～2016 年 1 月―／『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 1～3 号内容（目次）一覧

【第 5 号（2017 年 2 月）】はじめに／目次／第一章 手記・ききとりの記録　資料・ご当地ヒーローで防災啓発～被災したからこそ伝えられること～／次の世代につなげる（岩手県陸前高田市・岡本翔馬）／あの日から...そして、これから（岩手県陸前高田市・松田恵美子）／信念

に沿い、1 日 1 日を丁寧に生きる（岩手県陸前高田市・佐々木信秋）／気仙沼市の現状と...（宮城県気仙沼市本吉町・芳賀広美）／東日本大震災を受けて（宮城県本吉郡南三陸町・工藤大樹）／良い地域のために～震災ボランティアがきっかけで～（宮城県黒川郡大郷町・金須健）／宮城に住んでいて（宮城県黒川郡大郷町・千葉加奈子）／当時をふりかえり・・・そしてこれから（宮城県黒川郡大和町・武藤順子）／今、感じること（宮城県東松島市・岩崎大輔）／「震度 7」と自分の役割（宮城県角田市・佐久間祥平）／震災を経て 2016（宮城県亘理郡山元町・齋藤緑）／東日本大震災を経験して（千葉県市原市・佐藤竜太）／私が見た当時の事・今の事（福島県会津若松市・長谷川綾）／原発も化石燃料にも頼らない社会へ（群馬県高崎市・湯浅直樹）／防災減災を伝えるむずかしさ（東京都・小川光一）／東日本大震災手記（東京都文京区・高嶋聡平）／去る者は日々に疎し（埼玉県志木市・棚田一論）／6 年がたち思うこと（東京都大田区・鳥澤文彦）／資料・熊本地震被災報告／生きる（石川県羽咋市・石井昌志）／6 年（滋賀県蒲生郡日野町・福永晃仁）／資料・阪神淡路大震災の記録～近畿ブロック青年団の取り組み～／いま、思うこと（東京都三鷹市・宮本清一）／生きる（岡山県倉敷市・中園謙二）／生きる（香川県綾歌郡綾川町・十河由人）／愛媛に「生きる」（愛媛県喜多郡内子町・水本誠時）／原子力発電所について考えること（佐賀県佐賀市川副町・山田浩史）／熊本地震（熊本県山鹿市・岡本了）／1 日も早く生活を取り戻したい～平成 28 年・熊本地震の日から今まで～（熊本県熊本市・古奥紗耶佳）／震災から学んだこと、これからも・・（沖縄県島尻郡南風原町・照屋仁士）／第二章　取材の記録　平成 28 年度岡山県青年団協議会・合同研修会「ガチトーク 2017～震災から学ぶ、地域づくり～」　パネリスト（宮城県気仙沼市・高橋弘則、熊本県熊本市・古奥紗耶佳、岡山県新見市・仲田俊範）／続けることの意義～第 60 回市青協青年芸能祭～　報告・佐久間祥平／こころの 6 年間～きぼうのたねカンパニー～（福島県二本松市・菅野瑞穂）／想いつながるふるさとプロジェクト～Play for KUMAMOTO～　報告・中園謙二／資料・ふるさとプロジェクト in 熊本旅日記・記録／あとがき（中園謙二・岡山県倉敷市）／資料・1. 日本青年団協議会震災パネル・2. 東日本大震災並びに熊本地震に関する青年団関係の動き－2016 年 2 月 16 日～2017 年 2 月 14 日－・3.『生きる～東日本大震災と地域青年の記録～』第 1～4 号内容（目次）一覧